出雲市の文化財報告 40

高西遺跡 Ⅱ

出雲都市計画道路事業［医大前新町線（4 工区）］に伴う埋蔵文化財調査報告書

2019

出雲市教育委員会

序

本書は，出雲市都市建設部まちづくり推進課の依頼を受けて，2017（平成29）年度に実施した出雲都市計画道路事業［医大前新町線（4工区）］の予定地内に所在する高西遺跡の発掘調査成果を記録した報告書です。

高西遺跡は，出雲市塩冶町の神戸川の自然堤防上に位置します。今回の発掘調査においては，弥生時代や古墳時代後期の溝などの遺構を発見しました。

また，弥生時代前期～近世の土器と，中世の稲の品種名や地名が書かれた種子札が出土しました。この種子札は，出雲地域の農業史の研究において，重要な発見となりました。

こうした調査成果が，地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高め，歴史学習の助けとなれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたり，ご協力いただきました地元住民の皆様や，関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

2019（平成31）年3月

出雲市教育委員会

教育長　槇野　信幸

例　言

1．本書は，出雲都市計画道路事業［医大前新町線（４工区）］に伴う高西遺跡の第２次の埋蔵文化財調査報告書である。

2．試掘調査・発掘調査は，下記の期間において実施した。

　試掘調査　　2017（平成 29）年３月 16 日

　発掘調査　　2017（平成 29）年 10 月 13 日～ 2018（平成 30 年）３月 12 日

3．発掘調査を実施した地番は，次のとおりである。

島根県出雲市塩冶町 871 番地３外

4．調査は下記の体制で実施した。　※カッコ内の数字は年度

調査主体　出雲市市民文化部

文化財課	課長	佐藤隆夫（2016 ～ 2017）
市民文化部次長兼文化財課	同	木村　亨（2018）
文化財課	課長補佐	宍道年弘（2016 ～ 2017）
同	課長補佐	景山真二（2018）
同	係長	原　俊二（2016 ～ 2018）
同	主任	須賀照隆（2016，調査員）
同	主任	江角　健（2017 ～ 2018，調査員）
同	臨時職員	川瀬　優（2017 ～ 2018，調査補助員）

整理作業員　荒木恵理子，妹尾順子，中島和恵，前島浩子

5．調査・整理作業にあたっては，下記の方々及び機関からご指導・ご協力をいただいた（敬称略，順不同，カッコ内は 2018 年度の所属）。

島根県教育庁文化財課，島根県教育庁埋蔵文化財調査センター，島根県立古代出雲歴史博物館，勝部智明（島根県教育庁文化財課），人見麻生（島根県教育庁文化財課），澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館），西尾克己（松江市史編集委員会）

6．発掘作業（安全管理，発掘作業員の雇用，機材等の借上）については，株式会社トーワエンジニアリングに調査支援業務を委託した。

7．第４章 自然科学分析については，文化財調査コンサルタント株式会社へ委託した。

8．本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり，方位は座標北を示す。レベル高は海抜高を示す。

9．本書掲載の遺物実測図については，調査補助員の川瀬が作成した。

10．本書に掲載した写真は，江角が撮影した。

11．本書の編集は，江角が行った。執筆は，第４章を渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社），第５章第１節を髙橋周（出雲弥生の森博物館専門研究員），その他を江角が担当した。

12．高西遺跡の出土遺物及び実測図，写真は出雲市文化財課で保管している。

13. 本文中で使用した遺構の略号は次のとおりである。

SK：土坑　SD：溝

遺構番号については，高西遺跡の第 2 次発掘調査であることから，200 番台をあて，溝には 201 番から，土坑には 211 番からの番号を割り当てた。

14. 第 5 章 1 節の木簡釈文の数字は，木簡の長さ×幅×厚さを示す（単位は㎜）。また，右端の 3 桁の数字は，『木簡研究』（木簡学会編）の型式番号である。

15. 本書を作成するにあたり，編年および過去の調査について下記の参考文献を利用した。

【編年参考文献】

弥生土器

松本岩雄・正岡睦夫編 1992『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社

須恵器

岡田裕之他 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』島根県古代文化センター

陶磁器

中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

瓦

花谷浩 2016「三井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について」『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』出雲市教育委員会

【高西遺跡・神門寺付近遺跡・神門寺境内廃寺に関する既刊報告書】

出雲市教育委員会 2009『神門寺付近遺跡Ⅰ』出雲市の文化財報告 9

出雲市教育委員会 2010『神門寺付近遺跡Ⅱ』出雲市の文化財報告 13

出雲市教育委員会 2013『神門寺付近遺跡Ⅲ・高西遺跡』出雲市の文化財報告 23

出雲市教育委員会 2016『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』出雲市の文化財報告 31

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……1

第１節　調査の経緯……1

第２節　調査の経過……1

第２章　遺跡の位置と環境……2

第１節　地理環境……2

第２節　歴史環境……4

第３章　調査の成果……7

第１節　過去の調査……7

第２節　今回の調査概要……8

第３節　基本層序……8

第４節　遺構の詳細……10

第５節　遺物の詳細……15

遺物観察表……30

第４章　自然科学分析……35

第１節　高西遺跡発掘調査に係る花粉分析及び放射性炭素年代測定…35

第５章　まとめ……43

第１節　高西遺跡出土の文字資料について……43

第２節　調査の成果……47

挿図目次

第 1 図　高西遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第 2 図　調査地周辺の空中写真……3
第 3 図　高西遺跡の位置……4
第 4 図　調査地位置図……7
第 5 図　調査地位置図……8
第 6 図　基本層序……8
第 7 図　調査区土層図……9
第 8 図　調査区平面図……10
第 9 図　土坑 SK211 実測図……10
第 10 図　溝 SD201 平面図……11
第 11 図　溝 SD202・203 実測図……12
第 12 図　溝 SD202 遺物出土状況図……13
第 13 図　溝 SD203 遺物出土状況図……13
第 14 図　溝 SD202 上面足跡平面図……14
第 15 図　土坑 SK211 出土遺物……15
第 16 図　溝 SD201 出土遺物……15
第 17 図　溝 SD202 出土遺物（1）……16
第 18 図　溝 SD202 出土遺物（2）……17
第 19 図　溝 SD203 出土遺物……18
第 20 図　2 層出土遺物……19
第 21 図　3 層出土遺物（1）……19
第 22 図　3 層出土遺物（2）……20
第 23 図　3 層出土遺物（3）……22
第 24 図　3 層出土遺物（4）……23
第 25 図　4 層出土遺物（1）……25
第 26 図　4 層出土遺物（2）……26
第 27 図　4 層出土遺物（3）……27
第 28 図　3・4 層出土遺物（1）……28
第 29 図　3・4 層出土遺物（2）……29
第 30 図　3・4 層出土遺物（3）……29
第 31 図　調査区平面図……35
第 32 図　試料採取地点（№1～№3）断面図……35
第 33 図　№4 地点深掘りセクション模式断面図……36
第 34 図　花粉ダイアグラム（№1 地点）……37
第 35 図　花粉ダイアグラム（№2 地点）……37
第 36 図　花粉ダイアグラム（№3 地点）……37
第 37 図　花粉ダイアグラム（№4 地点）……38
第 38 図　暦年較正結果……39
第 39 図　暦年較正値の分布……39
第 40 図　高西遺跡周辺地域のコンターマップ……41
第 41 図　刻書須恵器……43
第 42 図　木簡実測図……43
第 43 図　遺構関係図……47

挿表目次

第 1 表　調査の経過……1
第 2 表　微化石概査結果……36
第 3 表　花粉組成表……38
第 4 表　年代測定結果一覧表……39

図版目次

図版 1　1 調査区全景
　　2 調査前状況
図版 2　1 完掘状況
　　2 3 区 c-c' 断面検出状況
　　3 2 区 b-b' 断面検出状況
　　4 1 区 a-a' 断面検出状況
　　5 土坑 SK211 検出状況
　　6 土坑 SK211 完掘状況
図版 3　1 溝 SD201 検出状況
　　2 溝 SD201 完掘状況
　　3 溝 SD202 検出状況
　　4 溝 SD202 完掘状況
図版 4　1 溝 SD202 2 区足跡検出状況
　　2 溝 SD202 2 区足跡完掘状況
　　3 溝 SD202 足跡完掘状況
　　4 溝 SD202 3 区足跡調査状況
図版 5　1 溝 SD203 検出状況
　　2 溝 SD203 完掘状況
　　3 溝 SD203 2 区土器出土状況
　　4 2-3 区間深掘り調査状況
図版 6　土坑 SK211 出土遺物，溝 SD201 出土遺物
図版 7　溝 SD202 出土遺物
図版 8　溝 SD202 出土遺物，溝 SD203 出土遺物
図版 9　2 層出土遺物，3 層出土遺物
図版 10　3 層出土遺物
図版 11　3 層出土遺物
図版 12　3 層出土遺物
図版 13　4 層出土遺物
図版 14　4 層出土遺物
図版 15　4 層出土遺物，3・4 層出土遺物
図版 16　3・4 層出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯

出雲都市計画道路医大前新町線は，出雲市塩冶町の島根大学医学部前と出雲市今市町を南北方向に結ぶ新設道路である。今回の調査箇所は，高西遺跡の範囲内であることから，事前に範囲確認調査を行った。範囲確認調査において，道路予定地内に遺構及び遺物を確認したことから，文化財保護法第94条第１項に基づく通知が出雲市都市建設部まちづくり推進課から島根県教育委員会へ，2017（平成29）年８月28日に提出された。

出雲市教育委員会は，2017（平成29）年９月11日に，まちづくり推進課から，埋蔵文化財発掘調査の実施依頼を受け，2017（平成29）年11月９日から2018（平成30）年３月12日まで現地調査を実施した。

第２節　調査の経過

2017（平成29）年３月に遺跡の有無を確認するために３箇所でトレンチ調査を行い，その内２箇所で遺構・遺物を発見した（第４図参照）。遺物包含層は事業予定地の南側に広がると想定し，県教委，事業者と協議し，遺構が残存する可能性が高い南側に調査区を設定した。

表土は重機で掘削し，運搬車で掘削土を一時置場へ運搬した。その後，ベルトコンベアを用い人力で掘削を行った。

第１表　調査の経過

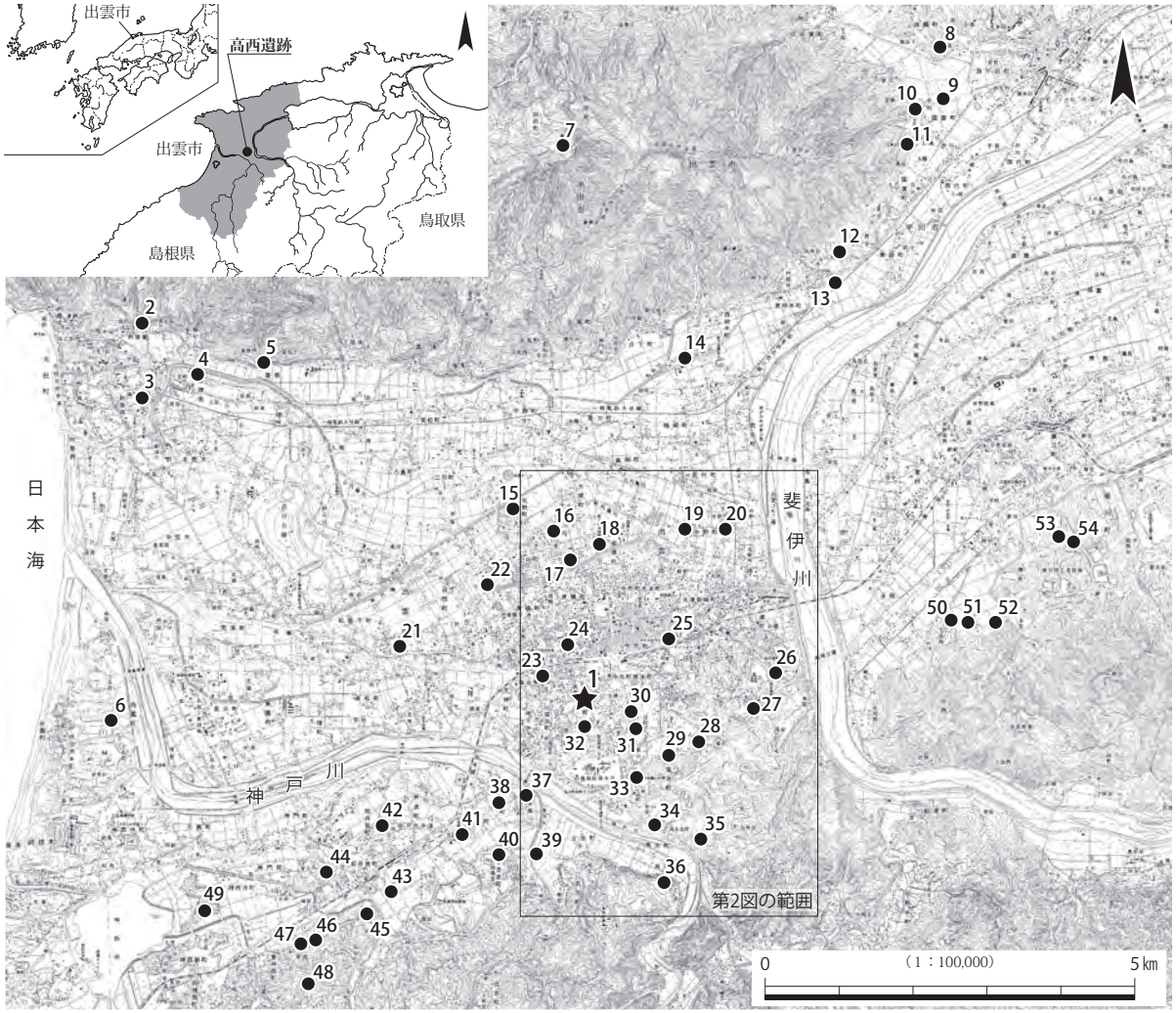
年	月日	内容
2017年（H29）	2月20日	埋蔵文化財の事前調査依頼　（出雲市まちづくり推進課）
	3月2日	県教委へ文化財保護法第99条第1項通知（範囲確認調査）
	3月16日	試掘調査実施（３箇所）
	3月21日	県教委へ調査結果の報告
	8月28日	出雲市まちづくり推進課から県教委へ文化財保護法第94条第1項通知
	9月1日	県教委から文化財保護法第94条第4項勧告
	9月11日	埋蔵文化財発掘調査の実施依頼　（出雲市まちづくり推進課）
	10月12日	県教委へ文化財保護法第99条第1項通知
	11月9日	調査開始
2018年（H30）	3月2日	人見麻生氏（県文化財課）現地指導及び遺跡の取扱協議
	3月12日	調査終了
	3月26日	県教委から遺跡の取扱い回答
	6月30日	出雲弥生の森博物館職員リレー講座において「高西遺跡の調査」発表

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理環境

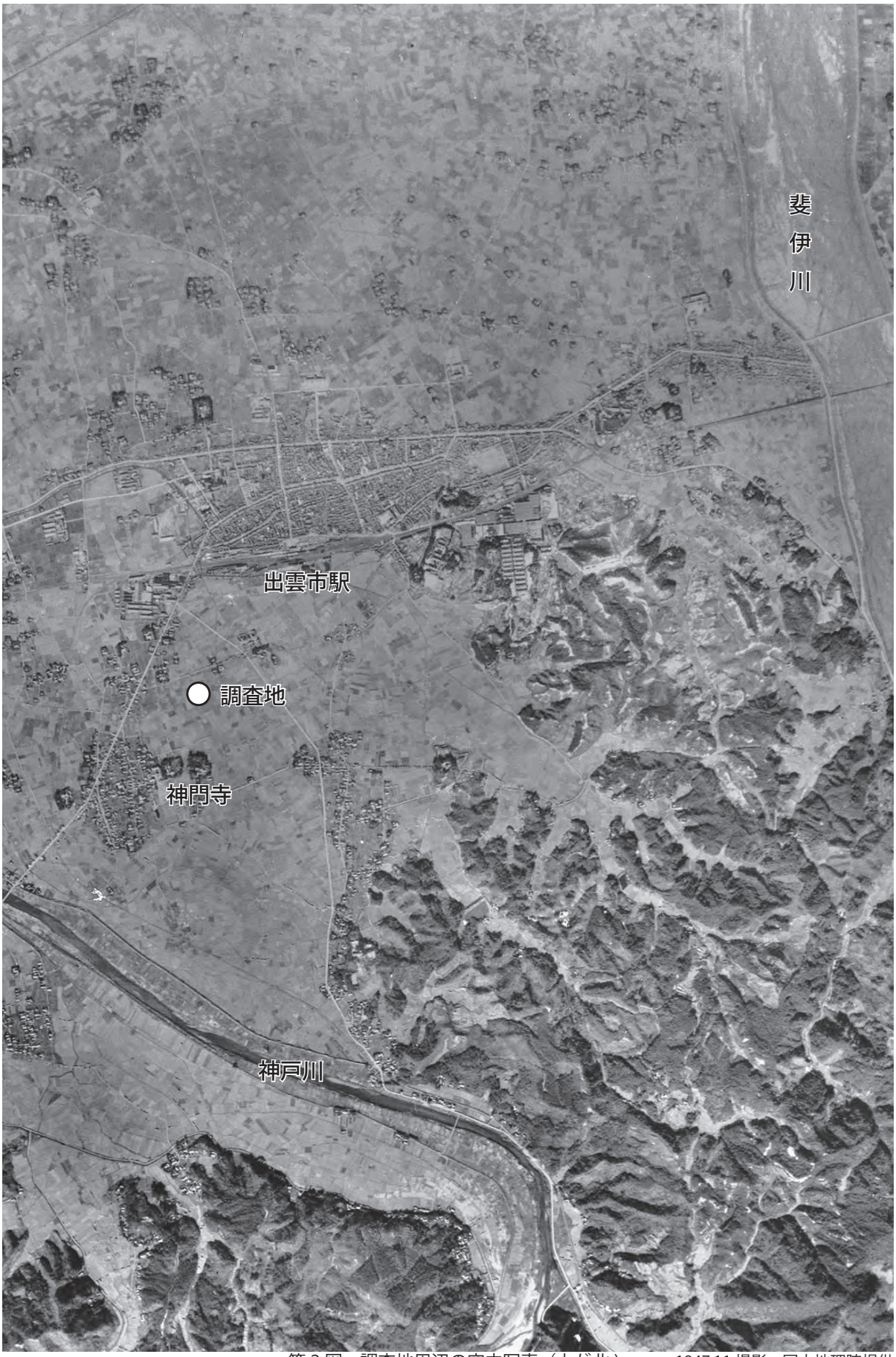
高西遺跡は島根県出雲市塩冶町に所在し，『出雲国風土記』の神門郡条の新造院に想定される神門寺境内廃寺の北に位置する。

遺跡の所在する出雲市は島根県東部に位置し，北は島根半島，南は中国山地に囲まれ，東は宍道湖に，西は日本海に面している。出雲平野は，中国山地に源を発し宍道湖に流れ込む斐伊川（ひいかわ）と，日本海



1. 高西遺跡　2. 出雲大社境内遺跡　3. 鹿蔵山遺跡　4. 原山遺跡　5. 菱根遺跡　6. 上長浜貝塚　7. 鰐淵寺
8. 西西郷廃寺　9. 源代遺跡　10. 国富中村古墳　11. 上島古墳　12. 大寺１号墳　13. 青木遺跡　14. 山持遺跡　15. 矢野遺跡
16. 小山遺跡　17. 蔵小路西遺跡　18. 姫原西遺跡　19. 中野美保遺跡　20. 中野清水遺跡　21. 白枝本郷遺跡　22. 白枝荒神遺跡
23. 天神遺跡　24. 海上遺跡　25. 今市大念寺古墳　26. 西谷墳墓群　27. 長者原廃寺　28. 菅沢古墓　29. 上塩冶横穴墓群
30. 角田遺跡・宮松遺跡　31. 上塩冶築山古墳・築山遺跡　32. 神門寺付近遺跡・神門寺境内廃寺　33. 上塩冶地蔵山古墳
34. 三田谷Ⅰ遺跡　35. 光明寺３号墓　36. 小坂古墳　37. 古志本郷遺跡　38. 下古志遺跡　39. 放レ山古墳　40. 妙蓮寺山古墳
41. 宝塚古墳　42. 知井宮多聞院遺跡　43. 浅柄遺跡　44. 神門横穴墓群　45. 間谷東古墳　46. 九景川遺跡　47. 御崎谷遺跡
48. 北光寺古墳　49. 山地古墳　50. 後谷遺跡　51. 稲城遺跡　52. 小野遺跡　53. 杉沢遺跡　54. 三井Ⅱ遺跡

第１図　高西遺跡の位置と周辺の遺跡



第 2 図　調査地周辺の空中写真（上が北）　　1947.11 撮影　国土地理院提供

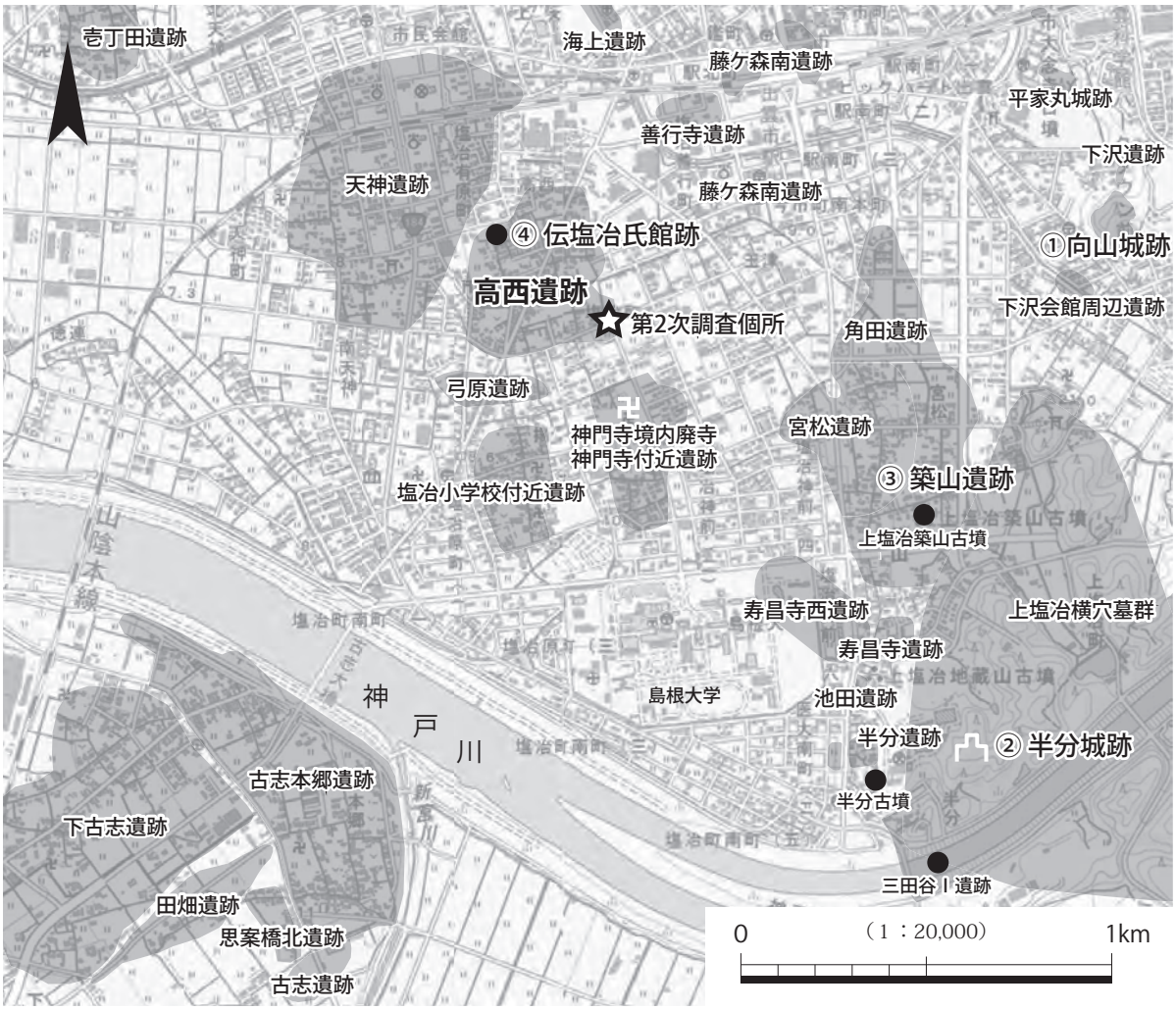
に注ぐ神戸川（かんどがわ）の二大河川の沖積作用で形成された県内最大の平野である。

出雲平野は，東西約 20㎞，南北約８㎞の範囲に及ぶが，現在の地形となるまでには大きな変遷を経ている。約 6,000 年前の縄文海進時には，出雲平野にあたる部分には大きく海が入り込み，島根半島と中国山地とは水域で隔てられていた。神戸川流域では，約 4,000 年前の三瓶山の火山活動による火山噴出物が流れ込むようになり，出雲平野西部での平野形成が進む。斐伊川は，江戸時代の斐伊川の流路の変化以降，下流域となった宍道湖西岸域では，上流域で盛んであった「たたら製鉄」に伴う「かんな流し」により排出された大量の土砂が流入するようになる。これらの土砂の堆積により平野が拡大し，現在の地形が形成された。

高西遺跡は，出雲平野の中央部の神戸川東岸に形成される自然堤防上に位置する。

第２節　遺跡の歴史環境

このたびの高西遺跡の調査では，弥生時代前期～古墳時代の水路跡を確認した。高西遺跡近隣での発掘調査事例は乏しいが，周辺部では , 天神遺跡などの大規模な弥生集落跡や , 出雲国風土記に記載のある朝山新造院と想定される神門寺境内廃寺などがある。



第３図　高西遺跡の位置

以下，縄文時代から近代にかけての出雲平野の主要遺跡を概観する。

縄文時代　出雲平野における遺跡の出現は，縄文時代早期で，大社湾岸に位置する上長浜貝塚（6）や，北山山麓に所在する菱根遺跡（5），山持遺跡（14）が知られる。

縄文海進時（前期頃）には，海面上昇の影響により，人々の生活の場は標高が高い丘陵部や縁辺部に限られる。

海退が進む後期から晩期になると，標高の低い場所でも人々の活動痕跡が確認できる。晩期の竪穴建物内から打製石斧が多数見つかった後谷遺跡（50）をはじめ，三田谷Ⅰ遺跡（34）など丘陵縁辺部や谷の入り口付近に遺跡立地が拡大し，更に，矢野遺跡（15）等，平野部微高地にも集落が展開するようになる。

弥生時代　弥生時代になると，斐伊川や神戸川の沖積作用により形成された平野部の微高地や丘陵縁辺部で集落が営まれるようになる。

前期の遺跡としては，縄文時代から継続して営まれてきた矢野遺跡や三田谷Ⅰ遺跡，後谷遺跡のほか，新たに形成された遺跡として古志本郷遺跡（37）や青木遺跡（13）などがある。

中期末頃，出雲平野西部では，周囲に環濠を巡らせた古志本郷遺跡や下古志遺跡（38），天神遺跡（23）のほか，姫原西遺跡（18），白枝荒神遺跡（22）など，大規模集落遺跡を中心として多数の遺跡が確認されている。

古墳時代　前期の集落としては，弥生時代から継続する古志本郷遺跡や下古志遺跡，矢野遺跡，山持遺跡などがあるが，弥生時代に平野西部で大規模に営まれていた遺跡が，古墳時代に入ると急激に衰退する。

前期末に築造された出雲平野最古の古墳は北山山麓の丘陵上に築かれた大寺１号墳（12，前方後円墳）と神西湖東岸の丘陵に築かれた山地古墳（49，円墳）である。

中期後半から後期中頃にかけては，一辺 10 m前後の古墳が群集して造られる。

後期には，前期で一度途絶えた遺跡でも土器が確認できるようになるなど，平野東部での集落遺跡が増加する。この頃，平野西部の神戸川東岸には，今市大念寺古墳（25）や上塩冶築山古墳（31），上塩冶地蔵山古墳（33）といった有力首長墳が築かれ，神戸川西岸には，首長墳に続く位置付けとして妙蓮寺山古墳（40）や放レ山古墳（39）などが連続して築かれる。また，後期以降は，横穴墓が盛んに造られた。上塩冶横穴墓群（29）や神門横穴墓群（44）など大規模な横穴墓群が確認されている。

奈良・平安時代　『出雲国風土記』の記述から，この時代の出雲国の様子を知ることができる。それによると，現在の出雲市域は，４つの郡（出雲郡，神門郡，楯縫郡，秋鹿郡）にまたがる。高西遺跡は神門郡にあり，神門郡家推定地とされる古志本郷遺跡では，多数の大型建物が確認されている。また，天神遺跡，三田谷Ⅰ遺跡や鹿蔵山遺跡（3），青木遺跡からは官衙施設関連の遺構や遺物が見つかっている。このほか，古代寺院跡の神門寺境内廃寺（32），長者原廃寺（27）では，瓦の出土や基壇等が確認されている。

中世　高西遺跡周辺は，鎌倉時代中ごろ以降，出雲平野での勢力を広げた塩冶氏の本拠とされる地域であることから，城や館などの関連する遺跡が点在する。

塩冶氏の城跡は，向山城跡（第３図①），半分城跡（②）が候補地である。館跡は，築山遺跡（③）内，土塁が今も残る浄音寺にある伝塩冶氏館跡（④）などが想定されている。

築山遺跡からは，発掘調査により 13 ～ 16 世紀の陶磁器や館に関わる遺構が発見されている。

近世・近代　斐伊川の東流は，出雲平野東部の平野の拡大を進めた。しかし，湿地帯が多く，大量の土砂の流入は河川の氾濫を頻発させたため，堤防工事や川の付け替え（川違え）などの治水工事と共に新田開発が進む。塩冶では，神戸川の築堤により農業用水が不足し一時は不毛の地となったが，高瀬川や間府川などの開削によって，斐伊川からの用水供給により，豊かな土地となり現在に至る。

参考文献

出雲塩冶史編集委員会 2009『出雲塩冶史』

出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲―出雲平野の遺跡を中心として』

高西遺跡周辺の様子（北から）

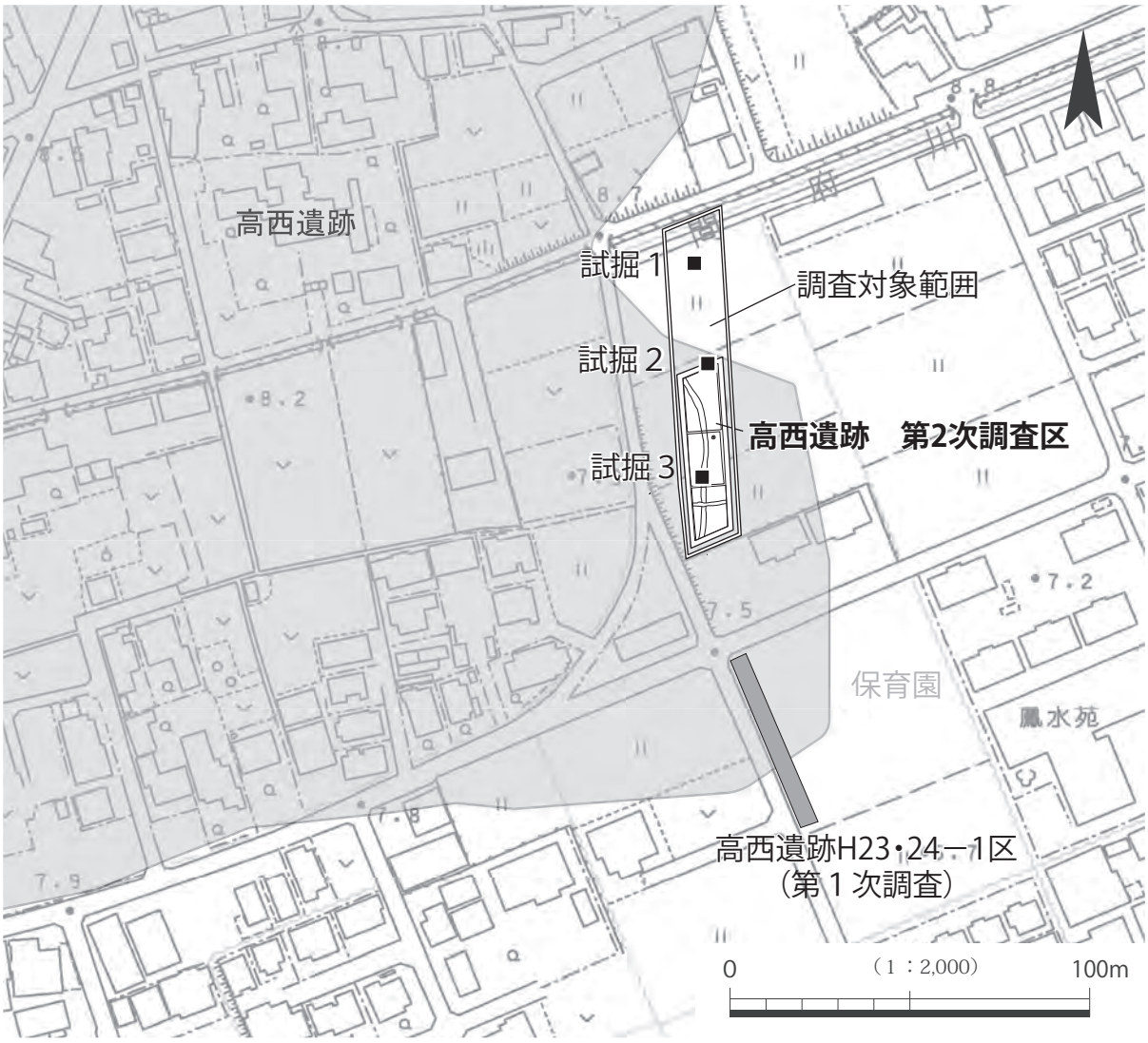
第３章　調査の成果

第１節　過去の調査

出雲都市計画道路事業医大前新町線に伴う発掘調査は，2008（平成 20）年から神門寺境内遺跡を調査し，その後，道路工事の進捗に合わせ調査地も北へ移動させてきた。神門寺の東側の工事の際には，『出雲国風土記』に記載のある，神門寺境内廃寺の瓦が見つかっている。

また，2011（平成 23）年には，高西遺跡の第１次調査を行い，畝状遺構と溝が見つかった（基本層序４層上面検出，本書第６図参照）。埋土からは奈良時代の須恵器坏蓋の転用硯や隅切瓦などが出土した。

この畝状遺構は，形状や畝の中心間隔が 0.7 mであること，埋土が砂質土であることから，道路遺構に多く見られる波板状凹凸面の可能性も考えられる。



第４図　調査地位置図

第２節　今回の調査概要

今回の調査対象範囲は，道路の新設工事部分であり，その範囲は，東西 16 m，南北 90 m を測る。事前の試掘調査により，遺物と遺構の有無について重機掘削により調査した。試掘調査は，３箇所行い南側の１箇所で包含層と遺構を，中央部で遺物包含層を確認したが，北側では確認できなかった。　この結果をもとに東西 12 m，南北 50 mを調査範囲とした。調査は１～３区に分け実施した。

第５図　調査地位置図（1：1,000）

第３節　基本層序（第５～７図）

高西遺跡２次調査の調査区の基本層序は第６図のア～エに示した。

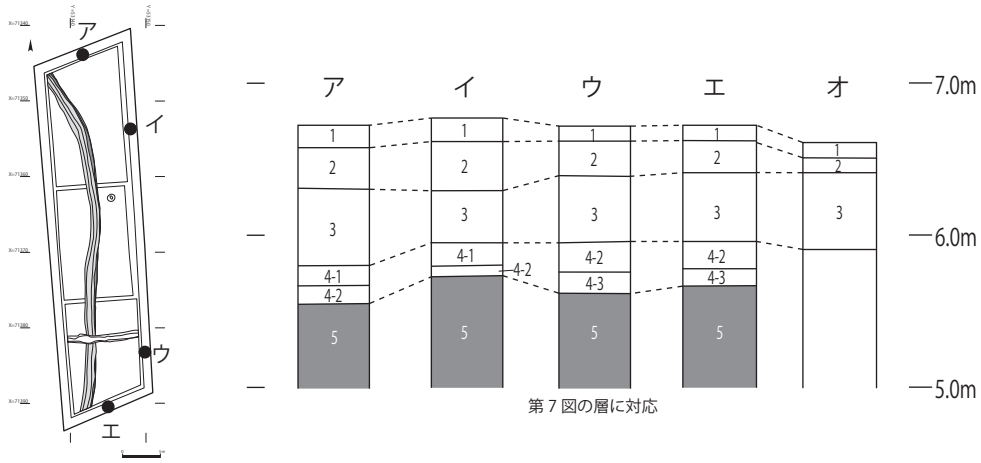
１層は表土で耕作土である。２層は土地改良による客土と考えられ近現代のものであろう。

３層は弥生土器から 19 世紀の陶磁器まで混じる遺物包含層である。土質は均一ではなく，自然堆積ではないため，19 世紀以降の造成土と考えられる。

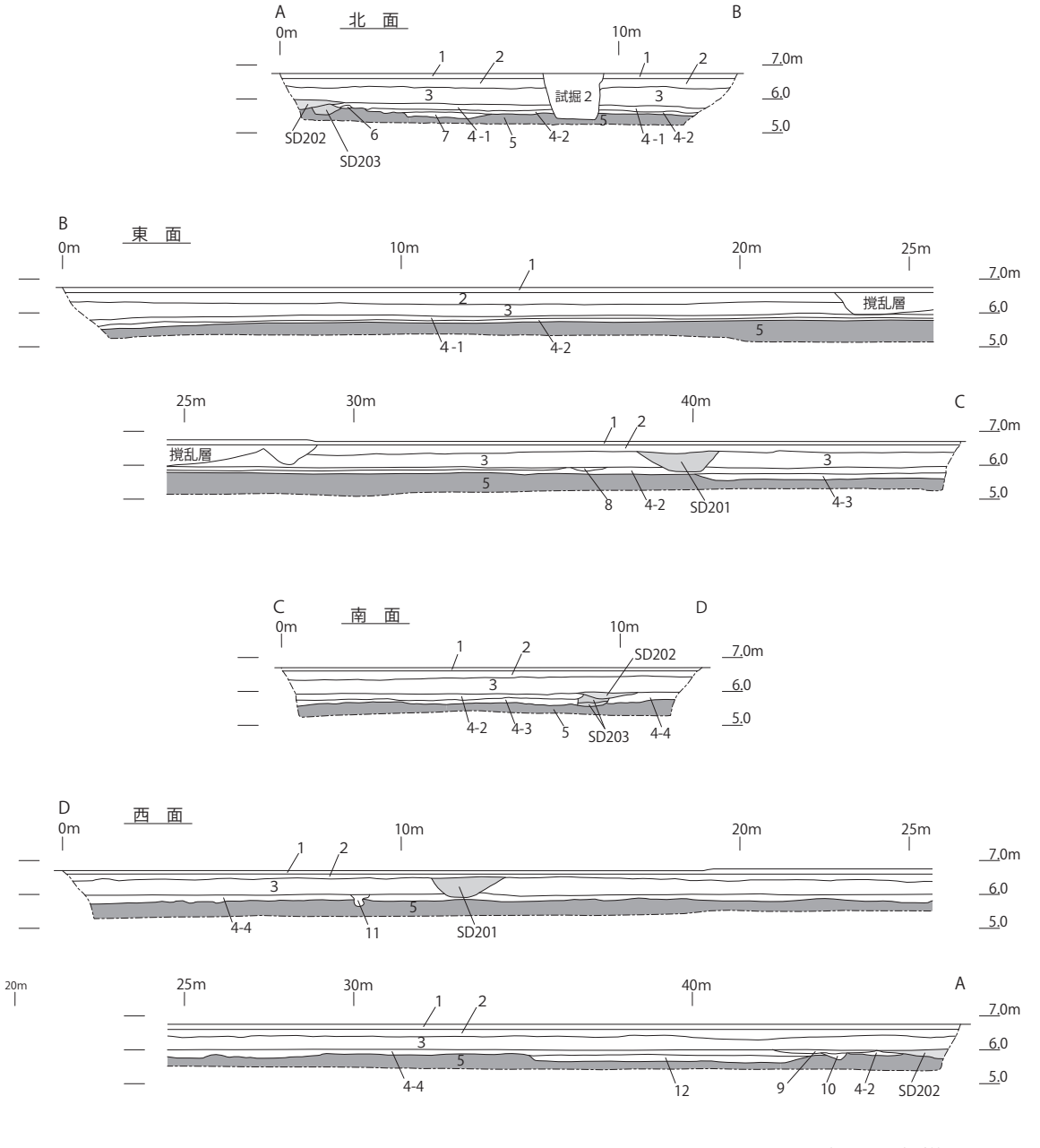
4-1 ～ 4-4 層は８世紀前半までに自然堆積した層と考えられる。この層の上面は削平されたと考えられる。第５層は，縄文時代晩期以前に堆積した地山（基盤層）である（第４章参照）。

調査の最後に５層を重機により深掘りし，遺構・遺物がないことを確認した（第６・７図）。

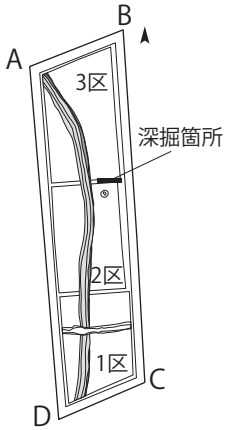
参考に第１次調査の土層図オも示す（第５・６図）。

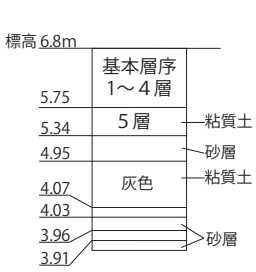


第６図　基本層序



1. 表土
2. 褐灰色土
3. 黒褐色土　下部にレキ多く混じる
4-1. 暗褐色土　1cm大レキ多く混じる
4-2. 黒褐色粘質土
4-3. 黒褐色粘質土
4-4. 黒褐色粘質土
5. 褐灰色粘質土(基盤層)
6. 褐灰色粘質土(基盤層)
7. 黒褐色粘質土
8. 黒褐色砂質土
9. 黒褐色砂質土
10. にぶい黄褐色粘質土
11. 暗褐色砂質土
12. 黒褐色粘質土





深掘りセクション(模式図)

第７図　調査区土層図

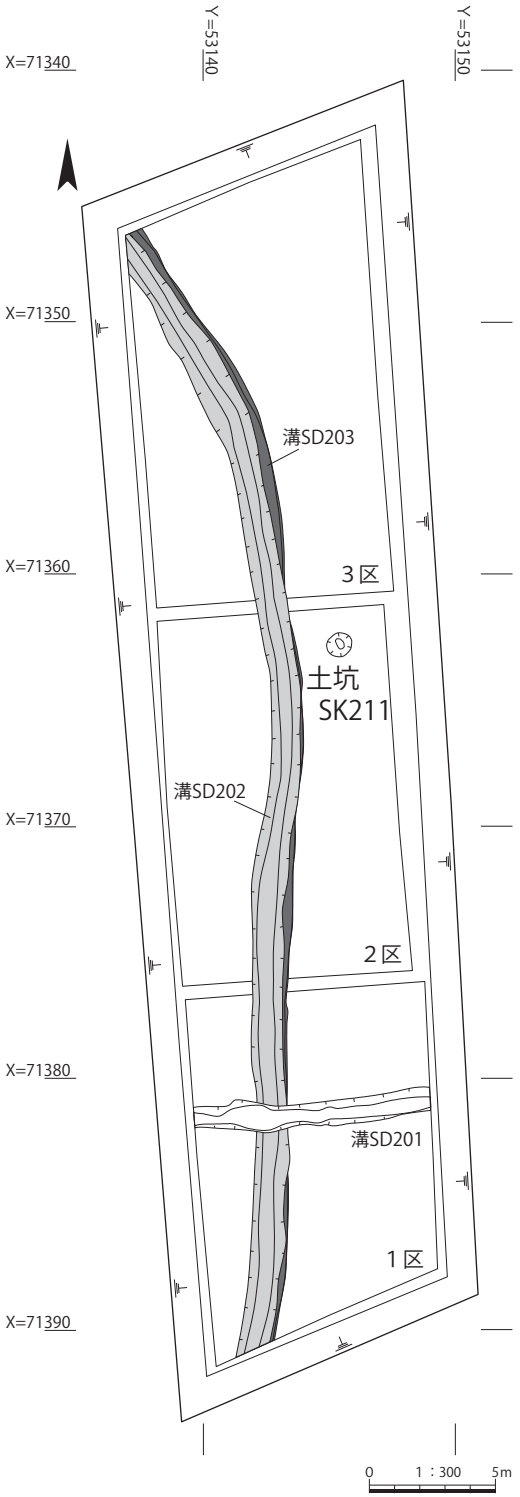
第４節　遺構の詳細（第８～14図　図版２～５）

今回の調査において発見した遺構は，土坑１基と溝３条である。溝は東西方向に１条，南北方向に２条を検出した。

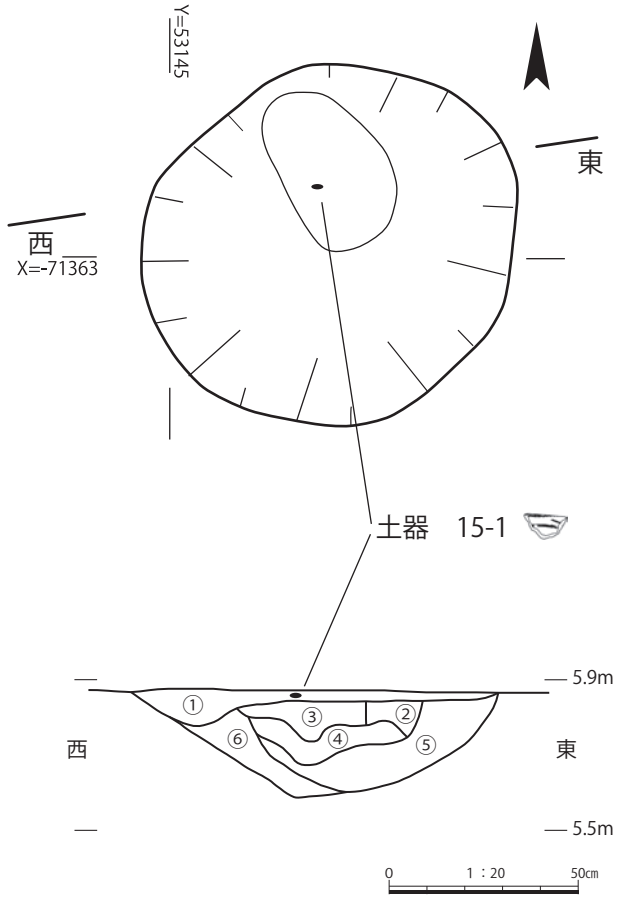
土坑 SK211（第８・９図　図版２）

SK211は，２区の北東に位置する。基本層序４-1層上面で検出。断面形は鉢状である。上幅 1.0 m，深さ 0.3 m。埋土の中段に赤色の焼土層④が混じる。遺構の埋土①～③層から弥生中期の土器の甕破片が出土した。

遺構の時期は，基本層序４層の堆積後に掘り込まれていることから，８世紀前半以降と考えられる。



第８図　調査区平面図



①黒褐色粘質土
②褐色粘土
③黒褐色粘質土
④赤褐色土　焼土が混じる
⑤褐色粘質土
⑥黒色粘質土　炭多く含む

第９図　土坑 SK211　実測図

溝 SD201（第 10・11 図　図版３）

幅２m，深さ１m，検出長 10 m。東西方向の溝。第３層上面から掘り込んでいることから，造られた時期は 19 世紀以降と考えられる。

溝 SD202（第 11・12・14 図　図版３・４）

幅 1.5 m，深さ 0.2 m，検出長 50 m。南北方向の溝 SD202 は，第４層を掘り込む。西側は自然堤防で微高地であるためその縁辺部を廻るよう蛇行している。２区・３区で足跡を多数検出した。足形が分かるものの多くは，25㎝前後の大きさで，方向は一定ではない。埋土は細砂である。

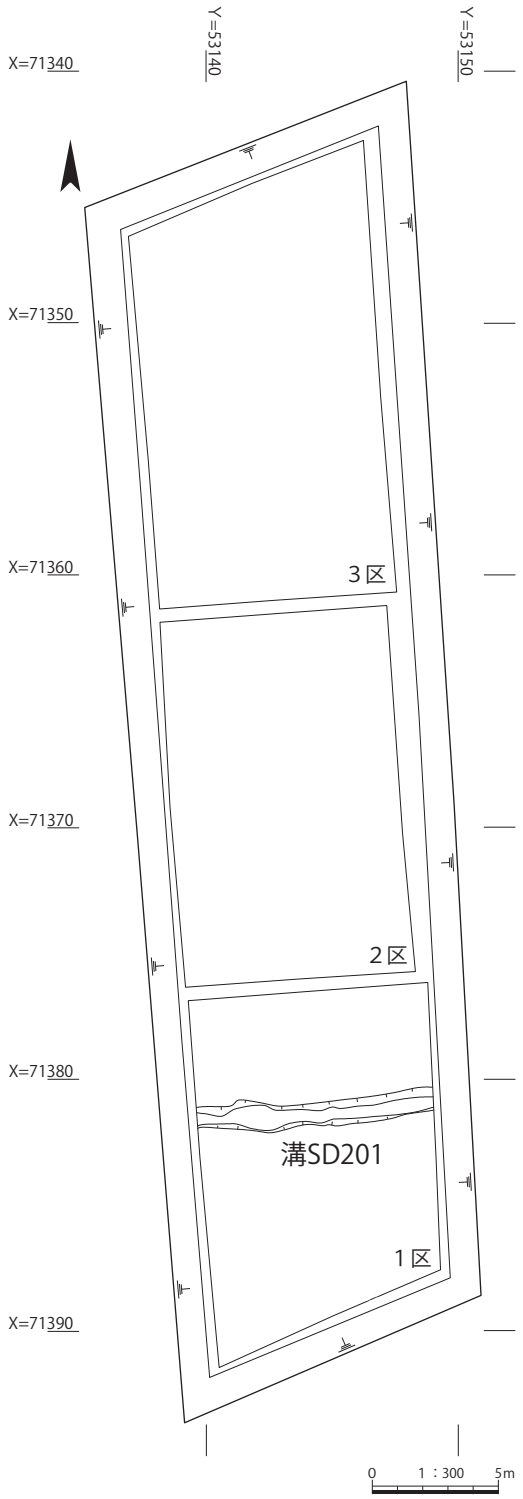
溝の勾配は底面の高さが不均一であるため，流れる方向は不明である。幅は広いが浅く，法面の勾配が緩いことから，溝上部は削平されていると考えられる。この削平は，調査区全体でみられ，第４層を削平した際に溝上部も削平されたと考えられる。

溝の堆積土内からは，弥生土器や土師器が多く出土するが，８世紀前半までに堆積したと推測できる第４層を掘り込んでいるため，掘削時期はそれ以降と考えることが妥当であろう。また，溝の上部が削平されているため，埋没時期は不明であるが，足跡は，第４層の削平後と推定する。

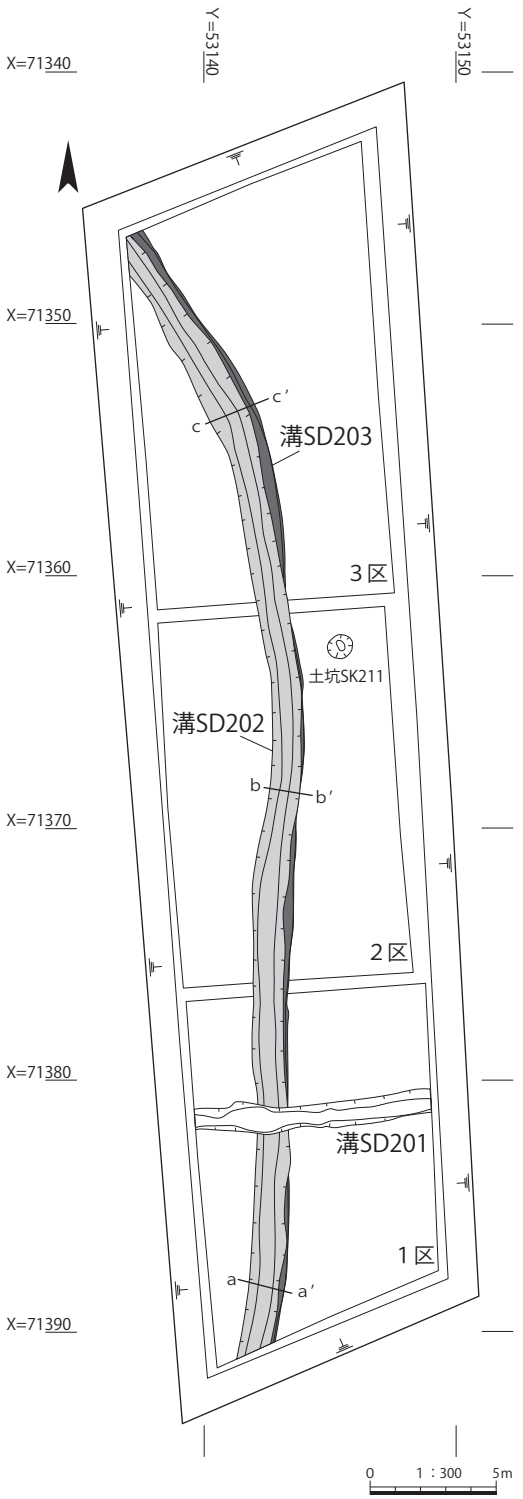
溝 SD203（第 11・13 図　図版５）

幅 0.5 m，深さ 0.2 m，検出長 50 m。南北方向の溝 SD203 は，第５層（基盤層）を掘り込む。壁はほぼ垂直に掘削され，崩れがないことから短期間の使用と考えられる。溝の勾配は底面の高さが不均一であるため，流れる方向は不明である。

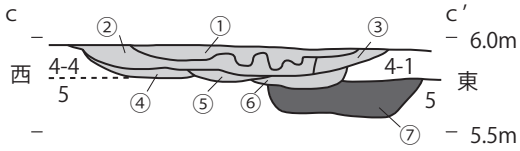
堆積土内から弥生前期～弥生終末期の土器が出土することから，この時期に機能していたと考えられる。炭素年代測定の結果では，弥生時代中期の年代が得られている（第４章参照）。



第 10 図　溝 SD201　平面図



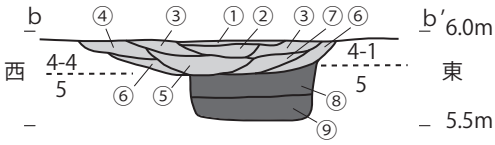
3区 c-c′ 断面



① 黒褐色砂質土　凹凸は人の足跡
② 暗褐色砂質土　砂を多く含む
③ 褐灰色粘質土
④ にぶい黄褐色砂質土　ラミナ状堆積
⑤ 暗褐色砂質土
⑥ にぶい黄褐色砂質土　ラミナ状堆積
⑦ 黒褐色粘質土　ラミナ状堆積

溝 SD202
溝 SD203

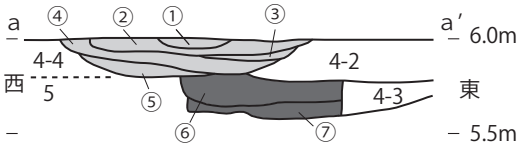
2区 b-b′ 断面



① 褐灰色砂質土
② 灰黄褐色粘土　砂を多く含む
③ 黒褐色粘土
④ 暗褐色砂質土
⑤ にぶい黄褐色砂　ラミナ状堆積
⑥ 黒褐色砂　ラミナ状堆積
⑦ にぶい黄褐色砂
⑧ 黒褐色粘土
⑨ 黒褐色砂質土

溝 SD202
溝 SD203

1区 a-a′ 断面

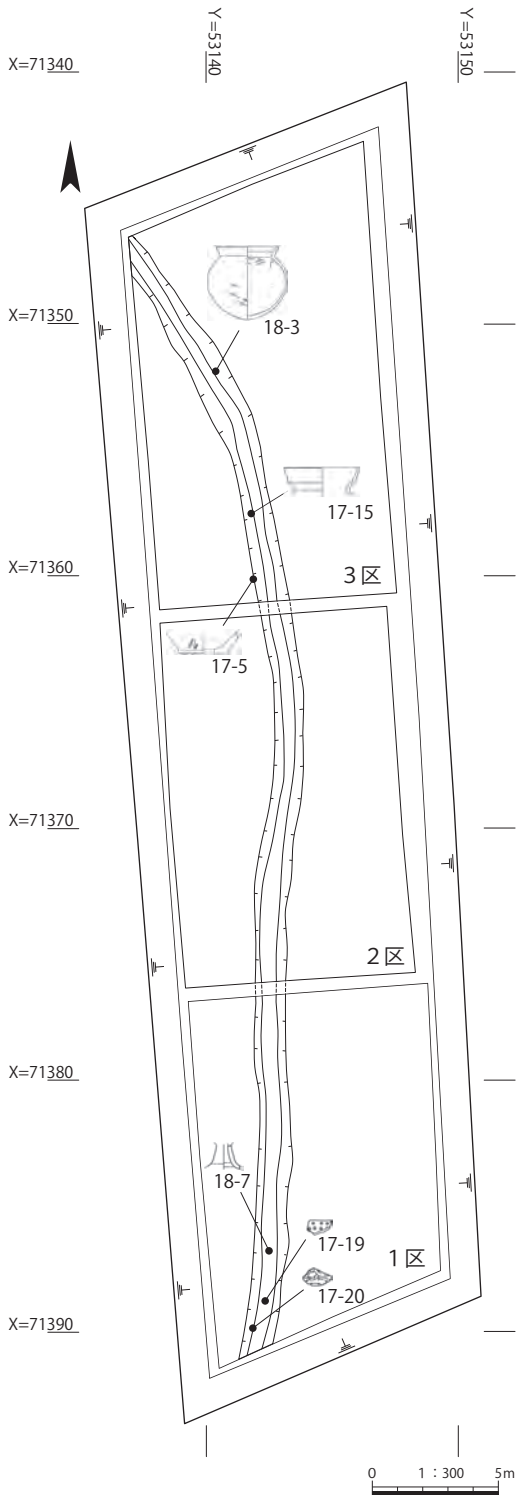


① 黒色粘質土　1~3cm 大レキ含む
② 黒褐色粘質土　足跡の中に川砂
③ 黒褐色粘質土
④ 黄褐色砂質土
⑤ 黒褐色砂質土
⑥ 黒褐色粘質土
⑦ 黒褐色砂質土　ラミナ状堆積

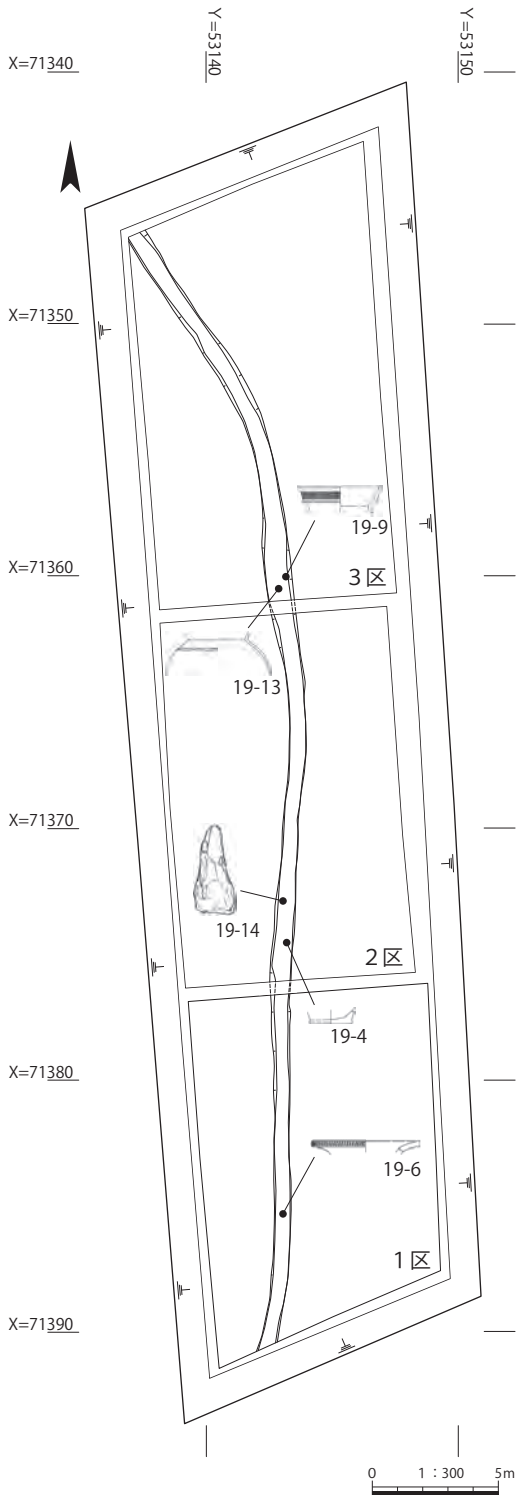
溝 SD202
溝 SD203

0　1：40　1.0m

第 11 図　溝 SD202・203 実測図



第 12 図　溝 SD202 遺物出土状況図



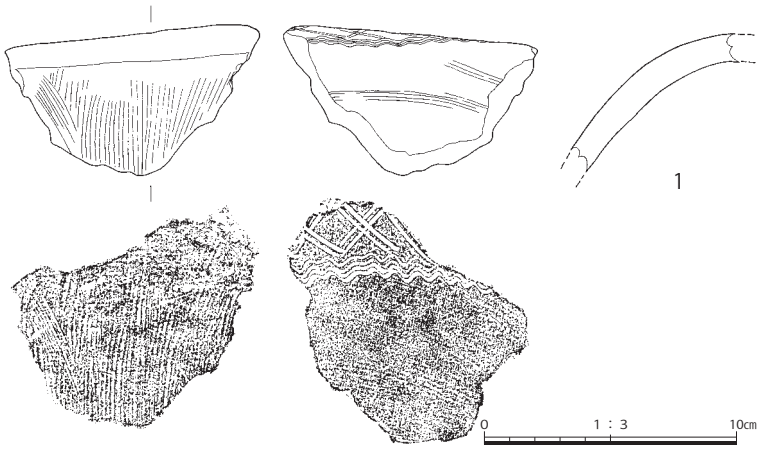
第 13 図　溝 SD203 遺物出土状況図

第 14 図　溝 SD202 上面足跡　平面図

第５節　遺物の詳細

土坑 SK211（第 15 図　図版 6）

１は弥生時代中期中葉の広口壺の口縁部で，端部を欠く。口縁内面に波状文と斜格子文が施される。外面に縦ハケメ，内面に横ハケメがある。

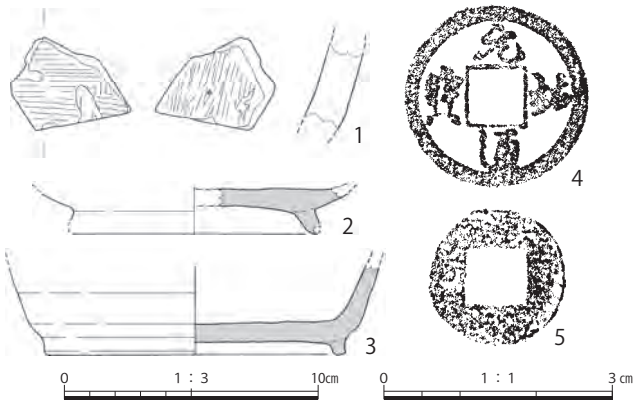


第 15 図　土坑 SK211　出土遺物

溝 SD201（第 16 図　図版 6）

１は土師質の捏ね鉢の胴部片で，時期は 14 世紀であろう。２・３は高台が付く須恵器の坏である。高台の付く位置から，時期は８世紀前半頃であろう。２の底部内面が滑らかなことから硯として使われた可能性が高い。４・５は古銭である。４は「元祐通寶」（初鋳は 1086 年・北宋）である。５は無文銭である。

溝からは８世紀以降の遺物が出土する。



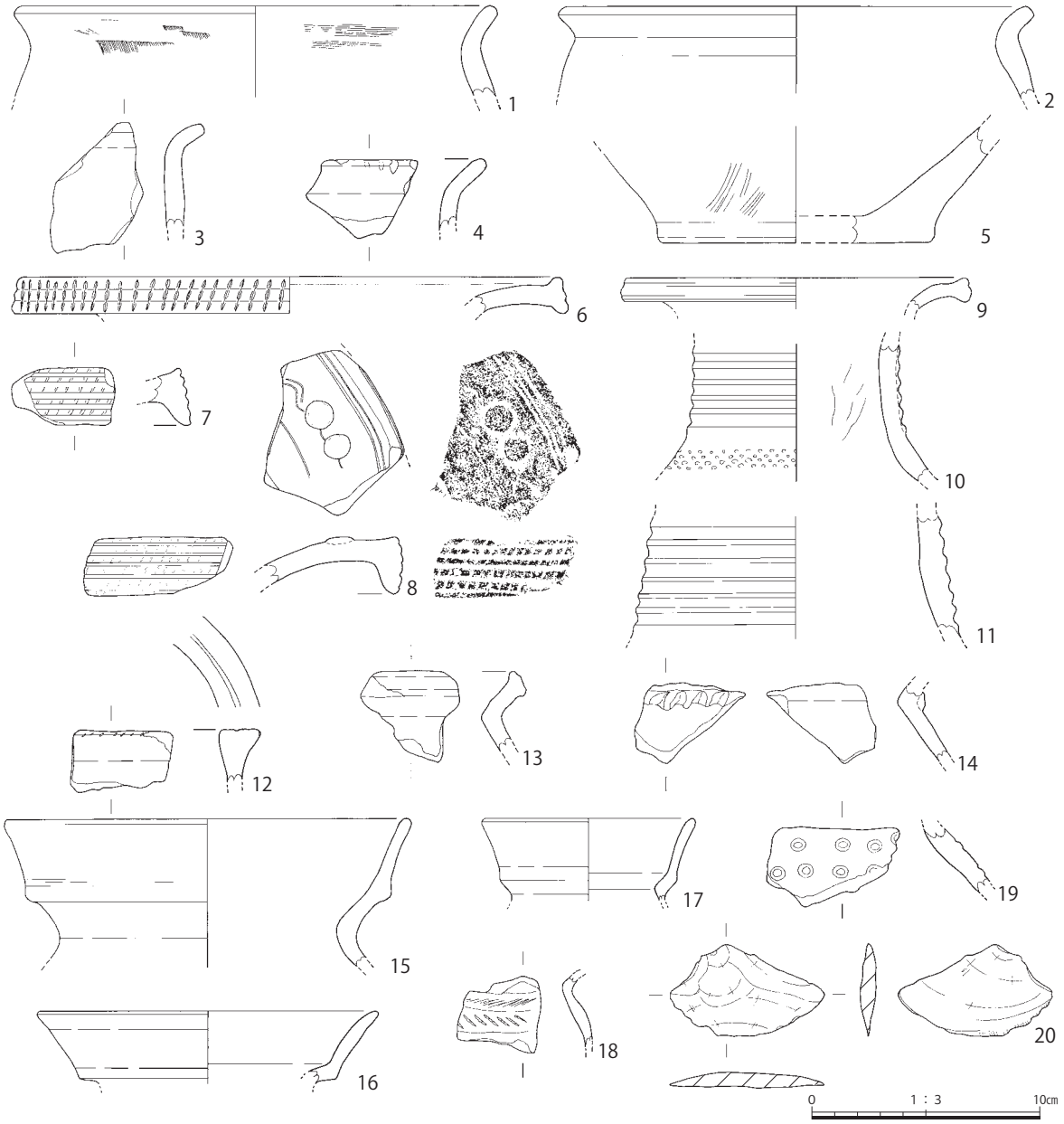
第 16 図　溝 SD201　出土遺物

溝 SD202（第 17・18 図　図版 7・8）

第 17 図１～ 19 は弥生土器である。１～４は弥生時代前期の甕の口縁部片である。１の外面には縦ハケメ，内面には横ハケメがある。４は口縁端部外面に刻目が施される。５は弥生時代前期の甕の底部である。外面に縦ハケメがある。

６～ 11 は弥生時代中期後半の広口壺である。６～８は口縁部片である。６は口縁端部が上下に拡張され，そこに２条の凹線文と刻目が施される。７は口縁端部が下方に拡張し，そこに５条の凹線文と刻目が施される。８は口縁下方に拡張し，そこに５条の凹線文と刻目が施される。内面に沈線と波状文と対になる円形浮文が施される。９は小型の広口壺の口縁部片である。口縁端部が上下にわずかに拡張し，そこに２条の凹線文が施される。10・11 は広口壺の頸部片である。10 は頸部に６条以上の貼付突帯があり，胴部と頸部の境に櫛による列点文が施される。11 は頸部に７条以上の貼付突帯がある。12 は弥生時代中期の直口壺の口縁部片である。口縁端部は外側に肥厚し，水平に面をなす。そこに１条の沈線，肥厚した角に刻目が施される。13・14 は弥生時代中期中葉の甕である。13 は口縁端片で，端部が上下に肥厚し，２条の凹線文が施される。14 は胴部上半から屈曲部の破片である。屈曲部に貼付突帯が巡り，そこに刻目がある。

15 ～ 19 は弥生時代後期後葉から終末期の土器である。15 は複合口縁壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部外面に平行線文があるが，磨滅が著しい。16 は複合口縁の壺あるいは甕の口縁部片である。17 は小型の複合口縁甕の口縁部片である。16・17 ともに口縁部外面はなでられ

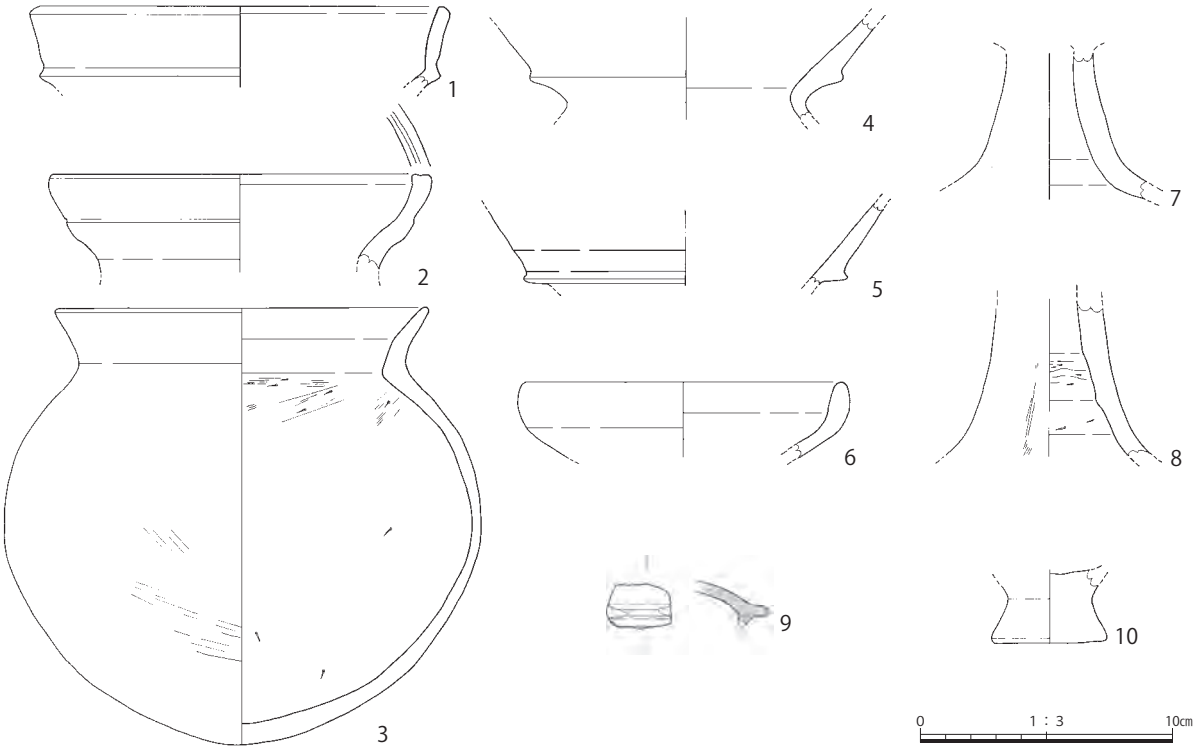


第 17 図　溝 SD202　出土遺物（1）

ている。18 は小型複合口縁甕の胴部上半の破片で，外面に貝殻による羽状文が施される。19 は複合口縁壺の胴部上半の破片で，外面に竹管文が８個確認できる。

20 は弥生時代前期頃の粗製剥片石器である。刃部は丸い。石材は緑色凝灰岩である。

第 18 図１は古墳時代前期の複合口縁甕の口縁部片である。口縁端部に面をなし，口縁内外面ともになでられている。２は古墳時代中期の甕の口縁部片で，退化した複合口縁をなす。口縁端部は面をなし，そこに１条の沈線文がある。３は古墳時代後期の甕である。口縁部は短く開き，胴部は球形で，底部は丸底をなす。胴部外面はハケメ，内面はヘラケズリが施される。４・５は古墳時代前期の鼓形器台の受部片で口縁端部を欠く。６・７は古墳時代中期の高坏で，丹塗りされている。６は口縁部片で，７は脚部片である。８は古墳時代前期の高坏脚部である。９は７世紀後半の須恵器坏蓋の口縁部



第 18 図　溝 SD202　出土遺物（2）

片である。10 は器種不明の脚部である。

溝 SD202 からは，弥生時代前期～７世紀後半の遺物が出土する。

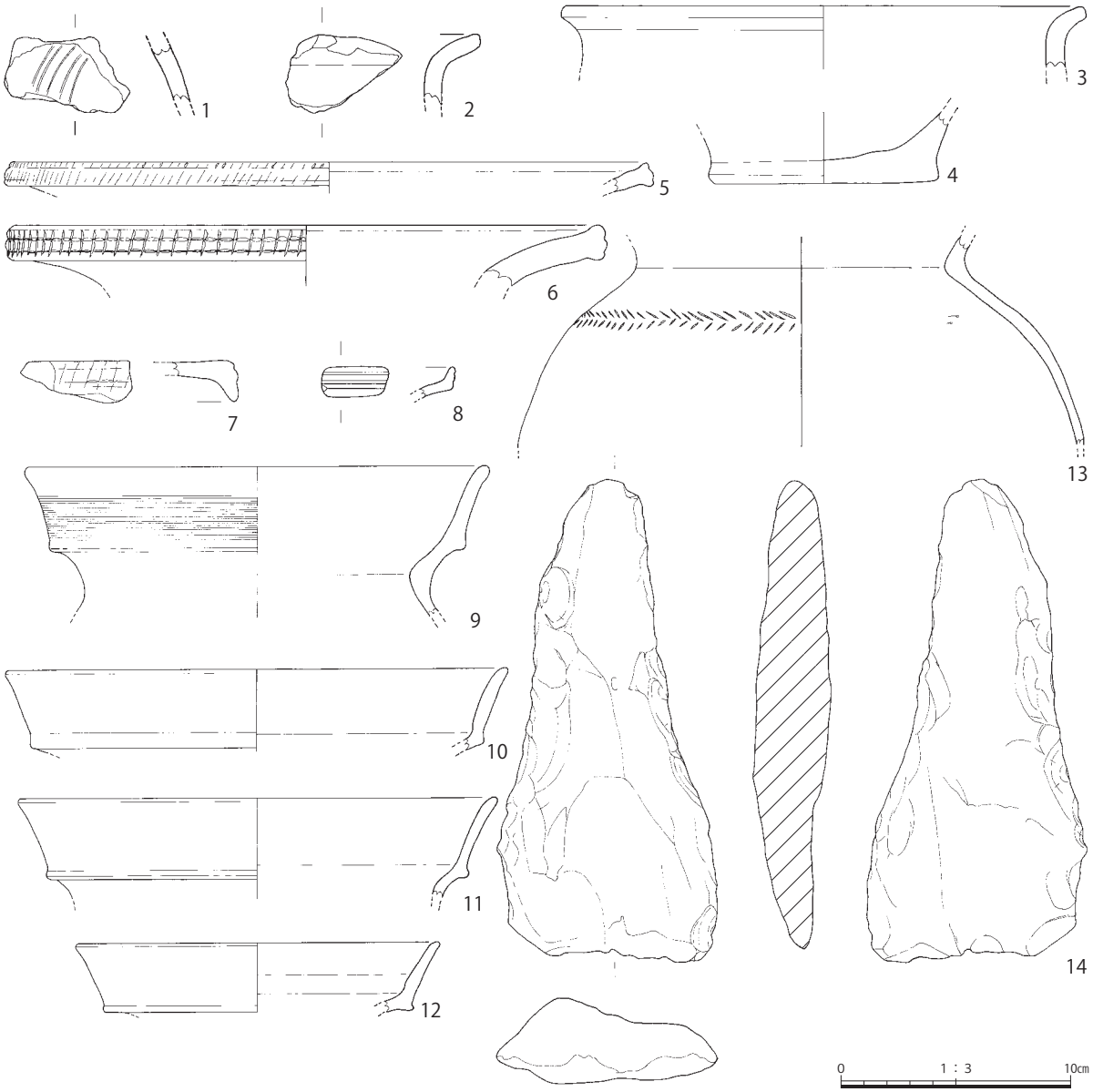
溝 SD203（第 19 図　図版 8）

１～ 12 は弥生土器である。１～４は弥生時代前期の土器である。１は壺の胴部上半の破片で，胴部外面に重弧文が施される。2・3 は甕の口縁部片である。口縁端部は面をなす。4 は甕の底部である。

５～８は弥生時代中期後半の土器である。５・８は甕の口縁部片である。５は口縁端部が上下に肥厚し，２条の凹線文と刻目が施される。８は口縁が上方に拡張し，口縁端部に２条の凹線文が施される。６・７は広口壺の口縁部片である。６は口縁端部が上下に肥厚し，そこに２条の凹線文と刻目が施される。赤彩がある。７は口縁端部が下方に拡張し，そこに２条の凹線文と刻目が施される。９～ 13 は弥生時代後期～終末期の複合口縁甕である。９は外面に平行線文が施される。10 ～ 12 は口縁部内外面ともになでられる。13 は胴部上半の破片である。外面に貝殻羽状文が施される。

14 は弥生時代前期頃の石鏃である。使用により刃部が磨滅している。

溝 SD203 からは，弥生時代前期～弥生時代終末期の遺物が出土する。



第 19 図　溝 SD203　出土遺物

２層出土遺物（第 20 図　図版 9）

１は７世紀末から８世紀前半の須恵器の蓋片である。ボタン状のつまみで，中央がわずかに突出する。２は 17 世紀第２四半期の肥前焼の皿で，内面に菊，外面に唐草文が描かれている。口縁は端反りになる。３は種子札である。「大田所物」，「長嶋　九升」の墨書がある。頭部に切込みがあり，紐の圧痕がある（第５章第１節参照）。

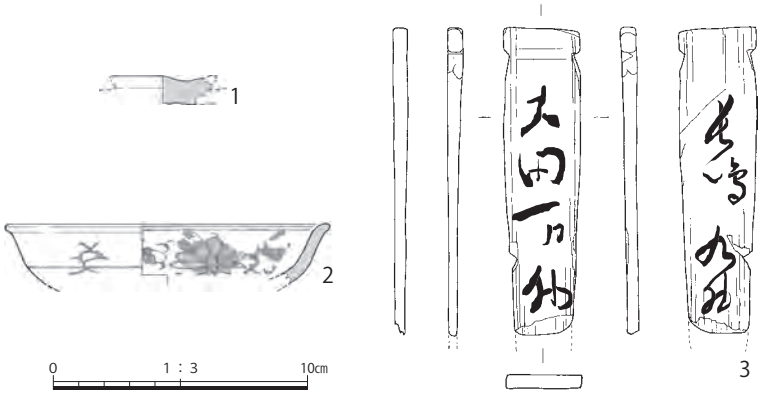
この層からは，７世紀末から 17 世紀前半までの遺物が出土した。他に未掲載の近現代の遺物も出土した。

３層出土遺物（第 21 ～ 24 図　図版 9 ～ 12）

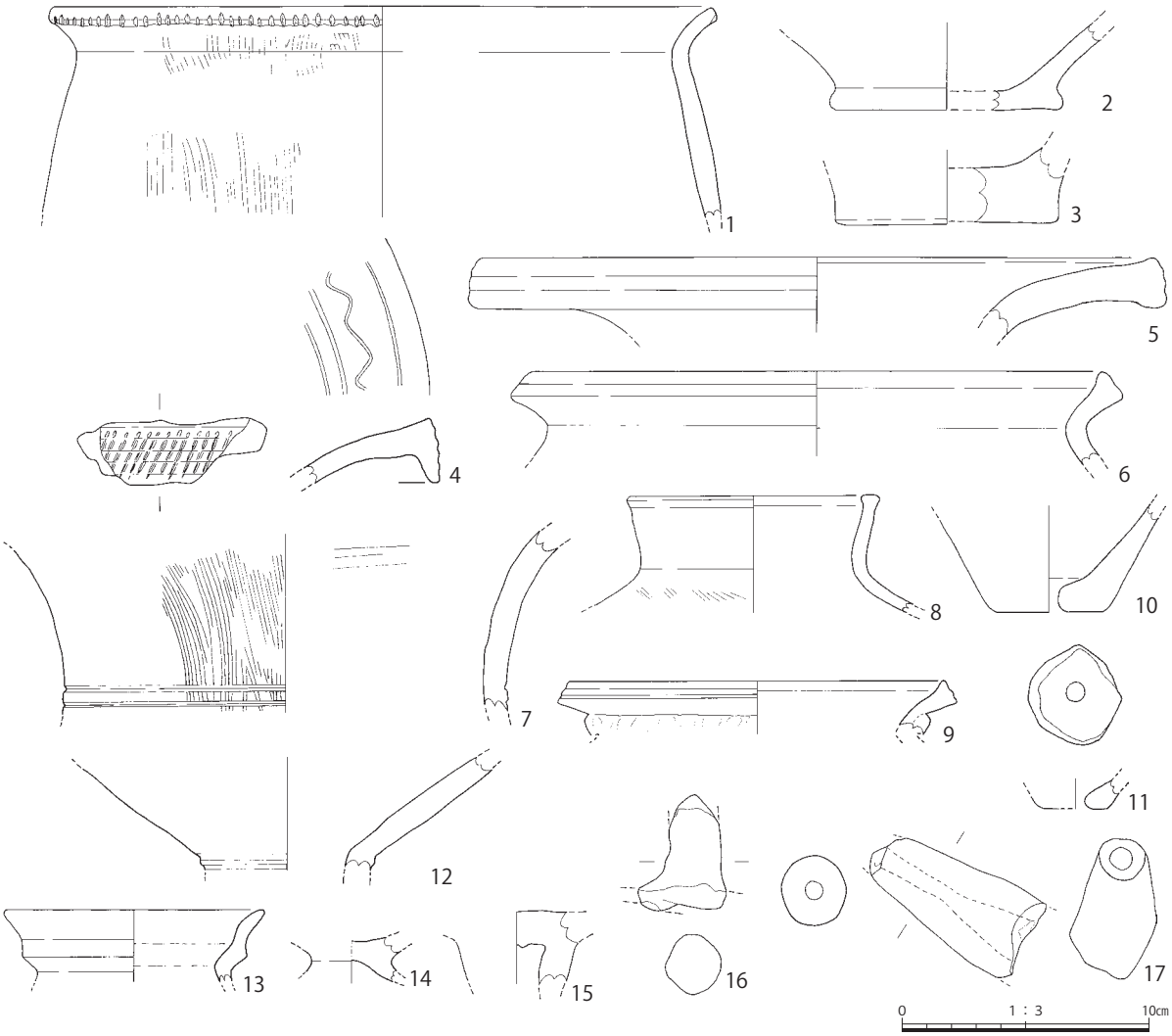
第 21 図１～ 17 は弥生土器である。１～３は弥生時代前期の甕である。１は口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁下端に刻目があり，外面には縦ハケメがある。２・３は底部片である。

２は底部から大きくくびれて立ち上がる。

４～12は弥生時代中期の土器である。４・５は広口壺の口縁部片である。４は口縁端部が下方に拡張し，そこに５条の凹線文と刻目がある。口縁部内面に波状文と沈線文が巡る。５は口縁端部が上下に肥厚し，そこに２条の凹線文がある。６は甕の口縁部片で，口縁端部が上下に肥厚し，そこに１条の凹線文が施される。７は頸部片で，外面２条の沈線文があり，調整は縦ハケメである。８は直口壺の口縁部片である。口縁端部は左右にわずかに肥厚する。胴部上半の外面にハケメがある。９は甕の口縁部片である。口縁端部は上



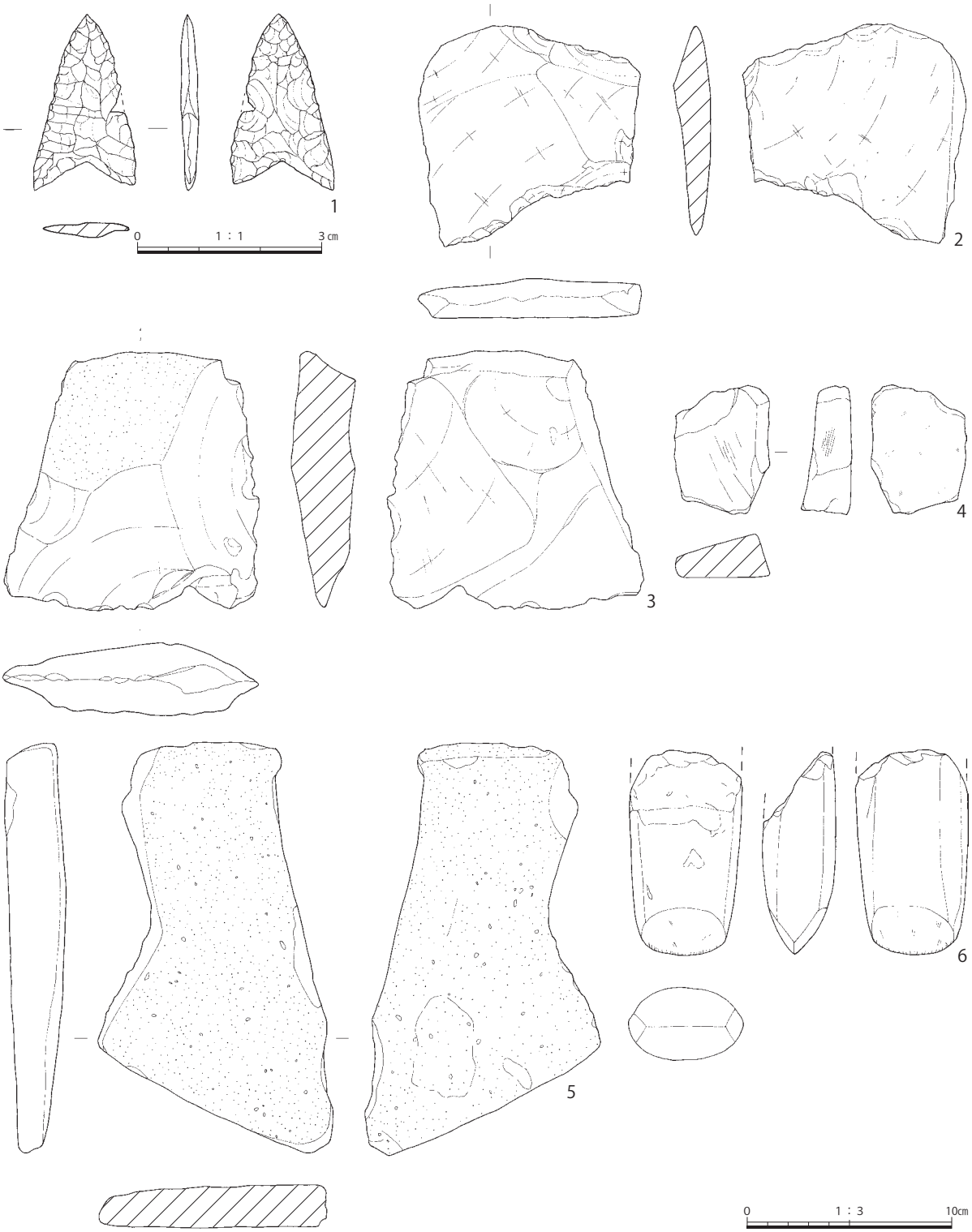
第20図　２層出土遺物



第21図　３層出土遺物（1）

下に肥厚し，そこに２条の凹線文が施される。屈曲部には貼付突帯が巡り，そこに刻目がある。10・11 は甕の底部で，平底をなす。底には焼成前に円孔があけられる。12 は高坏の坏部である。坏部と脚部の境に凹線文がある。

13 ～ 17 は弥生時代後期後葉から終末期の土器である。13 は小型の複合口縁甕の口縁部片である。内外面ともなでられている。14 は低脚坏の接合部である。15 は高坏の接合部である。接合部内面に



第 22 図　３層出土遺物（２）

は軸痕がある。16 は壺の胴部上半に付く弧状の取手の一部である。17 は注口土器の注口部である。

第 22 図１～６は弥生時代の石器である。１は三角形石鏃で，基部は窪む。石材は黒曜石である。２・３は打製の大型石包丁である。２の刃部は曲刃。石鍬の転用品。ともに石材は安山岩である。４は仕上げ用の砥石である。砥面が３面に残る。５は台石あるいは粗磨き用の砥石である。６は磨製の両刃石斧で，基部を欠く。横断面形は楕円形である。石材は安山岩である。

第 23 図１～３は古墳時代中期の土師器である。１・２は古墳時代中期の甕の口縁部片である。３は高坏の脚柱部である。

４は奈良時代の土師器の高台付坏である。外面に丹塗りがある。5 ～ 18 は７世紀から８世紀前半の須恵器である。５・６は坏蓋の破片である。７は坏の口縁部片で，外側に折れ曲がる。８・９は高台付坏である。10 は坏の底部である。11 は壺の底部である。12 は坏の底部片で，外面に回転糸切り痕がある。内面底に「仁」の線刻が入る（詳細は第５章第１節参照）。13 ～ 15 は甕の口縁部から屈曲部にかけての破片である。13 の口縁部外面にカキ目がある。16 は鉄鉢型の口縁部片である。17 は壺の胴部上半の破片で，頸部との境に突帯が巡る。18 は高坏の接合部である。19 は甕あるいは提瓶の胴部片である。内外両面にハケ目状工具で渦が描かれている。

20・21 は７世紀末から８世紀初頭の瓦である。20 は無段式の丸瓦の広端部片である。外面に格子タタキ目，内面と広端面にヘラケズリ，側面と広端面に面取りが施される。21 は軒丸瓦の瓦頭片である。神門寺１形式である。布圧痕が残る。参考に神門寺境内廃寺軒丸瓦を掲載する。

第 24 図１～ 11 は中世土師器である。１～４は高台付坏の底部片である。２は内外面ともに丹塗りである。４は高台部が剥がれており，接合時の工具による刻みが確認できる。５・６は皿の底部片で，外面に回転糸切り痕がある。７～９は柱状高台付坏の脚部片である。10・11 は擂鉢の口縁部である。内外面ともにハケメで，11 は内面に擂り目がある。

12・13 は奈良時代以降の棒状土錘である。14 は土師器の器種不明の破片である。渦巻文が描かれている。

15 は朝鮮系の壺または甕の胴部片である。

16 ～ 22 は陶磁器である。16 は 12 世紀前半の白磁Ⅳ類の碗の口縁部片で玉縁を持つ。17 は 15 世紀の白磁 D 群の小形多角坏である。18 は 15 世紀の白磁 D 群の碗の底部片である。八角形である。高台畳付は釉はぎされている。19 は 16 世紀の白磁 E 群の碗である。口縁は端反りし，脚部は釉はぎされている。20 は龍泉窯系青磁 I 類の碗の破片である。内面に櫛描文が描かれている。21 は龍泉窯系青磁の碗の口縁部片である。外面に雷文が描かれている。22 は 18 世紀前半の肥前系の碗で，口縁部を欠く。外面に松・花が描かれている。底部外面に「大明」と書かれている。

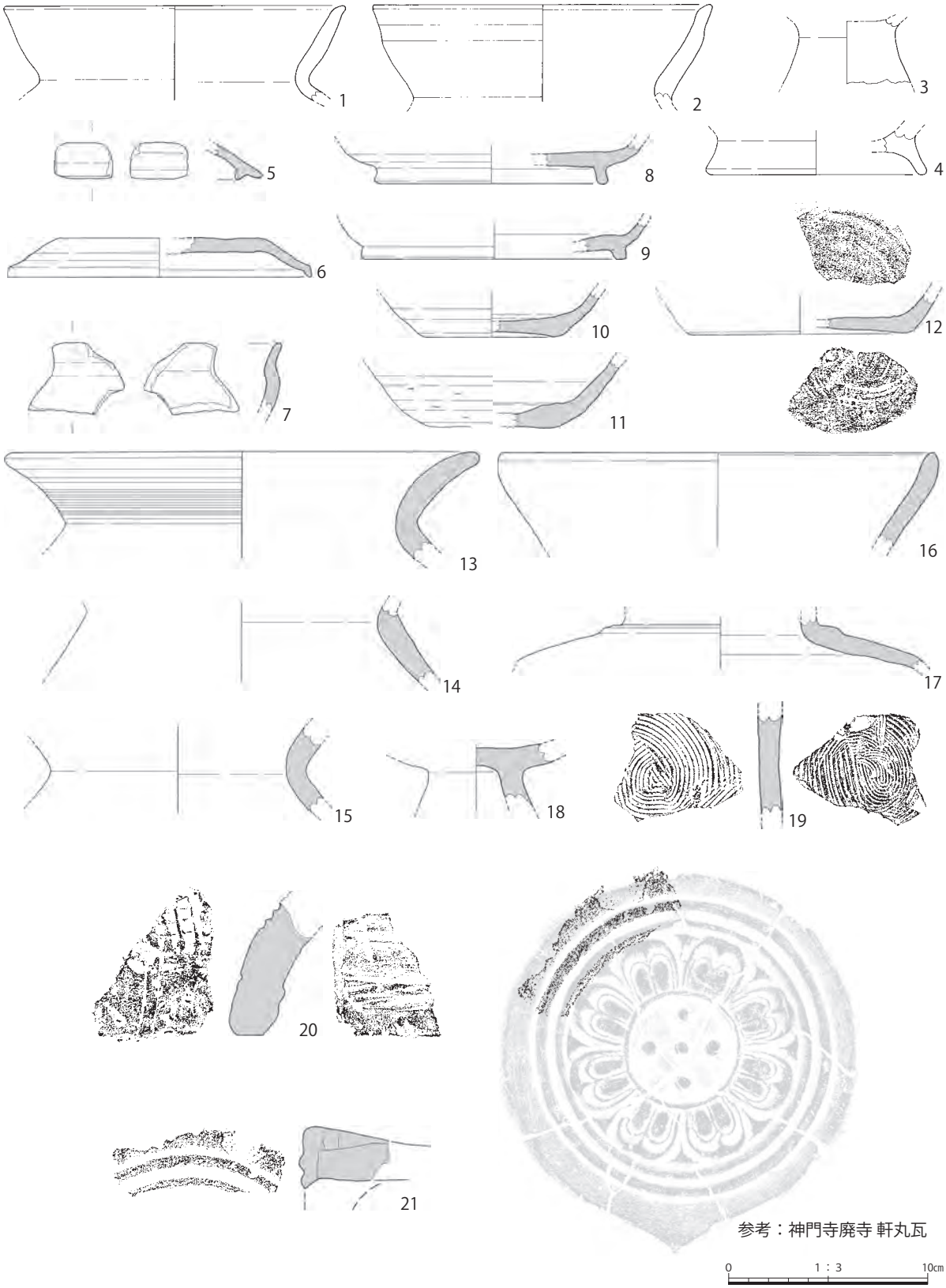
23 は 19 世紀の石見焼片口の口縁部である。

24 ～ 26 は木製品である。24 は板状に加工され，刃物痕が残り，中央で折れている。25・26 は荷札木簡である。25 は片面に「石田□□」の墨書がある。頭部に切り込みがある（第５章第１節参照）。26 は下部が欠損しているが，頭部中央に穿孔が見られる。

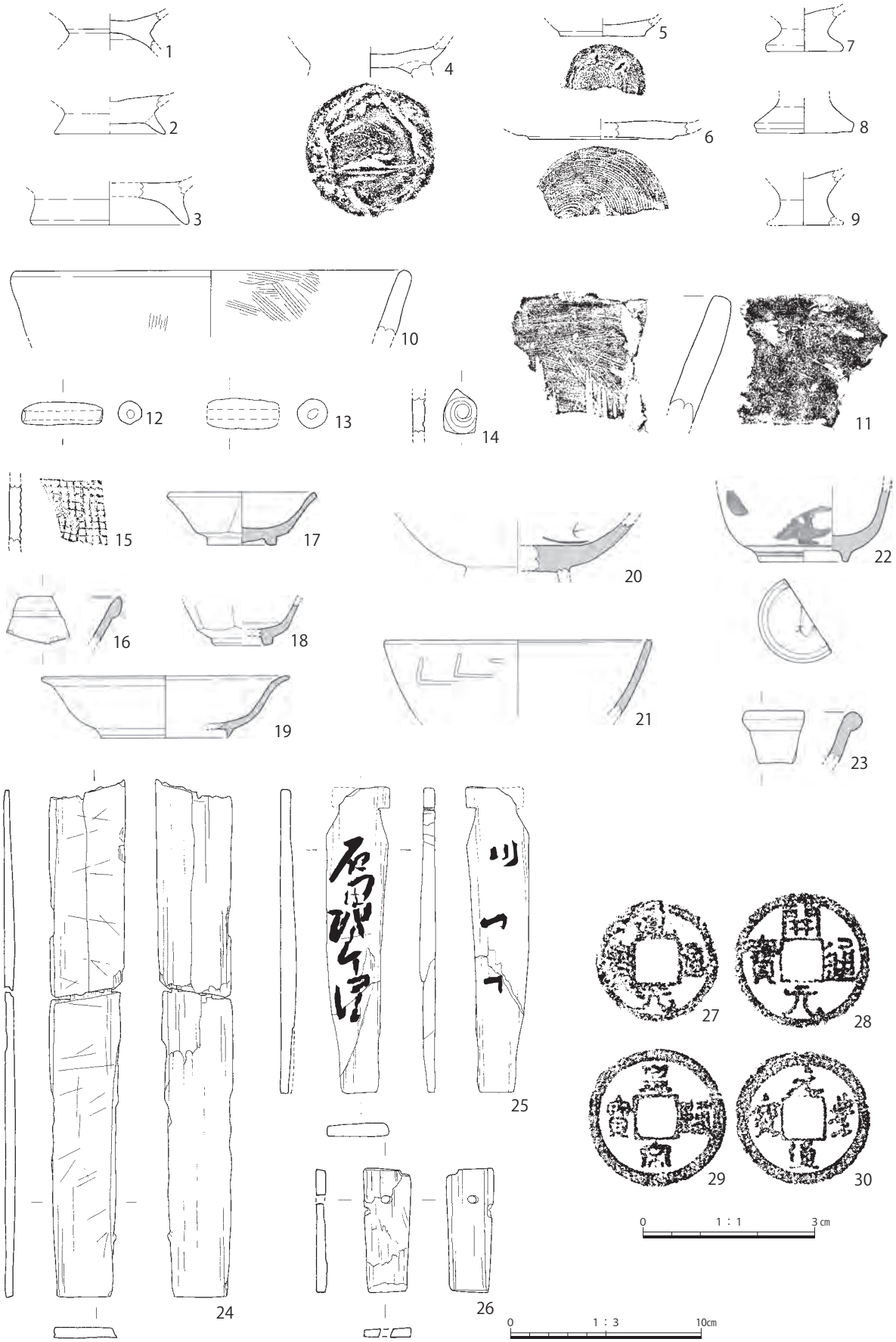
27 ～ 30 は古銭である。27・28 は「開元通寶」（初鋳は 621 年・唐）である。29 は「皇宋通寶」（初

鋳は 1038 年・北宋）である。30 は「元豊通寶」（初鋳は 1078 年・北宋）である。

この層からは，弥生時代前期から 19 世紀までの遺物が出土した。



第 23 図　３層出土遺物（３）



第 24 図　３層出土遺物（４）

４層出土遺物（第 25 ～ 27 図　図版 13 ～ 15）

第 25 図１～ 12 は弥生時代前期の土器である。１は壺の胴部片である。胴部上半に３条１組の沈線文の間に斜線文が施される。２～ 11 は甕で，２～９は口縁部片である。２・３・６は胴部上半に曖昧な段が巡る。４・５・７・８は胴部上半に１条の沈線がある。７は口縁端部に刻目が施される。10 はほぼ完形に復元できる破片で，９とともに無文である。11 は口縁部片で,「逆 L」字口縁をなす。胴部外面には多条の沈線が巡る。12 は壺あるいは甕の底部片である。

13・14 は弥生時代の石器で石鍬である。一部が欠損している。

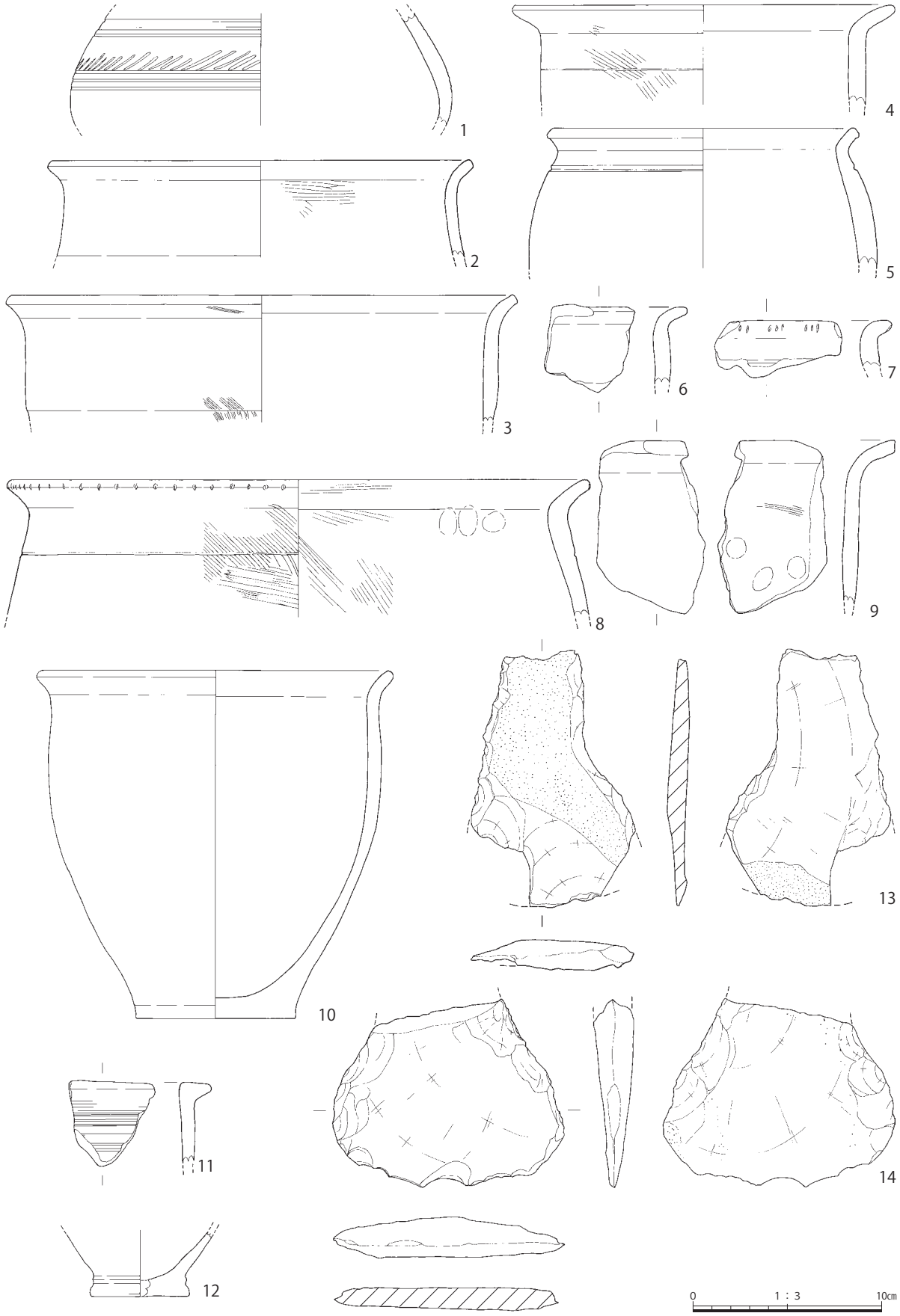
第 26 図１～ 17 は弥生時代中期後半の土器である。１～３は広口壺の口縁部片である。１は口縁端部が下方に拡張し，そこに３条の凹線文と刻目が施される。２は口縁端部が下方に拡張し，そこに３条の凹線文と刻目が施され，その上部に円形浮文がある。３は口縁端部が上下に拡張し，そこに３条の凹線文が施される。４は広口壺の胴部上半の破片である。外面に６条１組の沈線文の間に貝殻羽状文が施されている。５は無頸壺で，底部を欠く。口縁端部は内側に肥厚し，外面端部に刻目がある。口縁端部直下に二孔一対の円孔を穿つ。外面は縦ハケメ，内面は縦ハケメの後なでられている。６～ 11 は甕の口縁部から胴部上半の破片である。６・７は口縁端部内面が摘み上げられている。８は屈曲部内側に凸帯がつく。九州の土器の影響を受けている。９～ 11 は屈曲部外面に貼付突帯が巡り，そこに刻目がある。９・10 は口縁端部が肥厚し，９はそこに３条の凹線文が巡る。12 は甕の胴部片で，胴部上半に列点文が巡る。胴部内面下半はケズリ，上半はナデである。13 は壺あるいは甕の底部である。14・15 は甕の底部である。16 は高坏の脚部で，裾を欠く。外面に凹線文が多条に巡る。17 は壺あるいは甕の胴部片を円形にし，円孔を開けた紡錘車である。

18 ～ 20 は弥生時代後期後葉から終末期の複合口縁壺あるいは甕の口縁部片である。

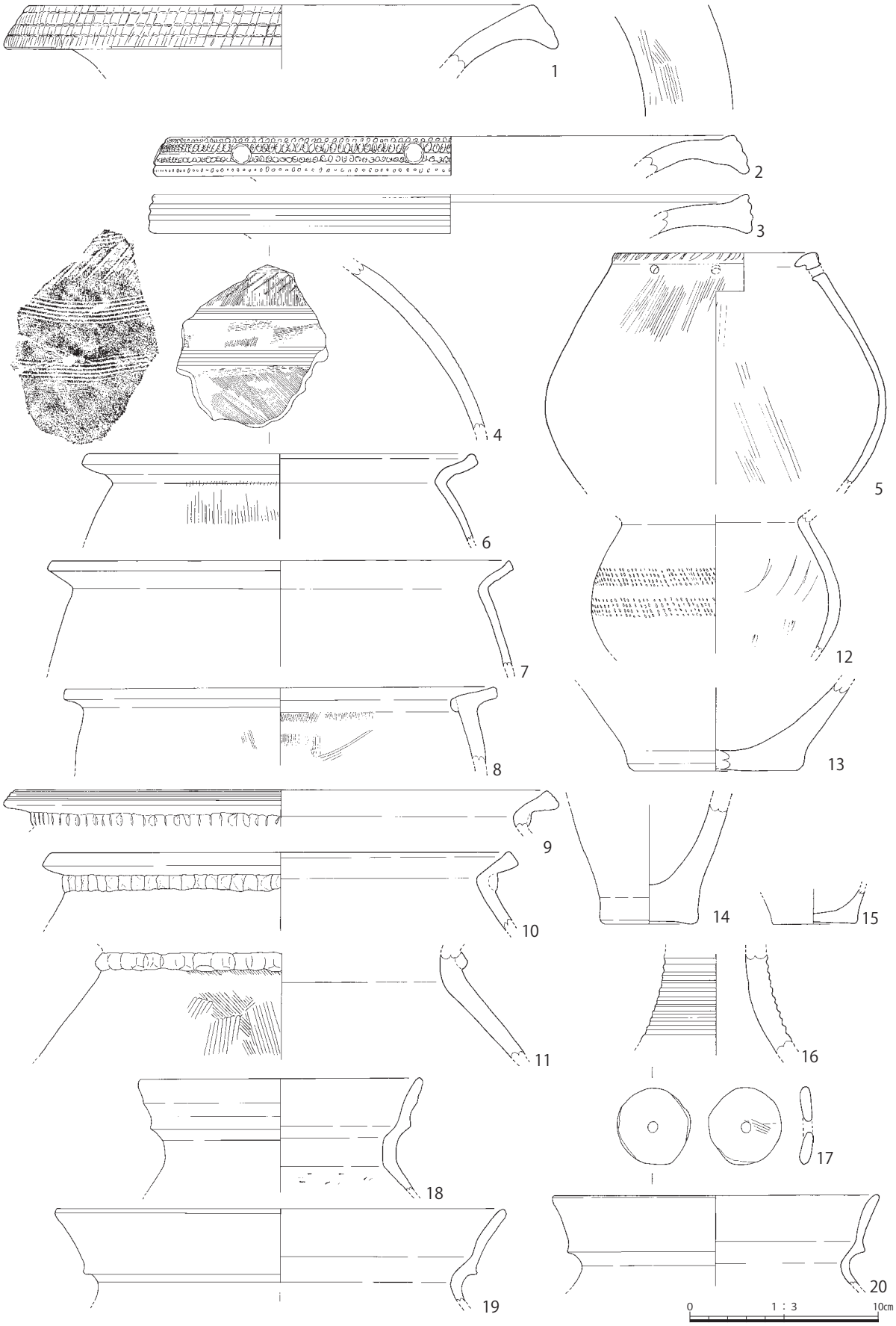
第 27 図１は古墳時代前期の複合口縁甕の口縁部片である。口縁端部が外側に引き出されている。２～６は古墳時代中期の甕の口縁部片である。２は退化した複合口縁である。３～６は屈曲部が「く」の字状に開く。７は古墳時代中期の高坏の坏部で，外面は丹塗りである。８は古墳時代前期の高坏の脚部で，裾を欠く。９は古墳時代前期の低脚坏の接合部である。

10 は７世紀末から８世紀前半の須恵器の坏蓋片である。ボタン状のつまみで，中央がわずかに突出する。

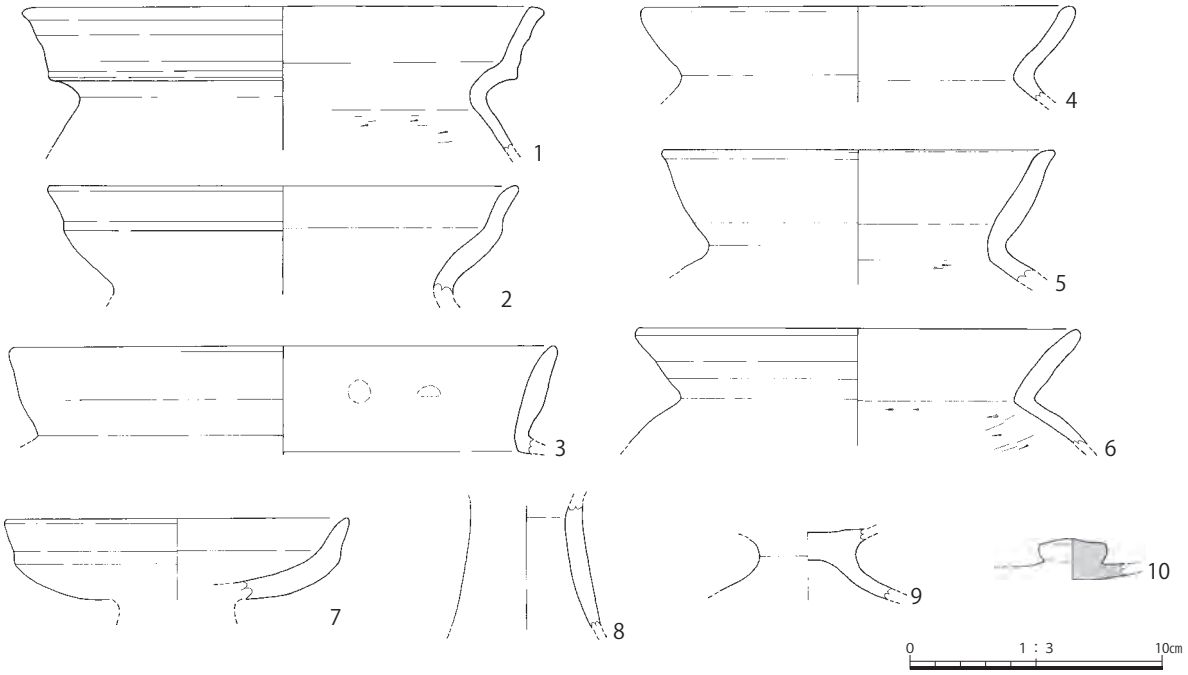
この層からは，弥生時代前期から８世紀前半までの遺物が出土した。



第 25 図　４層出土遺物（1）



第 26 図　４層出土遺物（２）



第 27 図　４層出土遺物（３）

３・４層出土遺物（第 28 ～ 30 図　図版 15・16）

ここで取り上げる出土遺物は，重機掘削後，排水用に調査区内の周囲を溝掘りした際に出土した資料で，層の区別ができなかったものである。

第 28 図１～５は弥生時代前期の土器である。１～４は甕である。１・２は口縁部片で，１は口縁端部下端に刻目が施される。２は外面胴部上半に２条の沈線，その間に刺突文がある。３は甕の底部である。底部外面に植物と思われる圧痕がある。４は口縁部片で，「逆 L」字口縁をなす。胴部外面には多条の沈線が巡る。５は鉢で，底部を欠く。外面胴部には羽状文と斜格子文が施される。

６～ 10 は弥生時代中期後半の土器である。６は甕の底部片で平底である。７は直口壺の口縁部片である。口縁端部が左右に肥厚する。その上面に２条の沈線文が巡り，口縁端部の外側に刻目が施される。８は高坏の口縁部片である。口縁上部を粘土で肥厚させ，その面に斜線文と円形浮文が施される。９・10 は甕の口縁から胴部上半の破片で，屈曲部外面に貼付突帯が巡り，そこに刻目がある。９は口縁端部が肥厚し，そこに３条の凹線文が施される。

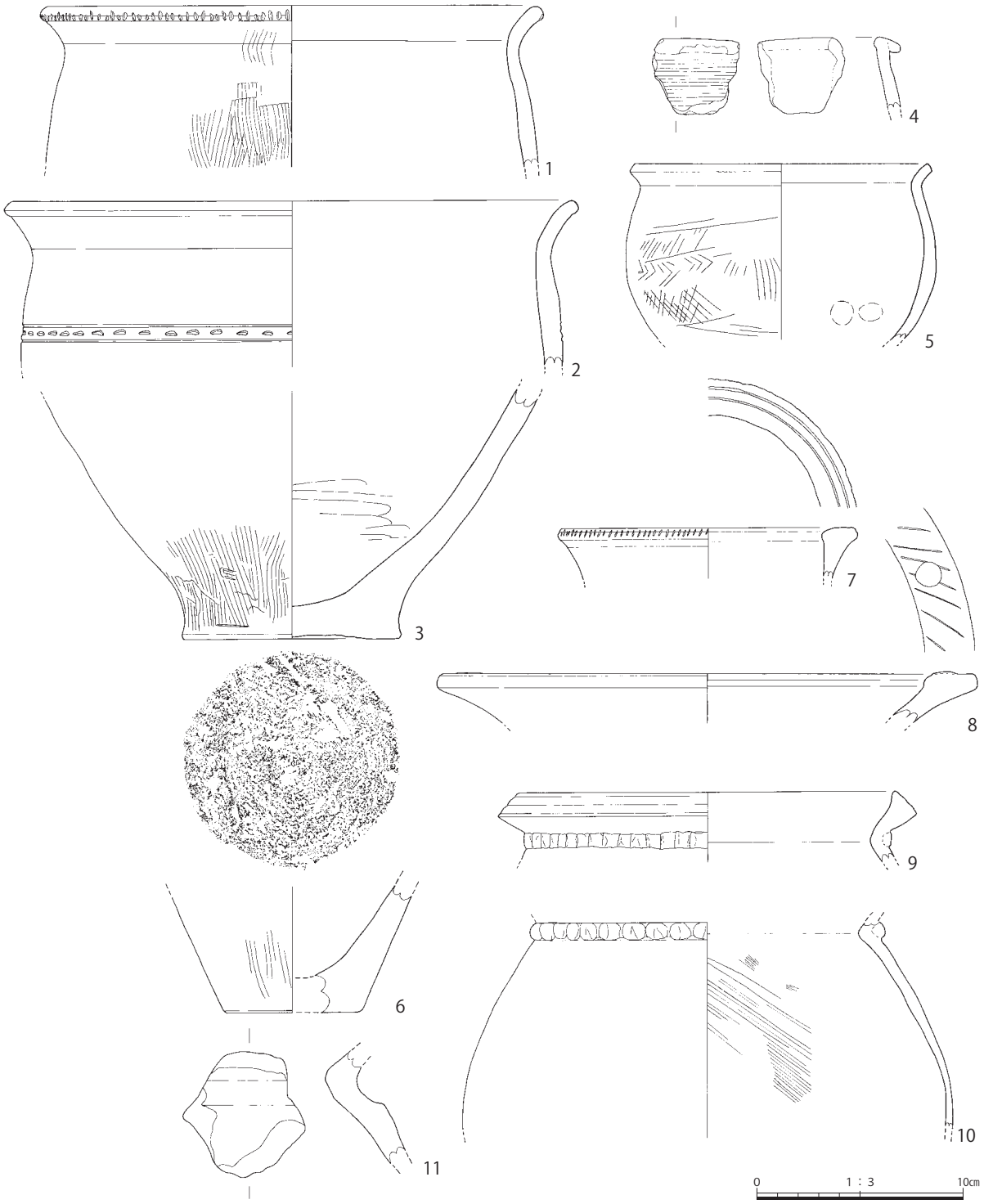
11 は弥生時代後期の鼓形器台の筒部片で，筒部は短い。

第 29 図１～３は弥生時代の石器である。１は錐で，石材は黒曜石である。２は大型石包丁である。３は敲き石で，先端が使用により割れている。

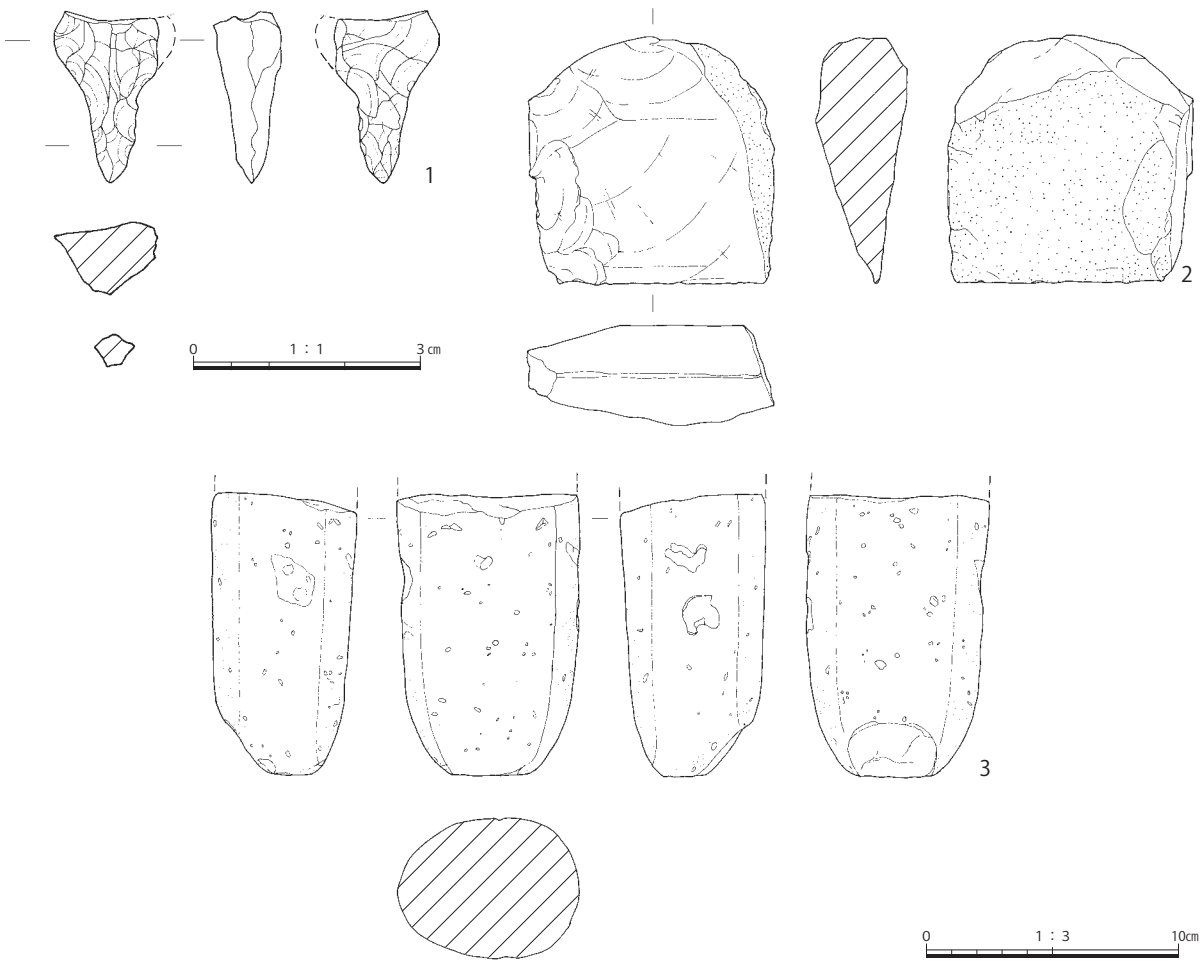
第 30 図１・２は中世土師器の皿である。１は外側底面に板目圧痕が残る。

３～５は７世紀末から８世紀前半の須恵器である。３は蓋の破片である。ボタン状のつまみで，中央がわずかに突出する。内面が滑らかであることから硯として使用されたと思われる。４は高台付坏の底部片である。５は甕の屈曲部片である。胴部内面には特異なタタキの当て具痕がある。

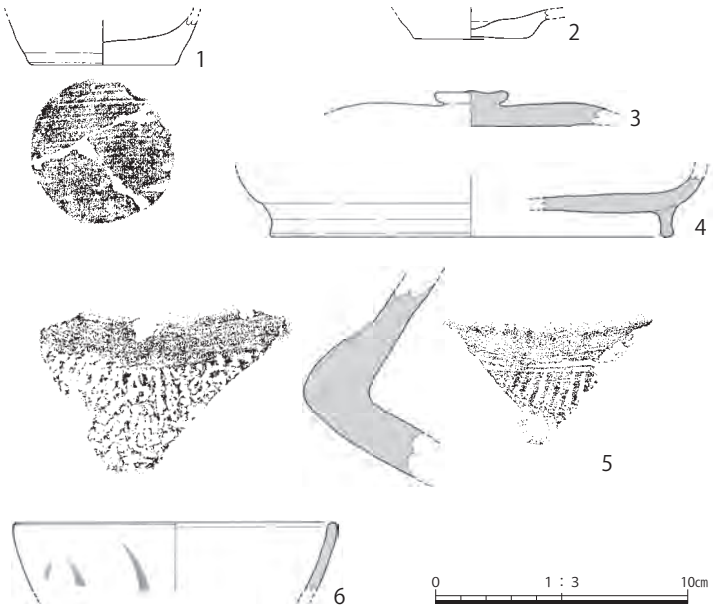
６は 12 世紀後半の龍泉窯系青磁Ⅰ類の碗の口縁部片である。外面に蓮弁文が描かれる。



第 28 図　３・４層出土遺物（1）



第 29 図　３・４層出土遺物（２）



第 30 図　３・４層出土遺物（３）

陶磁器・土器・土製品　観察表（1）

挿図番号		図版番号	出土位置			器種種別	法量(cm)			調整	備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位		口径	底径	器高		
第15図	1	6	2区	土坑SK211		広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ハケメ 内面　ハケメ	
第16図	1	6	1区	溝SD201		捏ね鉢 （土師器）	—	—	—	外面 内面	
第16図	2	6	1区	溝SD201		高台付坏 （須恵器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ 底部　回転糸切り	
第16図	3	6	1区	溝SD201		高台付坏 （須恵器）	—	(11.4)	—	外面　回転糸切り　回転ナデ 内面　ナデ　回転ナデ	
第17図	1	7	1区	溝SD202		甕 （弥生土器）	(20.1)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ　ハケメ	
第17図	2	7	2区	溝SD202		甕 （弥生土器）	(20.1)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	3	7	3区	溝SD202		甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	4	7	3区	溝SD202		甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	5	7	3区	溝SD202		甕 （弥生土器）	—	(11.6)	—	外面　ハケメ 内面	
第17図	6	7	3区	溝SD202		広口壺 （弥生土器）	(23.5)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	7	7	3区	溝SD202		広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面	
第17図	8	7	2区	溝SD202		広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面	
第17図	9	7	2区	溝SD202		広口壺 （弥生土器）	(14.8)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	10	7	2区	溝SD202		広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面　ナデ	
第17図	11	7	1区	溝SD202		広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	12	7	3区	溝SD202		直口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面	
第17図	13	7	1区	溝SD202		甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	14	7	3区	溝SD202		甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	15	7	3区	溝SD202		複合口縁壺 （弥生土器）	(17.6)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	16	7	2区	溝SD202		壺又は甕 （弥生土器）	(14.8)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	17	7	2区	溝SD202		複合口縁甕 （弥生土器）	(9.2)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	18	7	3区	溝SD202		複合口縁甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第17図	19	7	1区	溝SD202		複合口縁壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第18図	1	7	2区	溝SD202		複合口縁甕 （土師器）	(16.0)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第18図	2	7	3区	溝SD202		複合口縁甕 （土師器）	(14.9)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第18図	3	8	3区	溝SD202		甕 （土師器）	(14.7)	—	17.3	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ　ヘラケズリ	
第18図	4	7	1区	溝SD202		鼓形器台 （土師器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第18図	5	7	1区	溝SD202		鼓形器台 （土師器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第18図	6	8	3区	溝SD202		高坏 （土師器）	(12.6)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第18図	7	8	1区	溝SD202		高坏 （土師器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第18図	8	7	1区	溝SD202		高坏 （土師器）	—	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ケズリ	
第18図	9	7	1区	溝SD202		坏蓋 （須恵器）	—	—	—	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	
第18図	10	7	1区	溝SD202		（土師器）	—	(4.4)	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	1	8	1区	溝SD203		壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面	
第19図	2	8	1区	溝SD203		甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ハケメ後ナデ	
第19図	3	8	3区	溝SD203		甕 （弥生土器）	(22.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	4	8	2区	溝SD203		甕 （弥生土器）	—	(9.5)	—	外面　ナデ 内面	
第19図	5	8	1区	溝SD203		甕 （弥生土器）	(27.6)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	6	8	1区	溝SD203		広口壺 （弥生土器）	(25.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	7	8	2区	溝SD203		広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	8	8	2区	溝SD203		甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	9	8	3区	溝SD203		複合口縁甕 （弥生土器）	(20.0)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　ケズリ	
第19図	10		2区	溝SD203		複合口縁甕 （弥生土器）	(22.0)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	11	8	2区	溝SD203		複合口縁甕 （弥生土器）	(20.7)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	12		2区	溝SD203		複合口縁甕 （弥生土器）	(15.6)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第19図	13	8	3区	溝SD203		複合口縁甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　ケズリ	

陶磁器・土器・土製品　観察表（2）

挿図番号		図版番号	出土位置			器種 種別	法量(cm)			調整	備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位		口径	底径	器高		
第20図	1	9			2層	蓋 （須恵器）	—	—	—	外面　ナデ 内面	
第20図	2	9			2層	皿 （磁器）	(12.6)	—	—	外面 内面	
第21図	1	9	1区		3層	甕 （弥生土器）	(26.6)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面	
第21図	2	9	2区		3層	甕 （弥生土器）	—	(9.0)	—	外面 内面	
第21図	3	9	3区		3層	甕 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面	
第21図	4	9	3区		3層	広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面	
第21図	5	9	3区		3層	広口壺 （弥生土器）	(27.2)	—	—	外面 内面	
第21図	6	10	3区		3層	甕 （弥生土器）	(23.0)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第21図	7	9	3区		3層	広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ハケメ 内面	
第21図	8	9	2区		3層	直口壺 （弥生土器）	(10.2)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ	
第21図	9	10	1区		3層	甕 （弥生土器）	(15.2)	—	—	外面 内面	
第21図	10	10	2区		3層	甕 （弥生土器）	—	(4.2)	—	外面　ヘラケズリ 内面	
第21図	11	10	3区		3層	甕 （弥生土器）	直径 3.6～4.0	—	—	外面 内面	
第21図	12	10	2区		3層	高坏 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第21図	13	10	2区		3層	複合口縁甕 （土師器）	(10.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第21図	14	10	1区		3層	低脚坏 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第21図	15	10	3区		3層	高坏 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面	
第21図	16	10	3区		3層	取手 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面	
第21図	17	10	2区		3層	注口 （弥生土器）	周囲の直径 （2.2～3.6）	穴の直径 約0.7	—	外面 内面	
第23図	1	10	2区		3層	甕 （土師器）	(17.0)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第23図	2	10	2区		3層	甕 （土師器）	(16.9)	—	—	外面 内面	
第23図	3	10	2区		3層	高坏 （土師器）	—	—	—	外面　ナデ 内面	
第23図	4	11	3区		3層	高台付坏 （土師器）	—	(10.4)	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第23図	5	11	1区		3層	蓋 （須恵器）	(14.4)	—	—	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	
第23図	6	11	3区		3層	蓋 （須恵器）	(15.2)	(10.2)	—	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	
第23図	7	11			3層	坏 （須恵器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第23図	8	11			3層	高台付坏 （須恵器）	—	(11.4)	—	外面　ナデ 内面　ナデ 底部　ナデ	
第23図	9		2区		3層	高台付坏 （須恵器）	—	(13.0)	—	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	
第23図	10	11			3層	坏 （須恵器）	—	(6.4)	—	外面　ナデ　回転ナデ 内面　ナデ　回転ナデ	
第23図	11	11			3層	壺 （須恵器）	—	—	—	外面　ナデ　ケズリ 内面　ナデ　回転ナデ	
第23図	12	11	3区		3層	坏 （須恵器）	—	(10.6)	—	外面　ナデ　ケズリ 内面　ナデ	
第23図	13	11	1区		3層	甕 （須恵器）	(22.8)	—	—	外面　ナデ 内面　回転ヘラケズリ	
第23図	14	11	1区		3層	甕 （須恵器）	—	—	—	外面 内面　ケズリ　当て具痕	
第23図	15	11	1区		3層	甕 （須恵器）	—	—	—	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	
第23図	16	11			3層	鉢 （須恵器）	(21.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第23図	17	11	1区		3層	壺 （須恵器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　回転ナデ	
第23図	18	11			3層	高坏 （須恵器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第23図	19	11	1区		3層	甕又は提瓶 （須恵器）	—	—	厚 約1.0	外面　ハケメ 内面　ハケメ	
第24図	1	12	3区		3層	高台付坏 （土師器）	—	—	—	外面 内面	
第24図	2		3区		3層	高台付坏 （土師器）	—	(5.7)	—	外面 内面	
第24図	3		3区		3層	高台付坏 （土師器）	—	(8.0)	—	外面 内面	
第24図	4	12	3区		3層	高台付坏 （土師器）	—	—	—	外面 内面	
第24図	5		3区		3層	皿 （土師器）	—	(4.4)	—	外面 内面　回転ヘラミガキ 底部　回転糸切り	
第24図	6	12	3区		3層	皿 （土師器）	—	(7.5)	—	外面 内面　回転ヘラミガキ 底部　回転糸切り	
第24図	7	12	2区		3層	柱状高台付坏 （土師器）	—	(3.8)	—	外面 内面	

陶磁器・土器・土製品　観察表（3）

挿図番号		図版番号	出土位置			器種種別	法量(cm)			調整	備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位		口径	底径	器高		
第24図	8	12	3区		3層	柱状高台付坏 （土師器）	—	(5.0)	—	外面　ナデ 内面 底部　回転糸切り後ナデ	
第24図	9		2区		3層	柱状高台付坏 （土師器）	—	—	—	外面 内面	
第24図	10	12	1区		3層	擂鉢 （土師器）	(16.8)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　互い違いのハケメ　ハケメ	
第24図	11	12	3区		3層	擂鉢 （土師器）	—	—	—	外面　ハケメ 内面　ハケメ　すり目	
第24図	12	12	3区		3層	土錘 （土製品）	長 4.25	幅 1.15	穴の直径 0.4～0.6	外面 内面	
第24図	13	12			3層	土錘 （土製品）	長 3.8	幅 1.6	穴の直径 0.4～0.6	外面 内面	
第24図	14	12	2区		3層	（土師器）	—	—	—	外面 内面	
第24図	15	12	1区		3層	壺又は甕 （瓦質土器）	—	—	—	外面　格子タタキ目 内面　ナデ	
第24図	16	12	1区		3層	碗 （磁器）	—	—	—	外面 内面	
第24図	17	12	3区		3層	小形多角坏 （磁器）	(7.5)	(3.6)	2.75	外面 内面	
第24図	18	12	3区		3層	碗 （磁器）	—	(2.8)	—	外面 内面	
第24図	19	12			3層	碗 （磁器）	(12.8)	(6.6)	3.2	外面 内面	
第24図	20	12	2区		3層	碗 （磁器）	—	—	—	外面 内面	
第24図	21	12			3層	碗 （磁器）	(13.8)	—	—	外面 内面	
第24図	22	12			3層	碗 （磁器）	—	(4.6)	—	外面 内面	
第24図	23	12			3層	片口 （陶器）	—	—	—	外面 内面	
第25図	1	13	2区		4層	壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第25図	2	13	2区		4層	甕 （弥生土器）	(22.1)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ	
第25図	3	13	3区		4層	甕 （弥生土器）	(26.5)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ	
第25図	4	13	1区		4層	甕 （弥生土器）	(23.0)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ	
第25図	5	13	1区		4層	甕 （弥生土器）	(15.9)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　縦方向のナデ	
第25図	6	13	2区		4層	甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第25図	7		2区		4層	甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第25図	8	13	2区		4層	甕 （弥生土器）	(30.6)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ　ハケメ	
第25図	9	13	3区		4層	甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　ハケメ	
第25図	10	13	2区		4層	甕 （弥生土器）	(18.4)	(8.4)	(18.4)	外面　ハケメ 内面　ナデ	
第25図	11	13	3区		4層	甕 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面　ナデ	
第25図	12	13	2区		4層	壺又は甕 （弥生土器）	—	(5.0)	—	外面 内面	
第26図	1	14	3区		4層	広口壺 （弥生土器）	(26.8)	—	—	外面 内面	
第26図	2	14	3区		4層	広口壺 （弥生土器）	(32.5)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第26図	3	14	1区		4層	広口壺 （弥生土器）	(31.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第26図	4	14	2区		4層	広口壺 （弥生土器）	—	—	—	外面　ハケメ 内面　ケズリ	
第26図	5	14	3区		4層	無頸壺 （弥生土器）	(10.7)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ　ハケメ	
第26図	6	14	1区		4層	甕 （弥生土器）	(20.4)	—	—	外面　ハケメ　ナデ 内面　ナデ	
第26図	7	14	3区		4層	甕 （弥生土器）	(24.2)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第26図	8	14	1区		4層	甕 （弥生土器）	(22.7)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ　ハケメ	
第26図	9	14	1区		4層	甕 （弥生土器）	(28.2)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第26図	10	14	2区		4層	甕 （弥生土器）	(24.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第26図	11	14	1区		4層	甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ハケメ 内面　ナデ	
第26図	12	14	3区		4層	甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ハケメ　ケズリ	
第26図	13	14	2区		4層	壺又は甕 （弥生土器）	—	(8.6)	—	外面　ナデ 内面	
第26図	14		3区		4層	甕 （弥生土器）	—	(4.6)	—	外面 内面	
第26図	15	14	2区		4層	甕 （弥生土器）	—	(4.3)	—	外面 内面	
第26図	16	14	1区		4層	高坏 （弥生土器）	—	—	—	外面 内面	
第26図	17	14	1区		4層	紡錘車 （弥生土器）	直径 3.8～4.1	—	—	外面 内面	
第26図	18	14	1区		4層	壺又は甕 （弥生土器）	(14.8)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　ケズリ	

陶磁器・土器・土製品　観察表（4）

挿図番号		図版番号	出土位置			器種種別	法量(cm)			調整	備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位		口径	底径	器高		
第26図	19	14	1区		4層	壺又は甕 （土師器）	(23.8)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第26図	20	14	2区		4層	壺又は甕 （土師器）	(17.2)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第27図	1	15	3区		4層	複合口縁甕 （土師器）	(20.6)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　ケズリ	
第27図	2	15	2区		4層	甕 （土師器）	(18.5)	—	—	外面　ナデ 内面	
第27図	3	15	1区		4層	甕 （土師器）	(21.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第27図	4	15	1区		4層	甕 （土師器）	(16.9)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第27図	5	15	2区		4層	甕 （土師器）	(15.4)	—	—	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ケズリ	
第27図	6	15	1区		4層	甕 （土師器）	(17.4)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　ケズリ	
第27図	7	15	2区		4層	高坏 （土師器）	(13.5)	—	—	外面 内面	
第27図	8	15	2区		4層	高坏 （土師器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第27図	9	15	1区		4層	低脚坏 （土師器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第27図	10	15	3区		4層	蓋 （須恵器）	—	—	1.5	外面 内面	
第28図	1	15	1区・2区			甕 （弥生土器）	(23.7)	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ	
第28図	2	15				甕 （弥生土器）	(29.3)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第28図	3	16				甕 （弥生土器）	—	(10.4)	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ	
第28図	4	15				甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ　ハケメ 内面　ナデ	
第28図	5	15				鉢 （弥生土器）	(14.2)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第28図	6	15				甕 （弥生土器）	—	(6.4)	—	外面　ハケメ 内面	
第28図	7	15	2区・3区			直口壺 （弥生土器）	(14.1)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第28図	8	15				高坏 （弥生土器）	(26.0)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第28図	9	15				甕 （弥生土器）	(18.2)	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第28図	10	15				甕 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ナデ　ハケメ	
第28図	11	15				鼓形器台 （弥生土器）	—	—	—	外面　ナデ 内面　ケズリ	
第30図	1	16				皿 （土師器）	—	5.6	—	外面　ナデ 内面　ナデ	
第30図	2	16				皿 （土師器）	—	(4.35)	—	外面 内面	
第30図	3	16				蓋 （須恵器）	—	—	—	外面　回転ヘラケズリ 内面	
第30図	4	16	2区・3区			高台付坏 （須恵器）	—	(15.7)	—	外面　回転ナデ 内面　ナデ 底部　回転ナデ	
第30図	5	16				甕 （須恵器）	—	—	—	外面　ナデ　回転ナデ　タタキ 内面　ナデ　回転ナデ　当て具痕	
第30図	6	16	1区・2区			碗 （磁器）	(12.6)	—	—	外面 内面	

木製品　観察表

挿図番号		図版番号	出土位置			器種種別	法量(cm)			備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位		長さ	幅	厚(最大)	
第20図	3	9			2層	種子札 （木製品）	(12.1)	3.0	0.6	木取り：柾目
第24図	24	12			3層	（木製品）	(27.1)	(4.0)	0.6	木取り：柾目
第24図	25	12			3層	荷札木簡 （木製品）	16.1	3.3	0.9	木取り：柾目
第24図	26				3層	荷札木簡 （木製品）	5.5	2.1	0.5	木取り：柾目

石器　観察表

挿図番号		図版番号	出土位置			器種種別	法量(cm)			重量(g)	備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位		長	幅	厚(最大)		
第17図	20	7	1区	溝SD202		剥片（石器）	6.75	4.0	0.9	16.8	
第19図	14	8	2区	溝SD203		石鏃（石器）	21.1	9.6	3.9	679.2	
第22図	1	10	1区		3層	石鏃（石器）	2.85	1.65	0.3	1.0	
第22図	2	10	2区		3層	大型石包丁（石器）	10.7	10.9	2.2	255.06	
第22図	3	10	南		3層	大型石包丁（石器）	12.6	12.4	3.5	582.64	
第22図	4	10	3区		3層	砥石（石器）	4.6	6.25	2.2	72.83	
第22図	5	10	2区		3層	台石又は砥石（石器）	20.1	11.5	2.75	806.15	
第22図	6	10	2区		3層	両刃石斧（石器）	(10.0)	(5.5)	3.55	292.84	
第25図	13	13	1区		4層	石鏃（石器）	13.7	(8.6)	1.6	128.13	
第25図	14	13	2区		4層	石鏃（石器）	(10.0)	12.2	2.1	239.51	
第29図	1	16				錐（石器）	2.3	(1.4)	0.85	1.79	
第29図	2	16				大型石包丁（石器）	9.6	9.5	3.9	395.85	
第29図	3	16				敲き石（石器）	(11.1)	(7.2)	5.5	710.96	

瓦　観察表

挿図番号		図版番号	出土位置			器種種別	法量(cm)			重量(g)	調整	備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位		長さ	幅	厚(最大)			
第23図	20	11			3層	丸瓦（古代瓦）	—	—	—	121.69	外面　格子タタキ目 内面　ヘラケズリ 側面　面取り 広端面　ヘラケズリ　面取り	
第23図	21	11	1区		3層	軒丸瓦（古代瓦）	—	—	—	127.97	外面 内面	

古銭　観察表

挿図番号		図版番号	出土位置			銭	銭種名	法量(mm)			重量(g)	備考
掲載図	番号		地区	遺構	層位			縦径	横径	厚(最大)		
第16図	4	6		溝SD201		銅銭	元祐通寶	24.4	24.3	1.1	3.3	
第16図	5	6		溝SD201		銅銭	無紋銭	(18.5)	(18.1)	(0.6)	(1.0)	
第24図	27	12			3層	銅銭	開元通寶	21.5	21.4	0.9	1.6	
第24図	28	12			3層	銅銭	開元通寶	24.0	24.0	1.0	2.2	
第24図	29	12	3区		3層	銅銭	皇宋通寶	24.6	24.2	1.0	3.0	
第24図	30	12	3区		3層	銅銭	元豊通寶	23.8	23.6	1.1	3.2	

第４章　自然科学分析

第１節　高西遺跡発掘調査に係る花粉分析及び放射性炭素年代測定

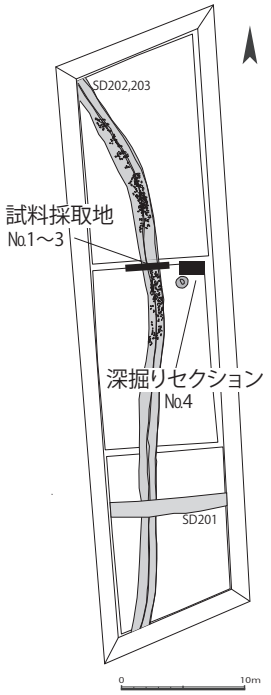
１　はじめに

高西遺跡は，島根県東部の出雲市塩冶町高西に位置し，中国山地に水源を持つ神戸川及び出雲平野南縁辺の丘陵部に水源を持つ中小河川が成す扇状地上に立地する。

本報告は，文化財調査コンサルタント株式会社が，高西遺跡で検出された遺構（SD203）の時期と埋積時の古植生，及び地山堆積時期とその当時の古植生を明らかにする目的で，出雲市からの委託を受け実施・報告した花粉分析及び放射性炭素年代測定（AMS 法）報告書を再編集したものである。

２　測定試料について

調査区平面図（第 31 図）中に分析試料の採取地点を，また，断面図（第 32・33 図）中に試料採取位置を 1- ①～ 3- ③で示す。また，年代測定試料は深掘りセクション中の，4- ②と 4- ③に狭在する砂層中から AMS ❶を，SD203 埋土から AMS ❷を採取した。



第 31 図　調査区平面図
（試料採取地点）

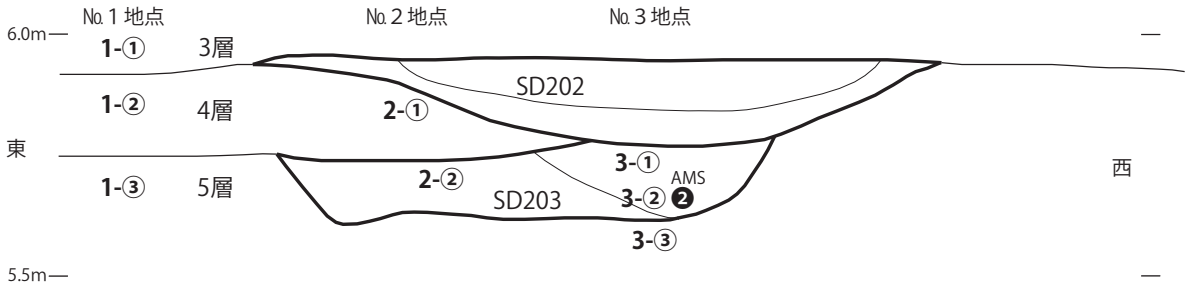
３　分析方法

（１）　微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し，花粉（胞子），植物片，微粒炭，珪藻，植物珪酸体，火山ガラスの含有状況を，５段階で示した。

（２）　花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は，光学顕微鏡により通常 400 倍で，必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実

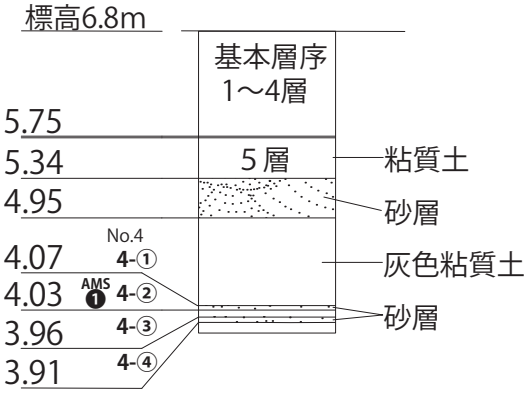


第 32 図　試料採取地点（No.１～３）断面図

施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い，同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を，イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）と，イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 ミクロン未満）に細分した。

(3)　AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理，更に再度酸洗浄を行った。この後，二酸化炭素を生成，精製し，グラファイトに調整した。^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い，半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.3（Bronk Ramsey　2009）を用い，INTCAL13（Reymer et al.　2013）を利用した。



第 33 図 №4 地点深掘りセクション模式断面図

（試料採取層）

4　分析結果

(1)　微化石概査結果

分析結果を第 2 表に示す。

多くの試料で微粒炭，植物珪酸体，火山ガラスの含有量は多かったが，花粉化石，植物片の含有量は少なかった。また，№4 地点では珪藻化石の含有量が多かったが，他の地点では少なかった。

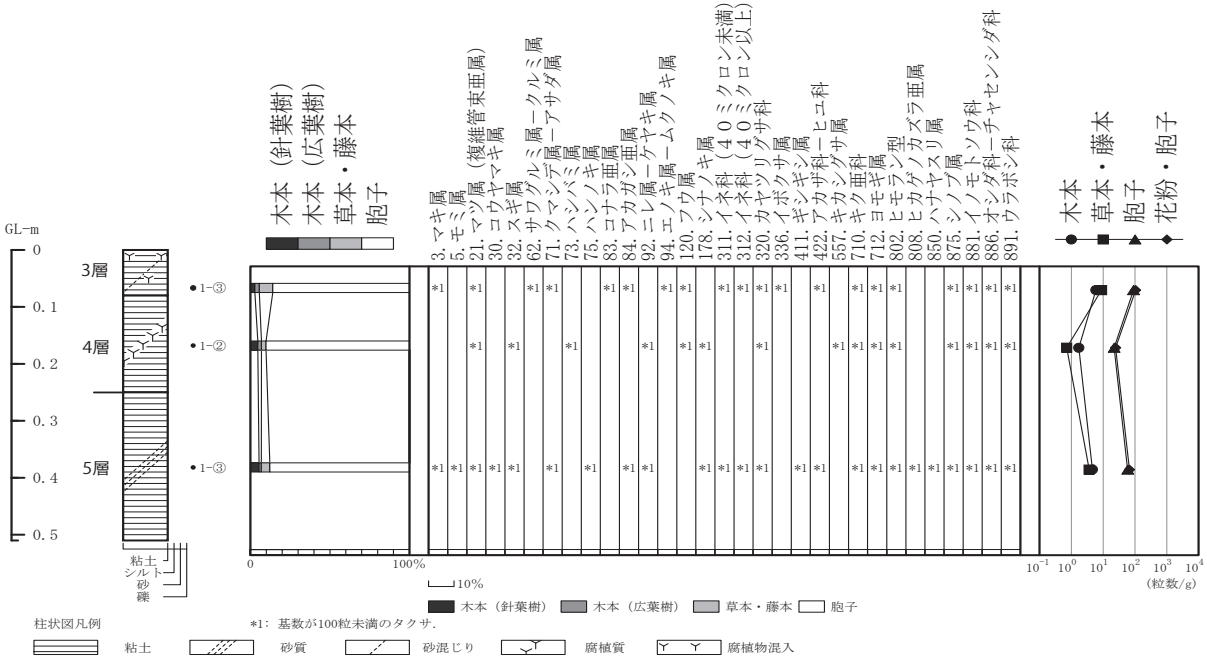
(2)　花粉分析結果

分析結果を第 34 ～ 37 図の花粉ダイアグラムと，第 3 表の花粉組成表に示す。花粉ダイアグラムでは，分類群ごとの百分率（百分率の算出には，木本花粉総数を基数にしている。）を，スペクトルで表し

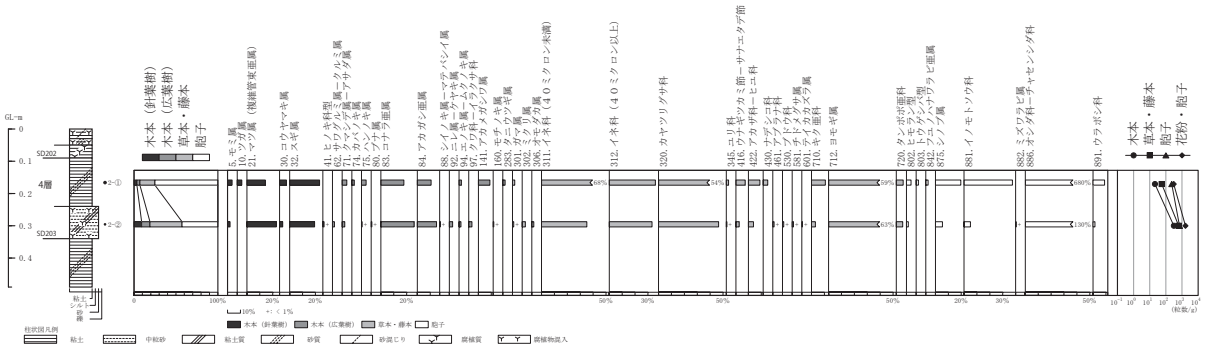
第 2 表　微化石概査結果

地点	試料No.	花　粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
No. 1	1-①	△	○	△×	△×	○	◎
	1-②	△	△	△×	×	○	◎
	1-③	△	○	△×	△×	○	◎
No. 2	2-①	△	◎	○	△	◎	○
	2-②	○	◎	○	△	◎	○
No. 3	3-①	○	◎	△×	△	○	○
	3-②	○	◎	△	△	○	○
	3-③	△	○	△×	△	△	◎
No. 4	4-①	△	○	△×	○	△	○
	4-②	△	○	△×	◎	○	○
	4-③	△	○	△×	◎	○	○
	4-④	△	◎	△×	◎	○	○

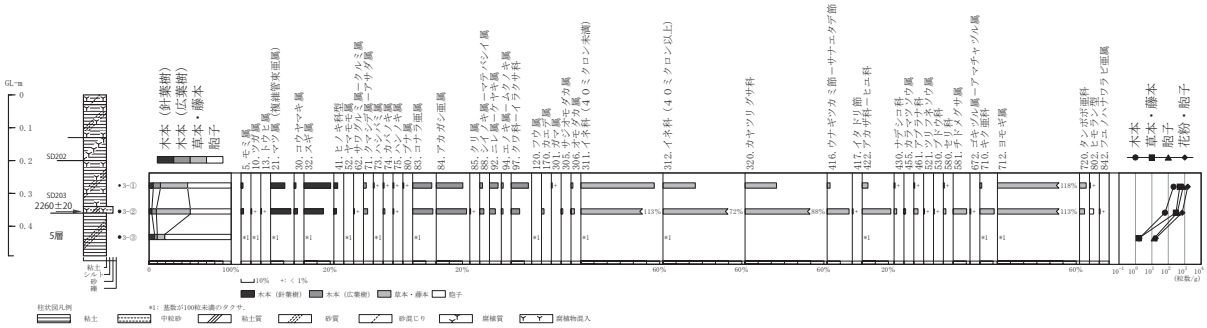
凡例 ◎　：十分な数量が検出できる　○　：少ないが検出できる　△　：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×　：検出できない



第 34 図　花粉ダイアグラム (No.1 地点)

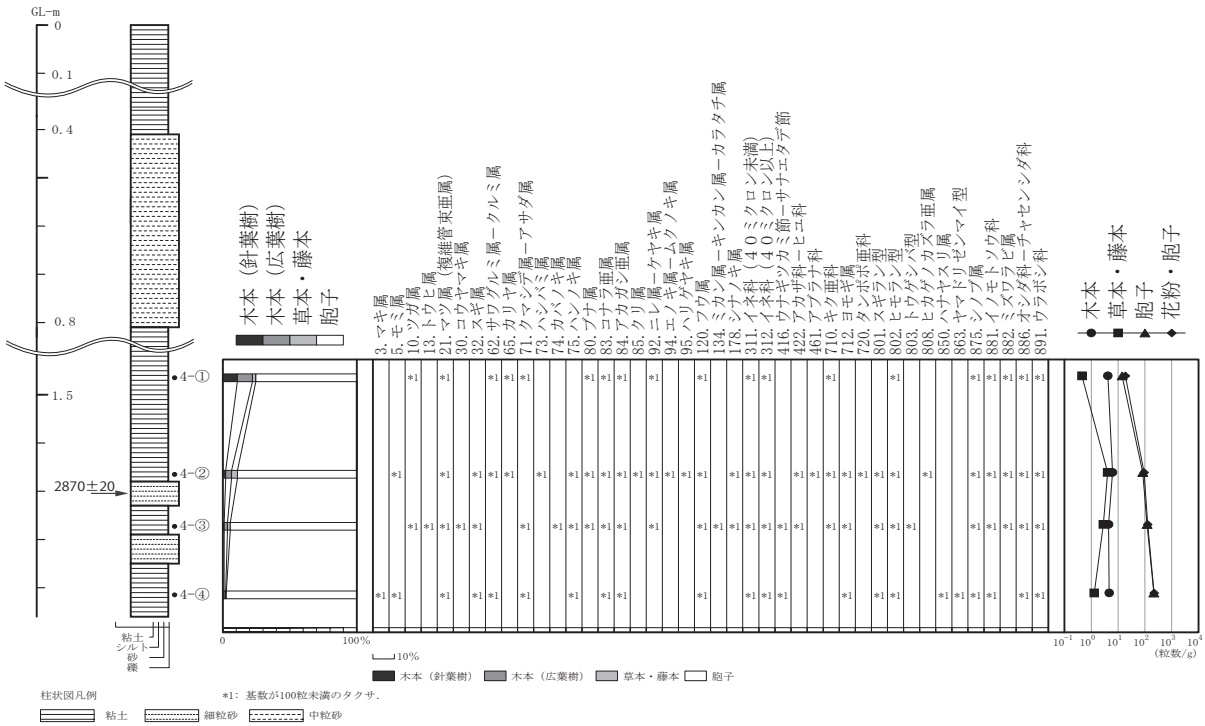


第 35 図　花粉ダイアグラム (No.2 地点)



第 36 図　花粉ダイアグラム (No.3 地点)

ている（木本（針葉樹）は黒，木本（広葉樹）は暗灰，草本・藤本は明灰，胞子は白のスペクトルで表した。）。分類群ごとのグラフの左側には「木本（針葉樹）」，「木本（広葉樹）」，「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示したほか，右側には「木本」，「草本・藤本」，「胞子」，「花粉・胞子（全ての合計）」ごとに含有量（湿潤試料 1g 中の粒数）の変化を示すグラフを示している。



第 37 図　花粉ダイアグラム (No.4 地点)

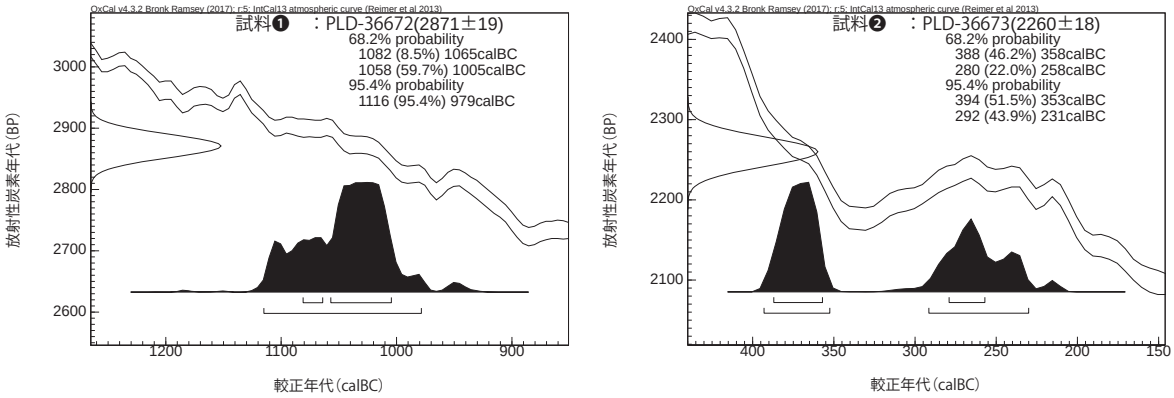
第３表　花粉組成表

		No.1						No.2				No.3						No.4							
試料番号		1-①		2-②		3-③		2-①		2-②		3-①		3-②		3-③		4-①		4-②		4-③		4-④	
3 *Podocarpus*	マキ属	1	5.6%			2	6.9%																	1	5.6%
5 *Abies*	モミ属					1	3.4%	2	3.6%	4	2.0%	2	1.4%	3	1.9%	1	8.3%			3	5.4%			1	5.6%
10 *Tsuga*	ツガ属							2	3.6%					1	0.6%	2	16.7%	1	1.8%			3	9.1%		
13 *Picea*	トウヒ属													1	0.6%							1	3.0%		
21 *Pinus (Diploxylon)*	マツ属（複維管束亜属）	8	44.4%	7	58.3%	12	41.4%	8	14.3%	46	22.8%	15	10.9%	24	15.4%	4	33.3%	26	47.3%	8	14.3%	4	12.1%	4	22.2%
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ属					1	3.4%	3	5.4%	5	2.5%	2	1.4%	4	2.6%							1	3.0%		
32 *Cryptomeria*	スギ属			1	8.3%	7	24.1%	13	23.2%	39	19.3%	28	20.3%	23	14.7%	1	8.3%			7	12.5%	1	3.0%	2	11.1%
41 Cupressaceae type	ヒノキ科型									2	1.0%	4	2.9%	3	1.9%										
52 *Myrica*	ヤマモモ属															1	8.3%								
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属―クルミ属	1	5.6%							3	1.5%			1	0.6%			1	1.8%	1	1.8%			1	5.6%
65 *Carya*	カリヤ属																	3	5.5%	1	1.8%				
71 *Carpinus-Ostrya*	クマシデ属―アサダ属	2	11.1%			1	3.4%	2	3.6%	4	2.0%	3	2.2%	5	3.2%			1	1.8%			1	3.0%	1	5.6%
73 *Corylus*	ハシバミ属			1	8.3%							1	0.7%			1	8.3%			1	1.8%				
74 *Betula*	カバノキ属							1	1.8%			1	0.7%	2	1.3%							1	3.0%		
75 *Alnus*	ハンノキ属					1	3.4%	2	3.6%	1	0.5%	1	0.7%	1	0.6%					9	16.1%	5	15.2%	1	5.6%
80 *Fagus*	ブナ属									1	0.5%	1	0.7%					1	1.8%	1	1.8%	1	3.0%		
83 *Quercus*	コナラ亜属	1	5.6%					10	17.9%	52	25.7%	20	14.5%	24	15.4%	1	8.3%	2	3.6%	4	7.1%	2	6.1%	2	11.1%
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属	2	11.1%			1	3.4%	6	10.7%	30	14.9%	28	20.3%	36	23.1%			1	1.8%	3	5.4%	7	21.2%	3	16.7%
85 *Castanea*	クリ属													1	0.6%					3	5.4%				
88 *Castanopsis-Pasania*	シイノキ属―マテバシイ属									1	0.5%	3	2.2%	5	3.2%										
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ属―ケヤキ属			1	8.3%	2	6.9%			5	2.5%	9	6.5%	7	4.5%			5	9.1%	6	10.7%	1	3.0%		
94 *Celtis-Aphananthe*	エノキ属―ムクノキ属	1	5.6%					1	1.8%	3	1.5%	2	1.4%	2	1.3%					1	1.8%				
95 *Hemiptelea*	ハリゲヤキ属																			1	1.8%				
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科―イラクサ科									5	2.5%	18	13.0%	10	6.4%										
120 *Liquidambar*	フウ属	2	11.1%	1	8.3%											1	8.3%	14	25.5%	6	10.7%	2	6.1%	2	11.1%
134 *Citrus-Fortunella-Ponci.*	ミカン属-キンカン属-カラタチ属																					1	3.0%		
141 *Mallotus*	アカメガシワ属							5	8.9%																
160 *Ilex*	モチノキ属									1	0.5%														
170 *Acer*	カエデ属													3	1.9%										
178 *Tilia*	シナノキ属			1	8.3%	1	3.4%													1	1.8%	2	6.1%		
283 *Weigela*	タニウツギ属							1	1.8%																
301 *Typha*	ガマ属							1	1.8%	2	1.0%	1	0.7%												
302 *Sparganium*	ミクリ属									5	2.5%														
305 *Alisma*	サジオモダカ属													2	1.3%										
306 *Sagittaria*	オモダカ属									3	1.5%	2	1.4%	4	2.6%										
311 Gramineae(<40)	イネ科（40ミクロン未満）	4	22.2%			3	10.3%	38	67.9%	71	35.1%	77	55.8%	176	112.8%	2	16.7%	2	3.6%	8	14.3%	6	18.2%	1	5.6%
312 Gramineae(>40)	イネ科（40ミクロン以上）	2	11.1%			5	17.2%	20	35.7%	67	33.2%	34	24.6%	113	72.4%	1	8.3%	2	3.6%	4	7.1%	1	3.0%	1	5.6%
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	5.6%	1	8.3%	1	3.4%	30	53.6%	94	46.5%	33	23.9%	138	88.5%										
336 *Anelema*	イボクサ属	1	5.6%																						
345 Liliaceae	ユリ科							1	1.8%	1	0.5%														
411 *Rumex*	ギシギシ属					1	3.4%																		
416 *Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節―サナエタデ節							4	7.1%	5	2.5%	3	2.2%	26	16.7%							2	6.1%	2	11.1%
417 *Reynoutria*	イタドリ節													1	0.6%										
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科―ヒユ科	4	22.2%			2	6.9%	5	8.9%	8	4.0%	6	4.3%	34	21.8%	1	8.3%			1	1.8%	1	3.0%		
430 Caryophyllaceae	ナデシコ科							2	3.6%			1	0.7%	3	1.9%										
455 *Thalictrum*	カラマツソウ属													2	1.3%										
461 Cruciferae	アブラナ科									2	1.0%	1	0.7%	5	3.2%					1	1.8%				
521 *Impatiens*	ツリフネソウ属													1	0.6%										
530 Vitaceae	ブドウ科									2	1.0%			1	0.6%										
557 *Rotala*	キカシグサ属			1	8.3%																				
580 Umbelliferae	セリ科											1	0.7%	3	1.9%										
581 *Hydrocotyle*	チドメグサ属									2	1.0%			16	10.3%										
601 *Trachelospermum*	テイカカズラ属									1	0.5%														
672 *Actinostemma-Gynostemma*	ゴキヅル属―アマチャヅル属													1	0.6%										
710 Carduoideae	キク亜科	2	11.1%	1	8.3%	2	6.9%	6	10.7%	6	3.0%	2	1.4%	17	10.9%	1	8.3%	2	3.6%	4	7.1%	6	18.2%		
712 *Artemisia*	ヨモギ属	13	72.2%	2	16.7%	9	31.0%	33	58.9%	127	62.9%	163	118.1%	176	112.8%	6	50.0%			18	32.1%	5	15.2%	1	5.6%
720 Cichorioideae	タンポポ亜科							3	5.4%	10	5.0%	7	5.1%	6	3.8%					1	1.8%				
801 Urostachys cryptomerinum type	スギラン型																			4	7.1%	1	3.0%	1	5.6%
802 Urostachys sieboldii type	ヒモラン型	5	27.8%	2	16.7%	4	13.8%	2	3.6%	3	1.5%	1	0.7%	5	3.2%			1	1.8%	23	41.1%	23	69.7%	16	88.9%
803 Urostachys serratum type	トウゲシバ型							1	1.8%													1	3.0%		
808 Subgenus *Lycopodium*	ヒカゲノカズラ亜属					1	3.4%													1	1.8%				
842 Subgenus *Sceptridium*	フユノハナワラビ亜属							1	1.8%					1	0.6%										
850 *Ophioglossum*	ハナヤスリ属					1	3.4%																	1	5.6%
863 Osmunda cinnamomea. type	ヤマドリゼンマイ型																							1	5.6%
875 *Davallia*	シノブ属	45	250.0%	31	258.3%	58	200.0%	11	19.6%	11	5.4%	15	10.9%	39	25.0%	21	175.0%	34	61.8%	144	257.1%	202	612.1%	286	1588.9%
881 Pteridaceae	イノモトソウ科	35	194.4%	21	175.0%	62	213.8%	21	37.5%	10	5.0%	6	4.3%	23	14.7%	17	141.7%	84	152.7%	60	107.1%	59	178.8%	77	427.8%
882 *Ceratopteris*	ミズワラビ属									1	0.5%			2	1.3%	3	25.0%	6	10.9%	2	3.6%	2	6.1%		
886 Aspid.-Asple.	オシダ科―チャセンシダ科	114	633.3%	43	358.3%	147	506.9%	381	680.4%	263	130.2%	351	254.3%	546	350.0%	33	275.0%	35	63.6%	387	691.1%	495	1500.0%	346	1922.2%
891 Polypodiaceae	ウラボシ科	4	22.2%	2	16.7%	6	20.7%	5	8.9%	3	1.5%	3	2.2%	6	3.8%	2	16.7%	1	1.8%	13	23.2%	12	36.4%	10	55.6%
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	41	227.8%	26	216.7%	51	175.9%	120	214.3%	114	56.4%	129	93.5%	186	119.2%	9	75.0%	11	20.0%	81	144.6%	72	218.2%	66	366.7%
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	29	161.1%	30	250.0%	43	148.3%	58	103.6%	49	24.3%	25	18.1%	65	41.7%	12	100.0%	15	27.3%	40	71.4%	30	90.9%	27	150.0%
木本花粉総数		18	6%	12	7%	29	7%	56	7%	202	19%	138	14%	156	9%	12	10%	55	22%	56	7%	33	3%	18	2%
草本・藤本花粉総数		27	8%	5	3%	23	5%	143	18%	406	38%	331	33%	725	41%	11	9%	6	2%	37	4%	21	2%	5	1%
胞子総数		273	86%	155	90%	372	88%	600	75%	454	43%	530	53%	873	50%	97	81%	187	75%	755	89%	897	94%	831	97%
総数		318		172		425		799		1062		999		1754		120		248		848		951		854	
含有量（粒数/g）		104		25		67		307		1638		1523		706		17		19		93		127		221	

：よりカウント粒数、百分率

(3)　AMS 年代測定結果

年代測定結果を第 4 表及び第 38 図に示す。第 38 図には，OxCal ver. 4.3（Ramsey　2009）による試料ごとの暦年較正図を示した。第 3 表には，試料の詳細，前処理方法，δ ^{13}C 値と 4 種類の年代を示している。



第 38 図　暦年較正結果

第４表　年代測定結果一覧表

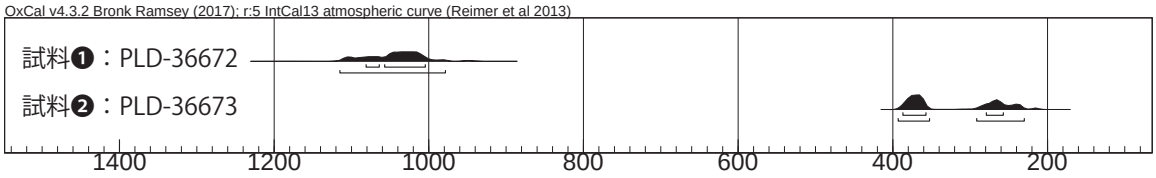
試料														
試料№	調査区	出土地点（遺構ほか）	状況	重量(g)	推定時期	前処理	δ ^{13}C (‰)	δ ^{13}C補正無年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲 1σ暦年代範囲	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲 2σ暦年代範囲	測定番号
❶	深掘り セクション	№4地点試料 №②,③間砂層	炭化物	8.1414	不明	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)	−27.18± 0.17	2908±20	2871±19	2870±20	1082−1065 cal BC (8.5%) 1058−1005 cal BC (59.7%)	1116−979 cal BC (95.4%)	PLD−36672
❷	2区北壁	ＳＤ203埋土 最下部	腐植質 粘土	80.2638	弥生前期～中期	湿式篩分：106μm以下 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)	−19.94± 0.12	2177±19	2260±18	2260±20	388−358 cal BC (46.2%) 280−258 cal BC (22.0%)	394−353 cal BC (51.5%) 292−231 cal BC (43.9%)	PLD−36673

5　年代測定値について

第 39 図に，AMS 年代測定値の分布を示す。

試料❶（深掘りセクション）では 1,116-979cal BC（2 σ）の年代値が得られた。この年代値は，縄文時代晩期に相当する。

試料❷（SD203）では，394-231cal BC（2 σ）の年代値が得られた。この値は弥生時代前期末～中期前半に相当し，出土遺物から推定される堆積時期は弥生時代前期～終末期であり，得られた年代値を内包するものであった。



較正年代(calBC)

第 39 図　暦年較正値の分布

6　花粉化石含有量の少なかった原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について，通常は以下のようなことが考えられている。

1．堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径，比重が著しく異なり，堆積物中に花粉化石が含まれない。
2．堆積速度が速いために，堆積物中に花粉化石が含まれない。
3．「土壌生成作用」の及ぶ期間が短く，花粉の付加量が少なかった。
4．土壌生成作用に伴う堆積物で，堆積速度が極めて遅く，堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
5．花粉化石が本来含まれていたが，堆積後の化学変化などにより花粉化石が消滅した。
6．有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く，処理の過程で花粉化石が濃縮できなかった（希釈効果）。

(1) №1 地点

粘土を分析対象としたことから，上記の１は原因とならない。また，掘削時にグライ化が認められなかったことから，５も同様である。また，微粒炭の含有量は多く，胞子化石の割合が高いこと，花粉化石の含有量が少ないことから，６の希釈効果が生じたものとも考えにくい。一方，フウ属で代表される第三紀層からの二次堆積と考えられる花粉石が多く検出されるなど，浸食作用を受けた直後に堆積した可能性が指摘できる。以上のことから，２の「堆積速度が速いために，堆積物中に花粉化石が含まれなかった」可能性が高い。ただし，微粒炭の含有量はやや多く，胞子化石の割合が高いことから，４の「土壌生成作用に伴う堆積物で，堆積速度が極めて遅く，堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。」可能性も残る。洪水成の堆積物で，流域の土壌や三紀層を浸食し巻き込んだ可能性が指摘できる。

当初，当該層 (準) に対して地山との認識がなかった。しかし，分析結果から当該層 (準) が全て地山に含まれる可能性が指摘できる。

(2) SD203 埋土（№2，3 地点試料 2-①，2-②，3-①，3-②）

有機質粘土を分析対象としており，木本花粉化石含有量も数十～数百粒 /g を示す。一方で微粒炭が多量に含まれることから，上記６が主因と考えられる。ほとんどの試料で，木本花粉が 100 粒以上計数されており，統計データとして採用可能である。

(3) 地山（№3 地点試料 3-③，№4 地点）

粘土を分析対象としたことから，上記の１は原因とならない。また，掘削時にグライ化が認められなかったことから，５も同様である。また，微粒炭の含有量は多く，胞子化石の割合が高いものの，花粉化石の含有量が少ないことから，６の希釈効果が生じたものとも考えにくい。一方，フウ属で代表される第三紀層からの二次堆積と考えられる花粉石が多く検出されるなど，浸食作用を受けた直後に堆積した可能性が指摘できる。以上のことから，２の「堆積速度が速いために，堆積物中に花粉化石が含まれなかった」可能性が高い。ただし，微粒炭の含有量は多く，胞子化石の割合が高いことか

ら，４の「土壌生成作用に伴う堆積物で，堆積速度が極めて遅く，堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。」可能性も残る。洪水成の堆積物で，流域の土壌や三紀層を浸食し巻き込んだ可能性が指摘できる。また，微粒炭のみで考えると，周囲の扇状地を成している三瓶火山由来の火砕流堆積物中の微粒炭に起源を求めることも可能である。

7　局地花粉帯の設定

花粉分析結果を解析するに当たり，通常は木本花粉化石群集の変化を読み取り，花粉分帯（局地花粉帯の設定）を行う。さらに，分帯ごとに古植生等古環境を推定し，その変遷を明らかにする。一方今回の分析結果では，統計処理可能な量の木本花粉化石が得られた試料が，いずれも SD203 内から得られており，時期的な差がないことから，花粉分帯を行わなかった。

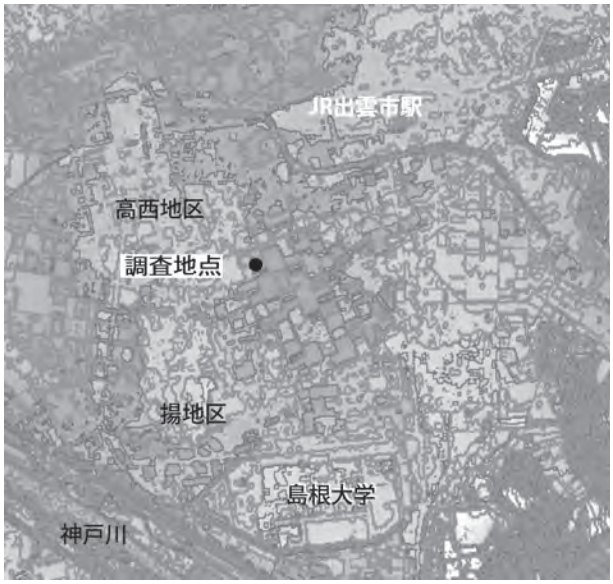
8　古環境について

高西遺跡で実施した花粉分析結果を基に，高西遺跡周辺における縄文時代晩期～弥生時代中期頃の古環境を推定する。また，時間軸に沿って古い時期から新しい時期へと示す。

（1）地山（縄文時代晩期）

下部の砂層内から，1,116-979cal BC（2 σ）の年代値が得られた。前述のように，洪水に伴って流域の土壌や第三紀層を浸食し，取り込みながら堆積したものと考えられる。一方，調査地点周辺のコンターマップ（第 40 図）に示したように，調査地付近が凹地となっていることが分かる（色調の濃い地点ほど標高が低く表現されている。）。南北方向に低地が広がる傾向にあり，南端が神戸川に接するようにも見えることから，神戸川の旧流路の一つである可能がある。ただし，旧流路の時期を含め，西側の高西地区から揚（あげ）地区に至る比高差 2m ほどの微高地や，神戸川南岸に位置する新宮川右岸の低地の存在など，更に検討すべき課題があり，現地調査を更に行う必要がある。

また，木本花粉含有量が数個 /g 未満と少なく，第三紀層からの二次堆積と考えられる花粉化石が多く検出される。第三紀型植物の代表といえるフウ属が 10 ～ 25％を占めることから，堆積時期である縄文時代晩期の植生をどの程度反映しているかも不明であり，植生復元を行わなかった。



第 40 図 高西遺跡周辺地域のコンターマップ
カシミール 3D にて作成

（2）SD203（弥生時代前期～中期）

394-231cal BC（2 σ）の年代値が得られた。

花粉分析結果では，胞子が 50％ほど，草本・藤本花粉も 30 ～ 40％を占め，木本花粉は 10 ～ 20％にすぎなかった。また，微化石概査では微粒炭と火山ガラスが多く検出されている。

微粒炭や火山ガラスには，周囲の扇状地を形成している三瓶火山由来の火砕流堆積物を起源としている可能性が高い。木本花粉の割合が低いことから，調査地近辺に森林は存在せず，南から東に連なる丘陵から中国山地，神戸川流域の低地からもたらされた可能性が高い。丘陵にはアカマツやコナラ類を主要素とする二次林，丘陵の奥や中国山地にカシ類を主要素とし，モミ，ツガ，コウヤマキなどの温帯針葉樹を混淆する照葉樹林が分布していたと考えられる。また，スギは神戸川沿いの低地に分布していたと考えられる。一方　SD203 内にはガマ類やミクリが生育し，続く湿地にはアシやカヤツリグサ類が生育していたと考えられる。また，イネ科（40 ﾐｸﾛﾝ以上）花粉も少なからず検出されることから，SD203 の流域では水田耕作も行われていた可能性がある。また，湿地の外側で日当たりの良いやや乾燥した場所には，ヨモギ類やオシダ科，フユノハナワラビ亜属のシダ類が生育する草原が広がっていた可能性がある。

9　まとめ

高西遺跡で実施した花粉分析，年代測定の結果から，以下の事柄を推定した。

1) SD203 は，弥生時代前期から中期の遺構である。

2) 遺跡のベースは，縄文時代晩期の洪水成堆積物で構成されている。

3) 遺跡の東側の凹地が，神戸川の旧流路の一つである可能性が指摘できる。旧流路の時期も含め，西側の高西地区から揚地区に至る比高差 2m ほどの微高地や，神戸川南に位置する新宮川右岸の低地の存在など，更に検討すべき課題がある。

4) SD203 流域の古植生を推定した。周辺には湿地から乾燥した草地が広がっており，流域のどこかでは水田耕作も行われていた。丘陵にはアカマツやコナラ類を主要素とする二次林，丘陵の奥や中国山地にカシ類を主要素とし，モミ，ツガ，コウヤマキなどの温帯針葉樹を混淆する照葉樹林が分布し，神戸川沿いの低地にはスギが分布していた。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

中村純 1974「イネ科花粉について　特にイネを中心として」『第四紀研究』13，187 ～ 197 頁

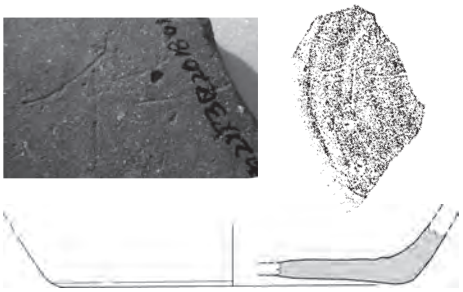
渡辺正巳 2010「花粉分析法」『必携 考古資料の自然科学調査法』ニュー・サイエンス社，174 ～ 177 頁

第 5 章　まとめ

第 1 節　高西遺跡出土の文字資料について

1　刻書土器

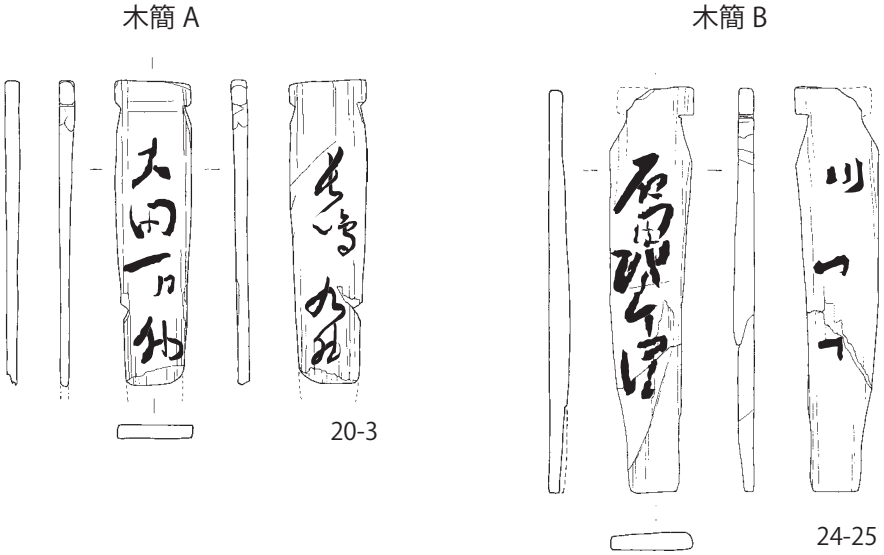
遺物包含層から 1 点の刻書土器が出土している。焼成後の須恵器坏の内面に刃器で刻んでおり，出土地近傍で記された蓋然性が高い。本資料は底部片のみで，切り離しは糸切り後に削り調整を行うことから，8 世紀前半のものと考えられる。



第 41 図　刻書須恵器

刻まれた文字は「仁」とみられる。旁の「二」は偏に対して長く刻まれ，筆記者の筆癖による可能性もあるが，隷書体の書風に近い様相を示す。「仁」字は県内では初例となるが，全国的には多く確認される。その意味としては，数字の「二」と同義で書かれるほか，万葉仮名として書かれる例もある。したがって，本資料の語義についても判然としない。

しかしながら，本資料から，遺跡近傍に識字層が存在したことを窺えることは注目できる。包含層で硯に転用された蓋も確認されることも，その証左となろう。出土地点の南には神門寺境内廃寺が所在することから，寺院施設との関連が注目される。



第 42 図　木簡実測図

２　木簡

遺物包含層から３点の木簡が出土している。ここでは２点の木簡について考えたい。
木簡の釈文は次のとおりである。

木簡Ａ　・「＜大田所物」
　　・「＜長嶋　九升　　(119) × 29 × 6　039

木簡Ｂ　・「＜石田□□〔聲聞ヵ〕」
　　・「＜［　　］」　　190 × 31 × 7　032

（１）　木簡の形状と機能　木簡Ａは２層，木簡Ｂは３層から出土した。いずれも遺構に伴うものではなく，周辺から流れ込んだ蓋然性が高い。木簡Ａ・Ｂは位置も層位も異なって出土しているが，形状や調整が近似しており，同時代の資料と考えられる。

それぞれの木簡の形状や調整は次の通りである。木簡Ａは，上端および左右両辺を削りで整形し，下端部にむけて幅が少し狭まる。木簡Ｂも，四周を削りで整形し下端部に向けて幅を狭め，上端部左右に切り込みを入れる。

木簡Ｂは，廃棄時に表面から刃を入れ切り折りしたことを確認でき，現状では２片に分かれている。木簡Ａも下端は切り折りとなっており，木簡Ｂと同様に廃棄時にかかる所作が行われたと考えられる。

木簡Ａ・Ｂともに，上端部左右に切り込みを入れ，下端部が狭まる形状で，荷札として機能したとみられる。それとともに，廃棄時の切り折りから，荷札としての機能をあえて喪失させた意図が読み取れる。つまり，荷札として物品に取り付けて送付先に送られた後，その場で廃棄されたのではなく，帳簿等に荷札の記載内容の転記あるいは校合が行われた上で，意図的に廃棄されたものと考えられる。したがって木簡が廃棄された場は，荷札が付けられた物品の送付先ではなく，荷札の記載内容を確認した場とみるべきだろう。当然，両者が同一の場である可能性も否定できないが，木簡Ａ・Ｂの出土地点の近傍にかかる施設が存在した蓋然性は高いと言える。

（２）　木簡Ａの解釈　木簡Ａ・Ｂは遺物包含層からの出土のため，その年代については判然としない。しかしながら木簡Ａについては，荷札が付けられた物品名と送付先と見られる記載が表裏に認められる。そこで，木簡Ａの内容から考えてみたい。

まず，木簡Ａの一面「長嶋　九升」に注目すると，荷札木簡の場合，数量の上には物品名が記されることが通例で，「長嶋」は何らかの物品を示唆すると考えられる。「升」を単位とすることから，米などの穀物であることが窺える。このような固有名詞とも捉えられる物品名を記した荷札木簡で想起されるのが，いわゆる「種子札」と称される種籾に付けられた荷札である。現状では，８～９世紀の種子札の報告例が多い。

そうした観点から注目できるのは，出雲市立図書館蔵「神門郡組下村々産物書出寄帳」（以下，産物

書出寄帳と略）である。同書は，享保 20（1735）年に幕府が諸藩へ作成を命じた諸国産物帳のうち，松江藩による『出雲国産物帳』の基礎資料の一つとしたもので，米の品種名などが列記される。その中で，「長嶋」は晩稲の一つに見えるのである。したがって，少なくとも 18 世紀前半には神門郡内で「長嶋」が栽培されていたと言え，木簡 A の「長嶋」も晩稲の品種を示唆する蓋然性が高いと考えられる。なお，9 世紀の種子札に見える品種名が近世の農書『清良記』巻七の品種名と一致する例があるように（平川 1999），近世の品種名でも古代まで遡る可能性がある。

また，注目されるのは近傍の天神遺跡（第 3 図参照）でも同種の木簡が出土していることである。天神遺跡第 7 次調査では，石敷道路から 5 点の荷札木簡が見つかっている（出雲市教委 1997）。主な木簡は，次の通りである。

1 号木簡

・北□弐升

・□□□よこうへ」　　126 × 30 × 5　032

4 号木簡

・□のみ□内くほ

・みの三升　　121 × 28 × 4　032

5 号木簡

・三升よけうへ

・□□□よけ　　126 × 25 × 2　033

さらに，12 次調査でも石敷状遺構上面の包含層から 2 点の荷札木簡が出土している。1 点は判読できないが，もう 1 点は次のように釈読される。

・□□□物

・四升みの　　95 × 20 × 4　033

この木簡について，岡宏三氏は先掲の「産物書出寄帳」に中稲の品種として「みの」が見えることから，穂籾用の荷札と推定している（岡 2002）。そのように見ると，第 7 次調査 4 号木簡も「みの」の品種を記したものと捉えられよう。また，1 号木簡は「北□弐升」と釈読されるが，「産物書出寄帳」に早稲の品種として「北国」が見えており，木簡の墨痕から判断するに「北国弐升」である蓋然性が高いと言える。そうすると，「よけ（こ）うへ」も稲の品種を示唆する可能性がある。

このように，天神遺跡出土の荷札木簡は高西遺跡出土の当該木簡と内容の上でも類似しており，その関連性が注目される。稲の品種を記した荷札が近接した遺跡で複数出土することは，全国的にも稀有な事例であろう。

天神遺跡の荷札木簡はいずれも石敷遺構に関連して出土し，この遺構は一連のものと捉えられている。第 7 次調査の際に石敷遺構は近世前期の遺構とされ，木簡も当該期のものとされた（出雲市教委 1997）。しかし第 12 次調査では，遺構で 13 世紀の土師器皿が出土したため，中世期の遺構とされた（出雲市教委 2002）。石敷遺構の年代については改めて検討する必要性を感じるが，少なくとも中世まで遡る可能性があることは注目される。

高西遺跡の荷札木簡についても，出土した遺物包含層に12世紀後半～13世紀の貿易陶磁器が比較的多く認められ，年代の上でも天神遺跡のものと近接する可能性がある。

また，木簡Aは「長嶋　九升」の裏に「大田所物」とある。出雲西部における「大田」の地名としては，12～14世紀にかけて見える「大田別宮」「大田郷」がある。その比定地は，出雲市斐川町阿宮近辺に比定する見解（井上1991）や，出雲市斐川町千家・北島付近に比定する見解（原2009）がある。ここではその比定の議論には触れないが，上記の考古学的な年代観と「大田」の名称の存続時期とが一致することは注目して良いと考える。

そこで上記の解釈をふまえて，木簡Aの機能について考えたい。先述したように，その出土状況から木簡Aは，帳簿等に荷札の記載内容の転記あるいは校合が行われた上で，意図的に廃棄されたものとみられる。そして，木簡が廃棄された場は，送付先ではなく，記載内容を確認した場と考えた。木簡Aは「大田」から送られてきた穂籾の荷札か，「大田」へ送るための種籾を分配するための荷札などの機能を推定できる。そうすると，高西遺跡周辺には「大田」との間で穂籾あるいは種籾を送受する施設が存在したと考えられる。

いずれにしても，木簡Aは天神遺跡出土の荷札木簡とともに，出雲地方の農業史を考える上で重要な資料と言え，今後の研究に期待したい。

（3）　木簡Bの解釈　木簡Bについては，形状や調整，廃棄の処置が類似することから，木簡Aと同時期のものと推定できる。しかしながら，墨書の残存状況が良くないため，判読できない文字が多い。

片面については，「石田」の文字は判読できる。地名である蓋然性が高いが，木簡Bの出土地点の近傍にこれと一致する地名は確認できない。木簡Aの例からすると，近傍ではない可能性もあるだろう。また，「石田」に続いて2字書かれているとみられるが，「聲聞」の可能性を指摘した。「聲聞」は仏教用語で修行僧を示唆する語であるとともに，中世後期においては唱門（声聞）師といった職業的芸能集団を意味する。本木簡の「聲聞」は中世前期に属するとみられることから，前者の意と捉えられるが，木簡の字面の意味としては判然としない。ただし，木簡Aと同様の形状をすることからして，稲などの品種名を記した可能性もある。

参考文献

出雲市教育委員会1997『天神遺跡第7次発掘調査報告書』

出雲市教育委員会2002『天神遺跡（第12次発掘調査）』

井上寛司1991「簸川平野の開発と大社祭神の転換」『大社町史　通史編上』第三章

岡宏三2002「天神遺跡第12次調査出土墨書木札の釈文について」『天神遺跡（第12次発掘調査）』

原慶三2009「塩冶の中世」『出雲塩冶誌』　出雲塩冶誌刊行委員会

平川南1999「新発見の「種子札」と古代の稲作」『国史学』169　国史学会

髙橋周2018「島根・高西遺跡」『木簡研究』第40号　木簡学会

第２節　調査の成果

高西遺跡第２次発掘調査において，遺構は調査区を南北に縦断する２条の溝と土坑１基を，遺物は，弥生土器，石器，土師器，須恵器，貿易陶磁器，種子札などを発見した。

主な遺構・遺物について以下にまとめる。

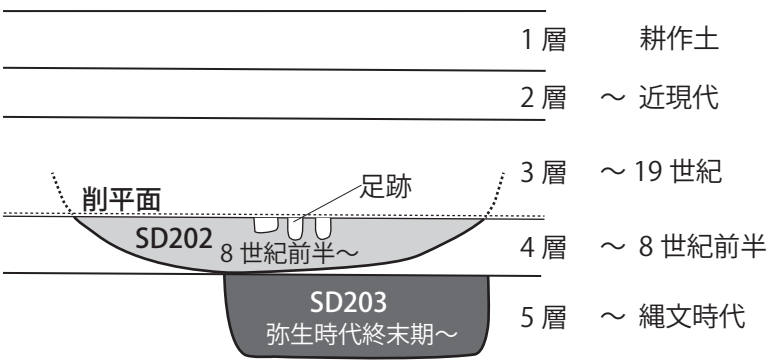
溝 SD202 は，基本層序第４層を掘り込み，溝底面の標高は，ほぼ一定であるため，流れる方向は不明である。溝は，直線的であるが，３区で西にややカーブするため，調査地の西側にある自然堤防の縁辺部を囲むように掘ったと考えられる。遺物は，弥生時代前期から８世紀前半の土器等が出土している。また，溝の上部には，多数の足跡が砂に埋もれた状態で検出した。これらの遺構の時期は，溝が第４層を掘り込んでいることから，８世紀前半以降と考えられるが，第４層の上部が後世に削平されているため，廃絶時期は不明である。足跡については，第４層が削平された後に，溝跡の地盤が軟弱であったため残存したと考えられるが，時期は特定できない。

溝 SD203 は，縄文時代に堆積した地山（基盤層）をほぼ垂直に掘り込み，方形の断面である。埋土からは弥生時代前期から終末期の土器，弥生時代前期頃の石鏃を確認している。溝の埋没期は弥生時代終末期頃と推測する。自然科学分析の年代測定も，弥生前期から中期の値を得ており，矛盾はない。埋没後に第４層が堆積する。

今回の調査では，弥生時代前期から近代までの遺物が出土し，この地域での人間の活動が，弥生時代前期頃から始まることがわかった。また，奈良時代の軒丸瓦や須恵器の蓋を利用した硯が出土したことから，神門寺境内廃寺の関連施設が付近にあった可能性がある。

さらに，第５章第１節で取り上げた文字資料については，この地域の歴史を語るうえで貴重な発見であった。３層から出土した刻書土器は，８世紀前半の須恵器の内側に「仁」の刻書があり，この文字は県内初例となる。語義は判然としないが，この遺物も寺院との関連が想定できる。また，２層から出土した中世のものと考えられる種子札には，地名「大田」と共に稲の品種名「長嶋」が書かれている。稲の具体的な品種名が明らかになったことは重要である。３層からは，中世の貿易陶磁器も出土していることから，調査地周辺には館などがあり，種籾の管理を行ったと想定できる。

以上のように，高西遺跡の発掘調査から多くの成果が得られた。出雲地方の古代や中世の様相を明らかにする上での一助になることを期待する。



第 43 図　遺構関係図

写　真　図　版

1　調査区全景（南から）

2　調査前状況（北から）

図版 2

1　完掘状況（上が北）

2　3 区 c-c' 断面検出状況（北から）

3　2 区 b-b' 断面検出状況（北から）

4　1 区 a-a' 断面検出状況（北から）

5　土坑 SK211 検出状況（北から）

6　土坑 SK211 完掘状況（北から）

1　溝 SD201　検出状況（東から）

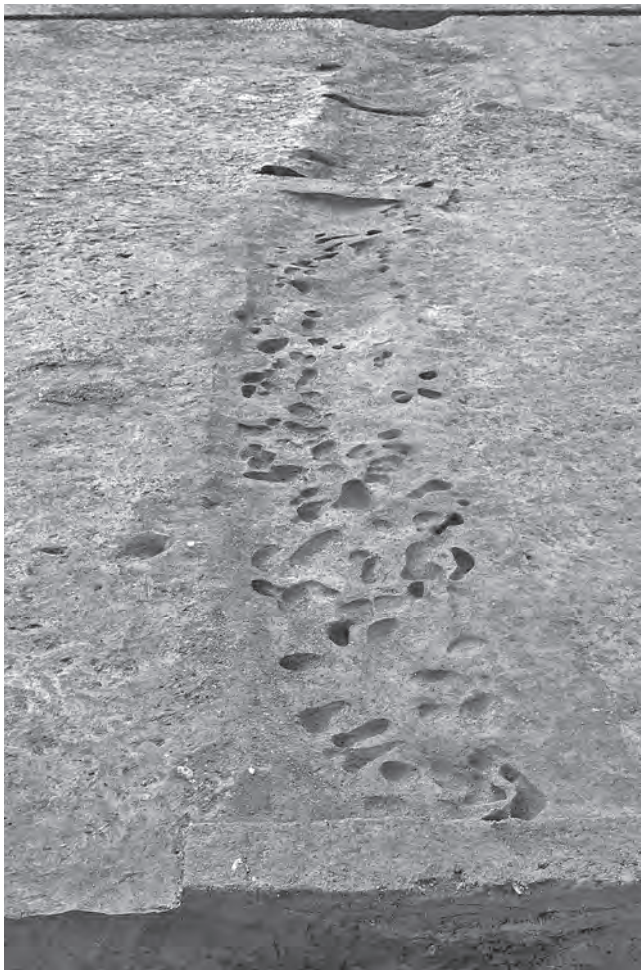
2　溝 SD201　完掘状況（東から）

3　溝 SD202　検出状況（北から）

4　溝 SD202　完掘状況（北から）

図版 4

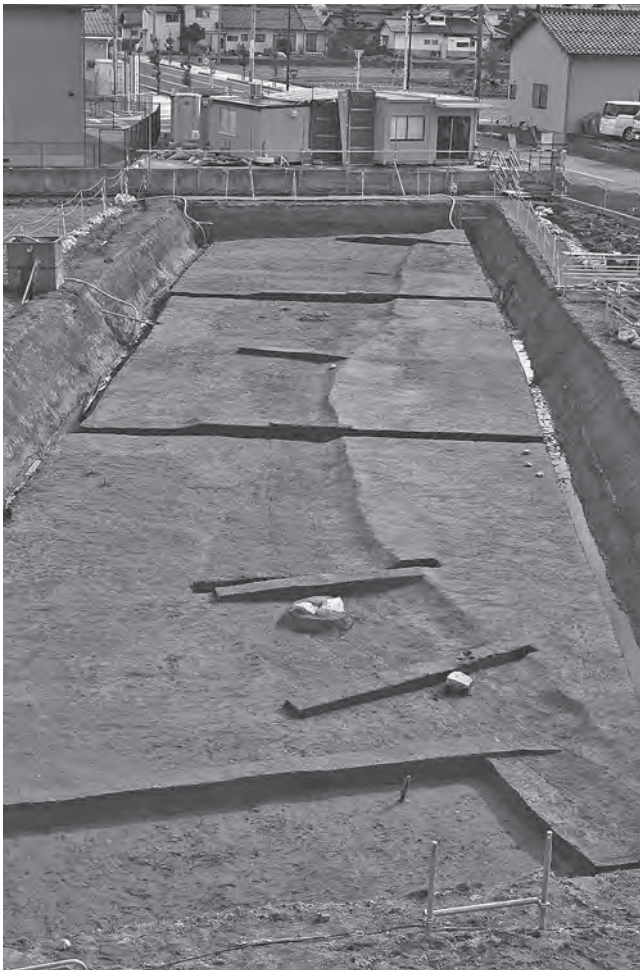
1　溝 SD202　2 区足跡検出状況（北から）



2　溝 SD202　2 区足跡完掘状況（北から）

3　溝 SD202　足跡完掘状況（北から）

4　溝 SD202　3 区足跡調査状況（北から）



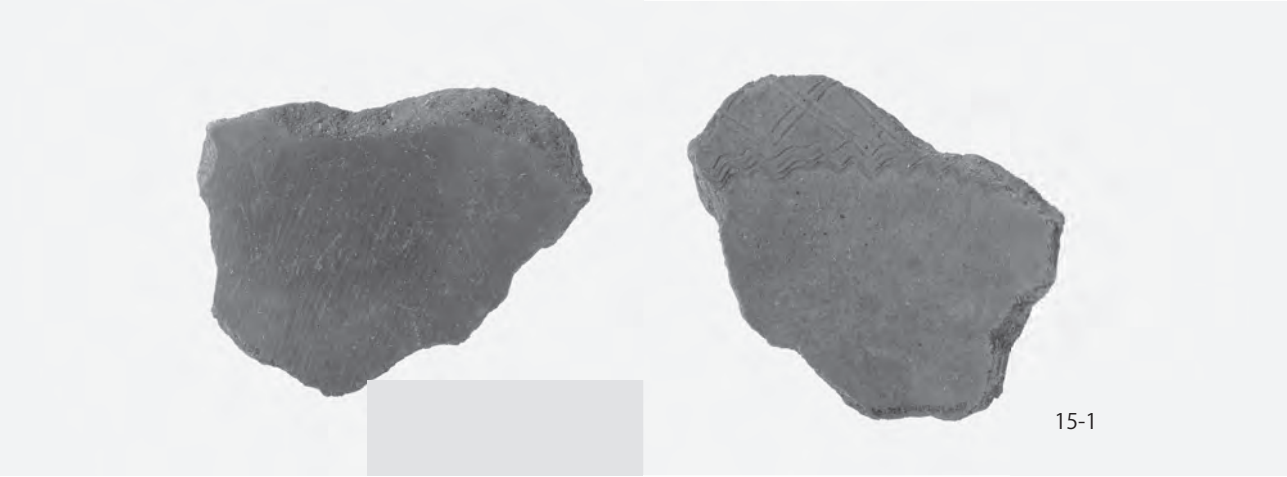
1　溝 SD203　検出状況（北から）

2　溝 SD203　完掘状況（北から）

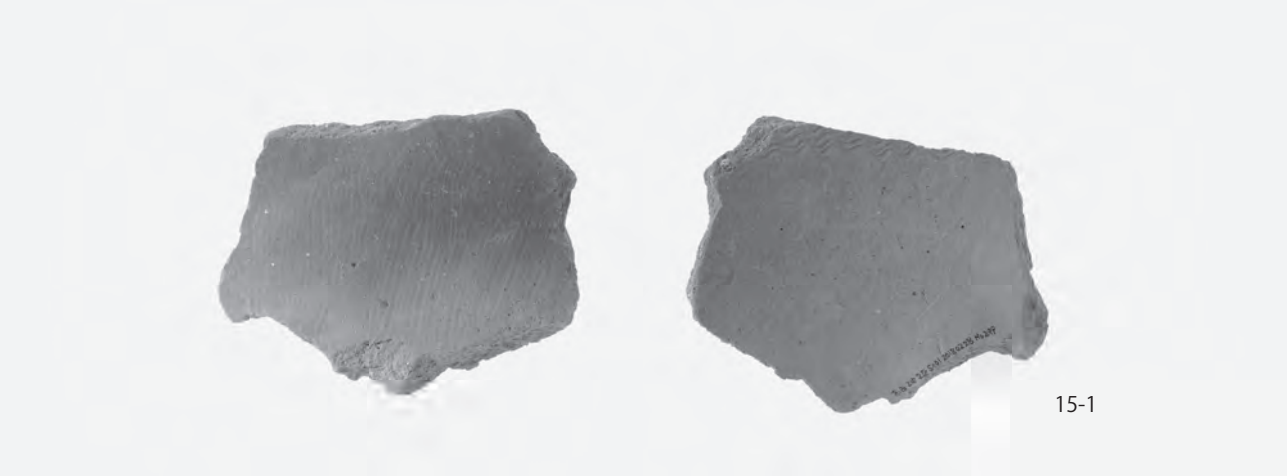
3　溝 SD203　2 区土器出土状況（北から）

4　2-3 区間　深掘り調査状況（南から）

図版 6　　土坑 SK211 出土遺物，溝 SD201 出土遺物



15-1

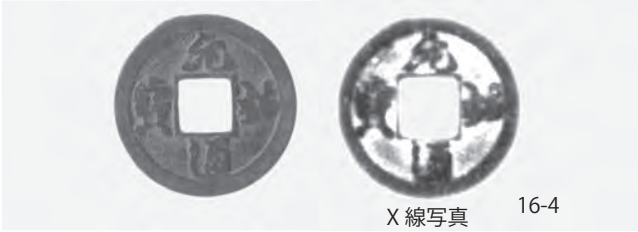


15-1

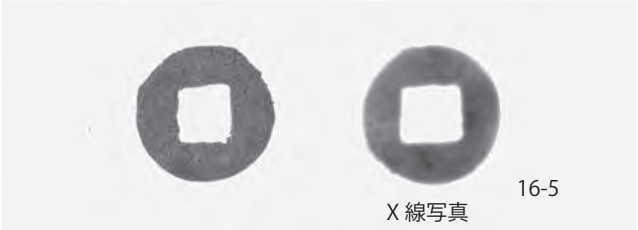
16-2

16-1

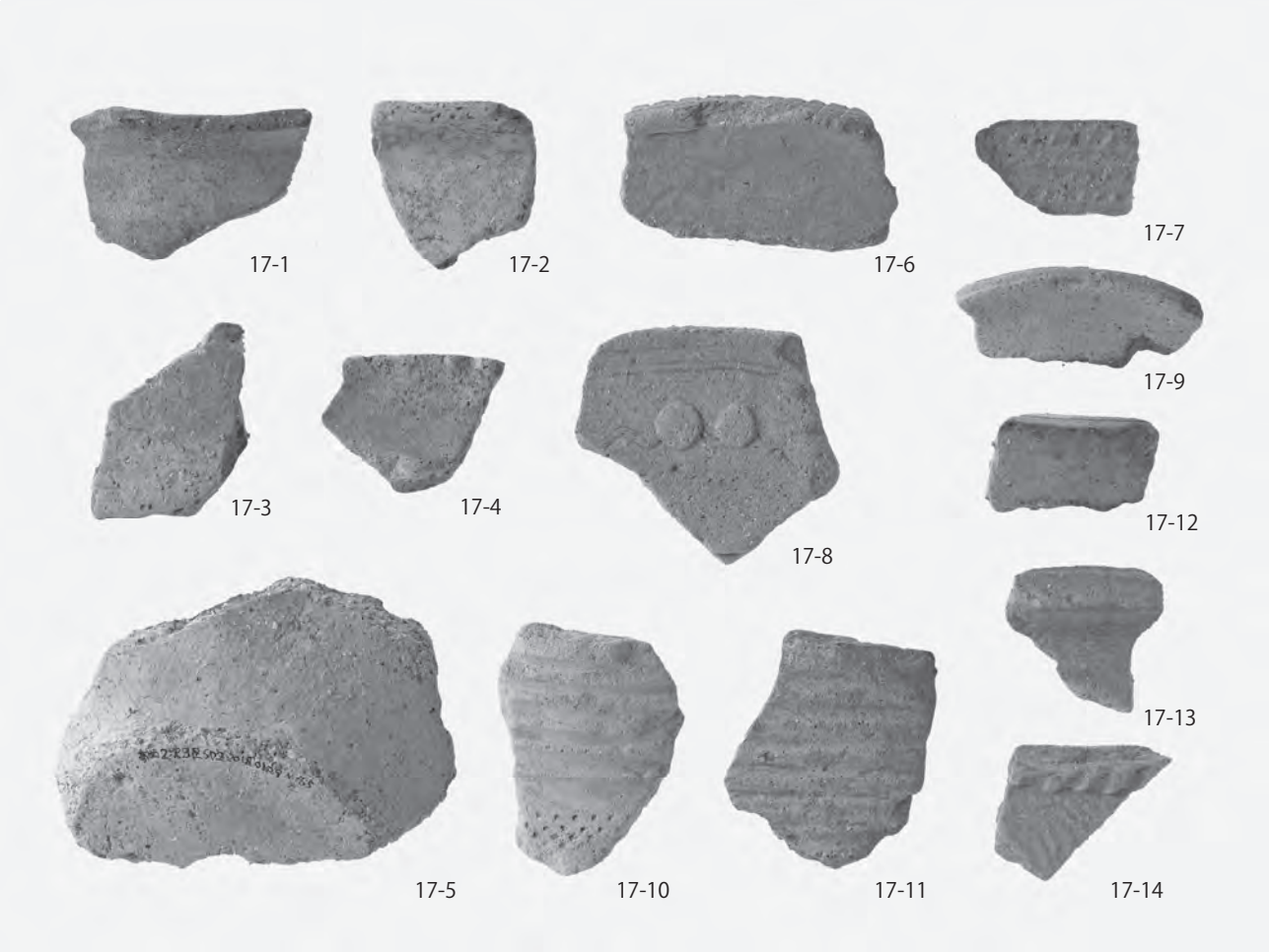
16-3

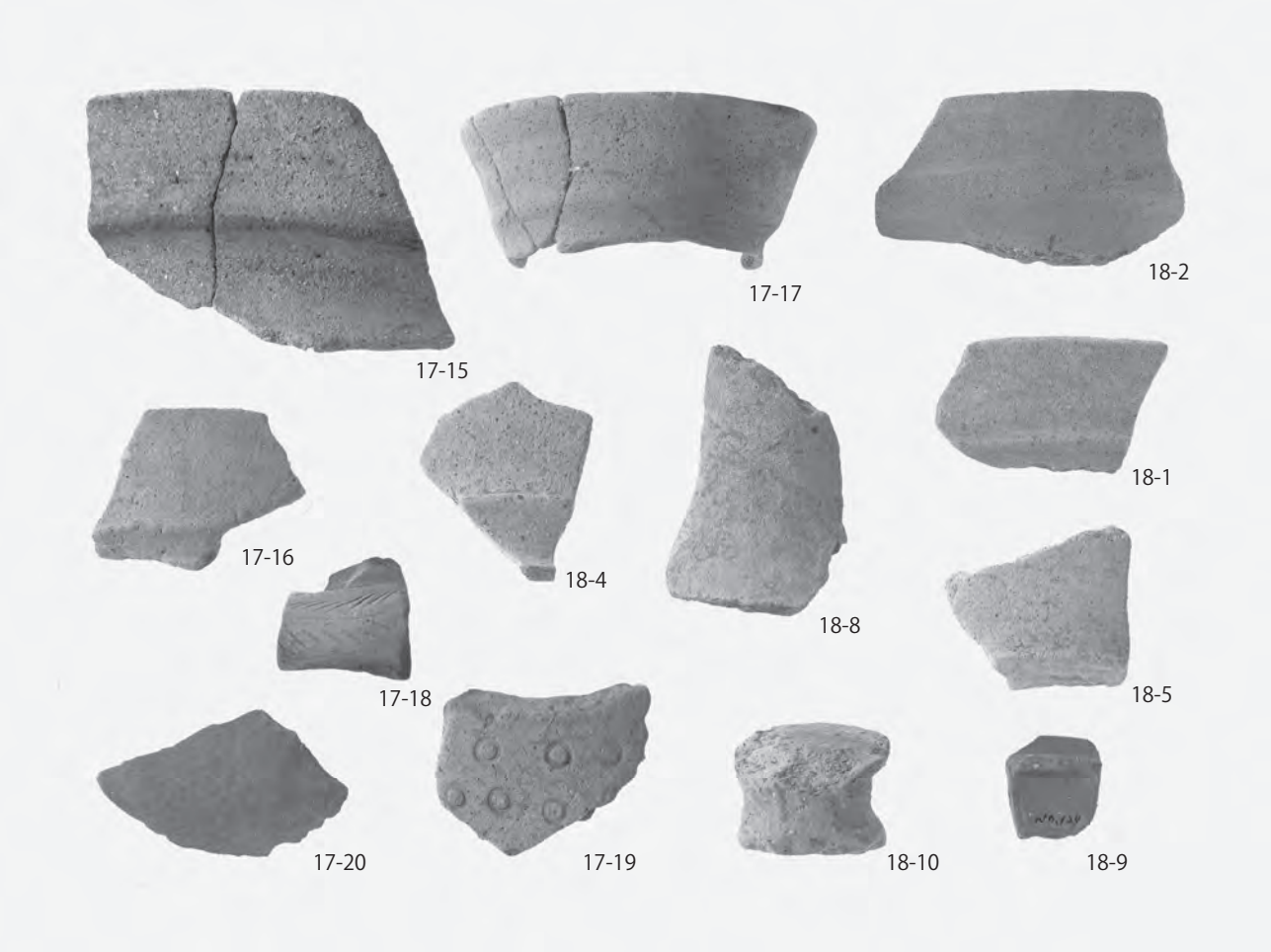


X 線写真　16-4

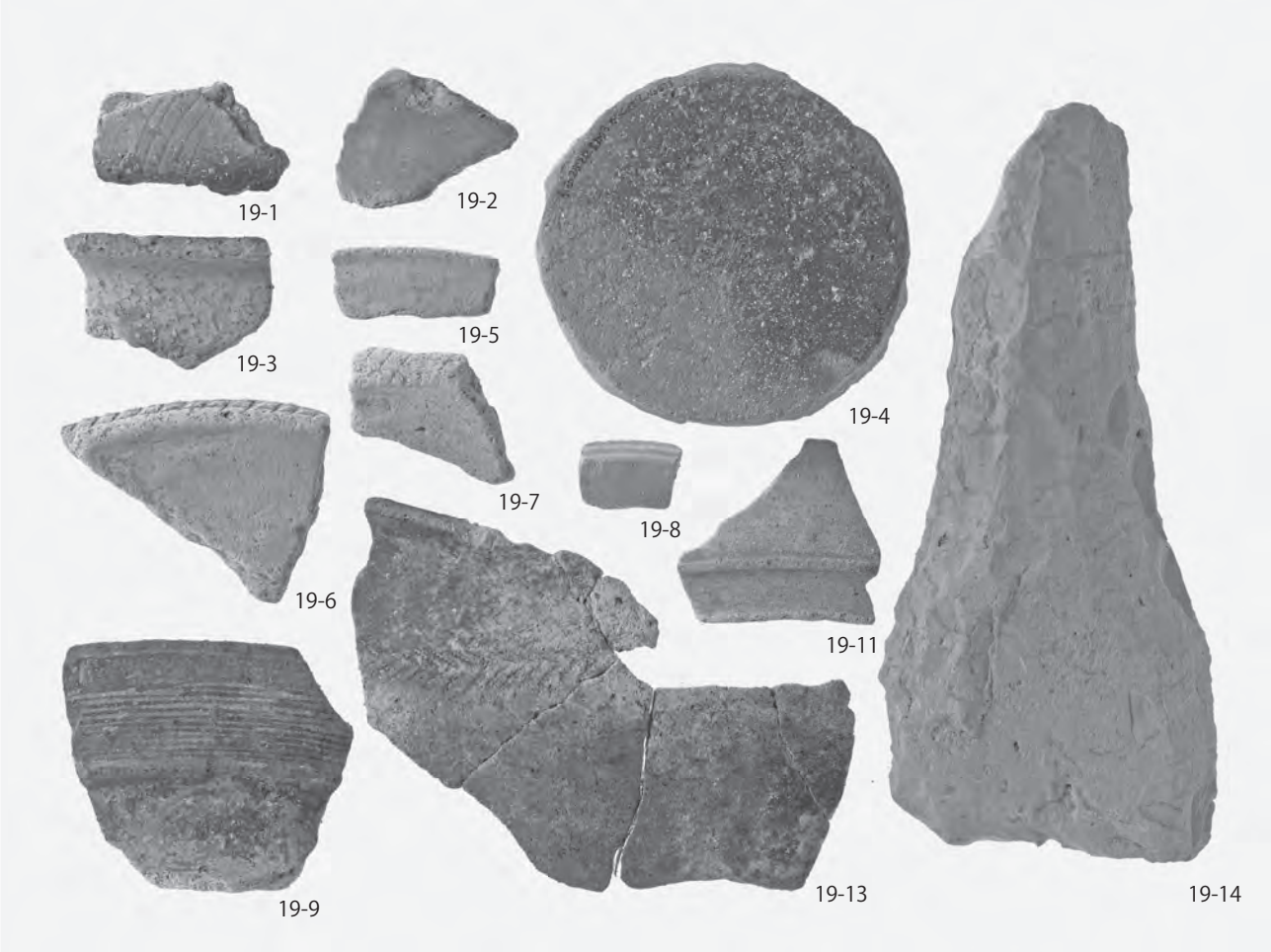


X 線写真　16-5


17-1
17-2
17-6
17-7
17-9
17-3
17-4
17-8
17-12
17-13
17-5
17-10
17-11
17-14


17-17
18-2
17-15
18-1
17-16
18-4
18-8
17-18
18-5
17-20
17-19
18-10
18-9

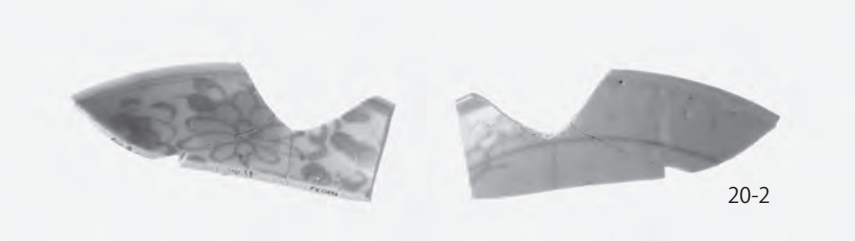
図版 8　　溝 SD202 出土遺物，溝 SD203 出土遺物

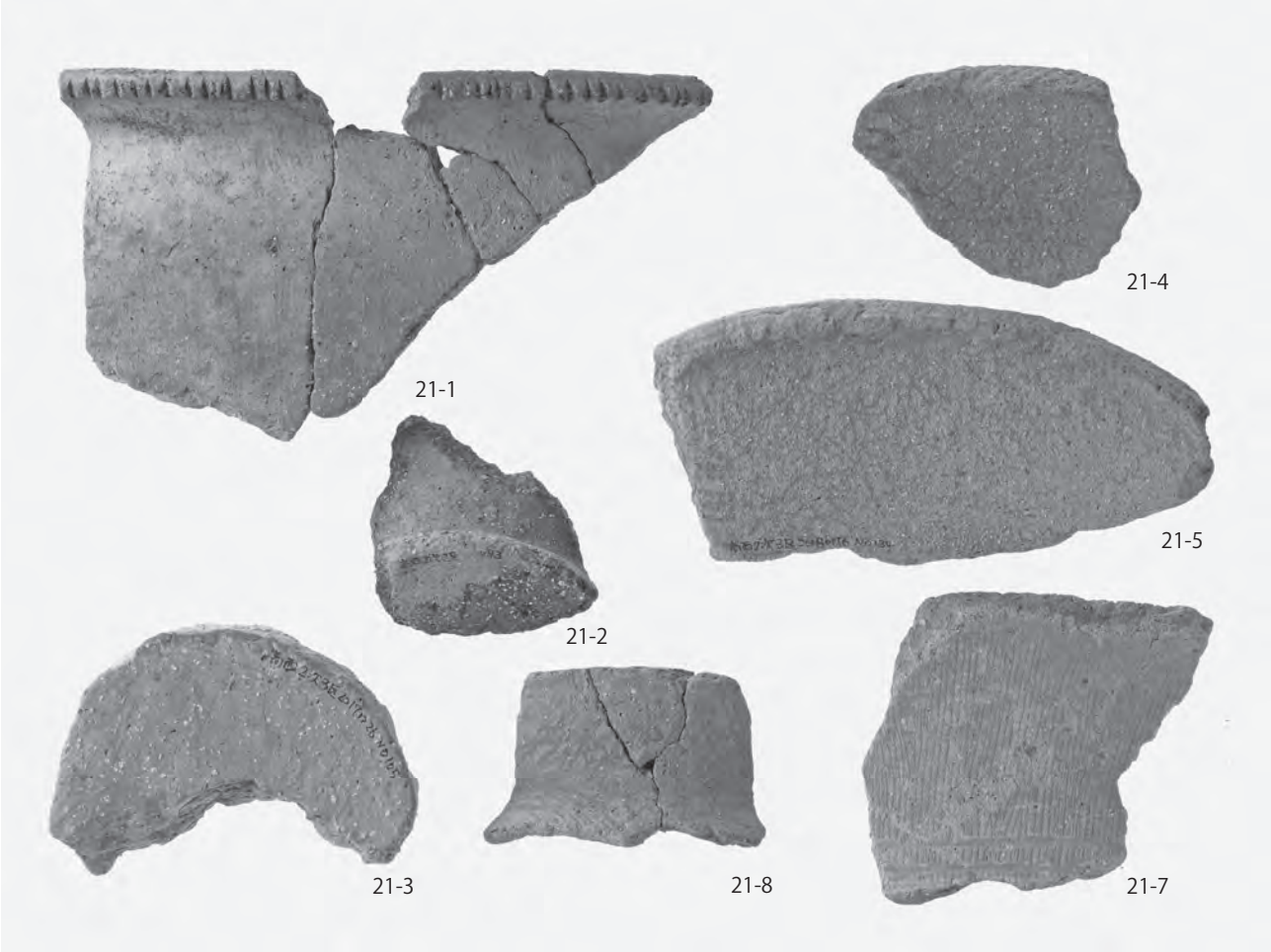


20-3

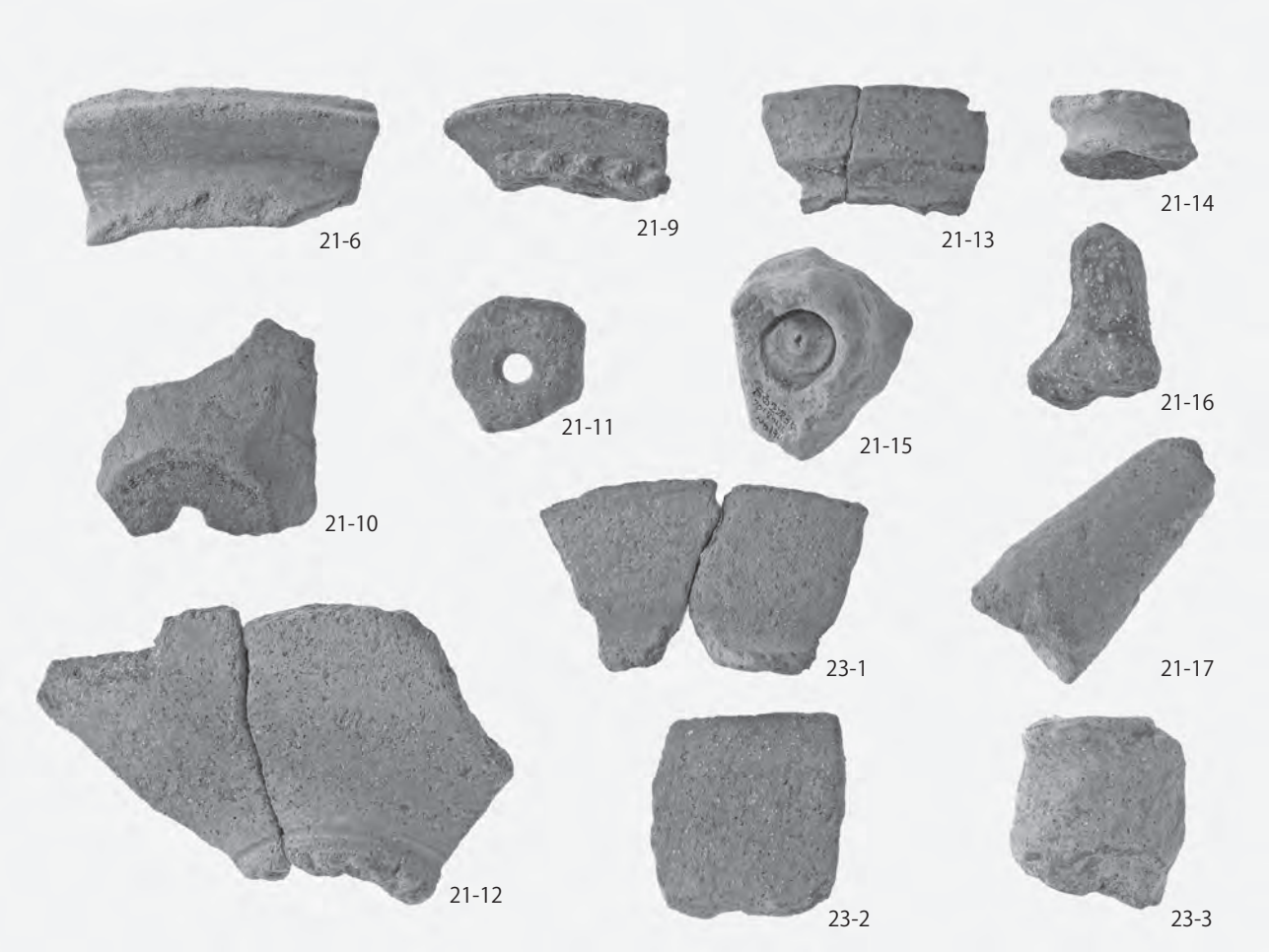
赤外線写真
20-3

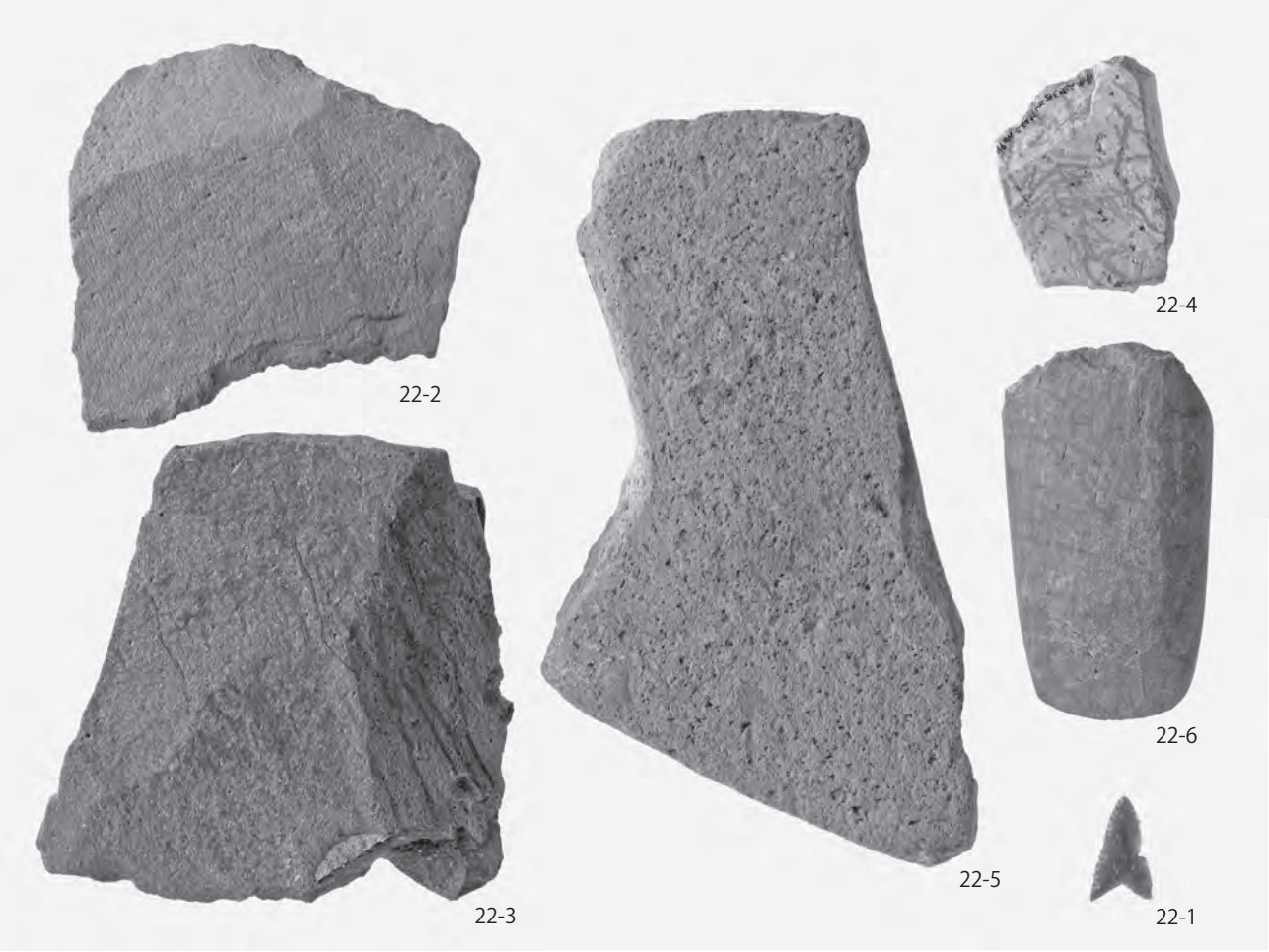
20-1

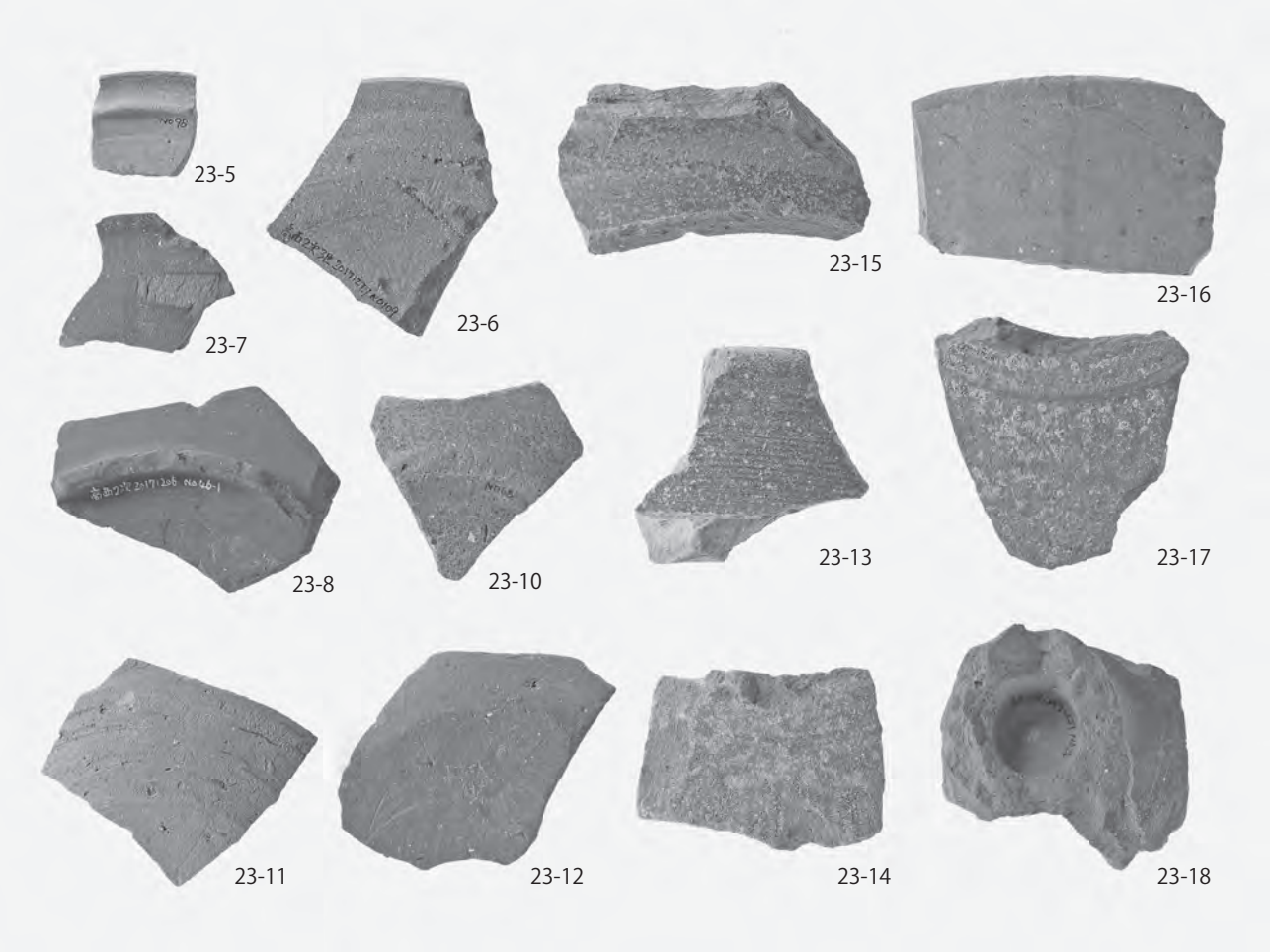

20-2

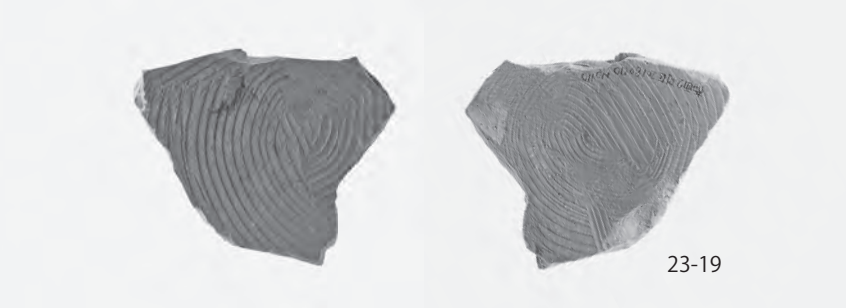

21-1
21-4
21-5
21-2
21-3
21-8
21-7

図版 10　3 層出土遺物


21-6
21-9
21-13
21-14
21-11
21-15
21-16
21-10
23-1
21-17
21-12
23-2
23-3


22-4
22-2
22-6
22-5
22-3
22-1


23-5
23-6
23-7
23-8
23-10
23-11
23-12
23-13
23-14
23-15
23-16
23-17
23-18

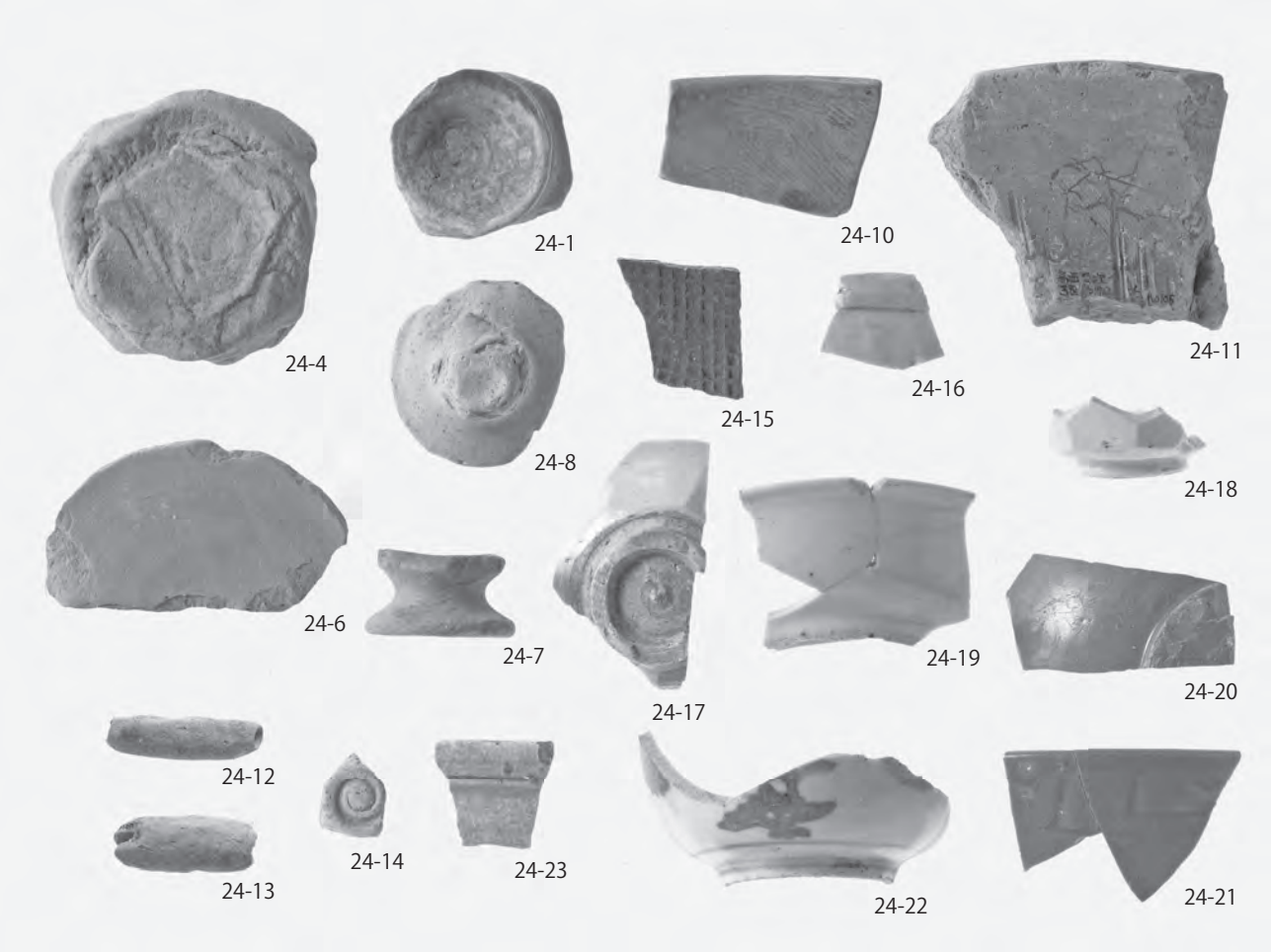

23-19

23-4

23-20

23-21

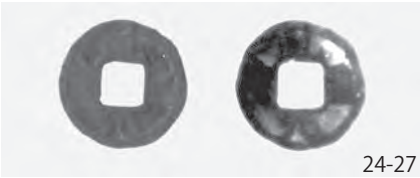
図版 12　3 層出土遺物


24-1
24-10
24-11
24-4
24-15
24-16
24-8
24-18
24-6
24-7
24-17
24-19
24-20
24-12
24-14
24-23
24-13
24-22
24-21

24-24

24-25

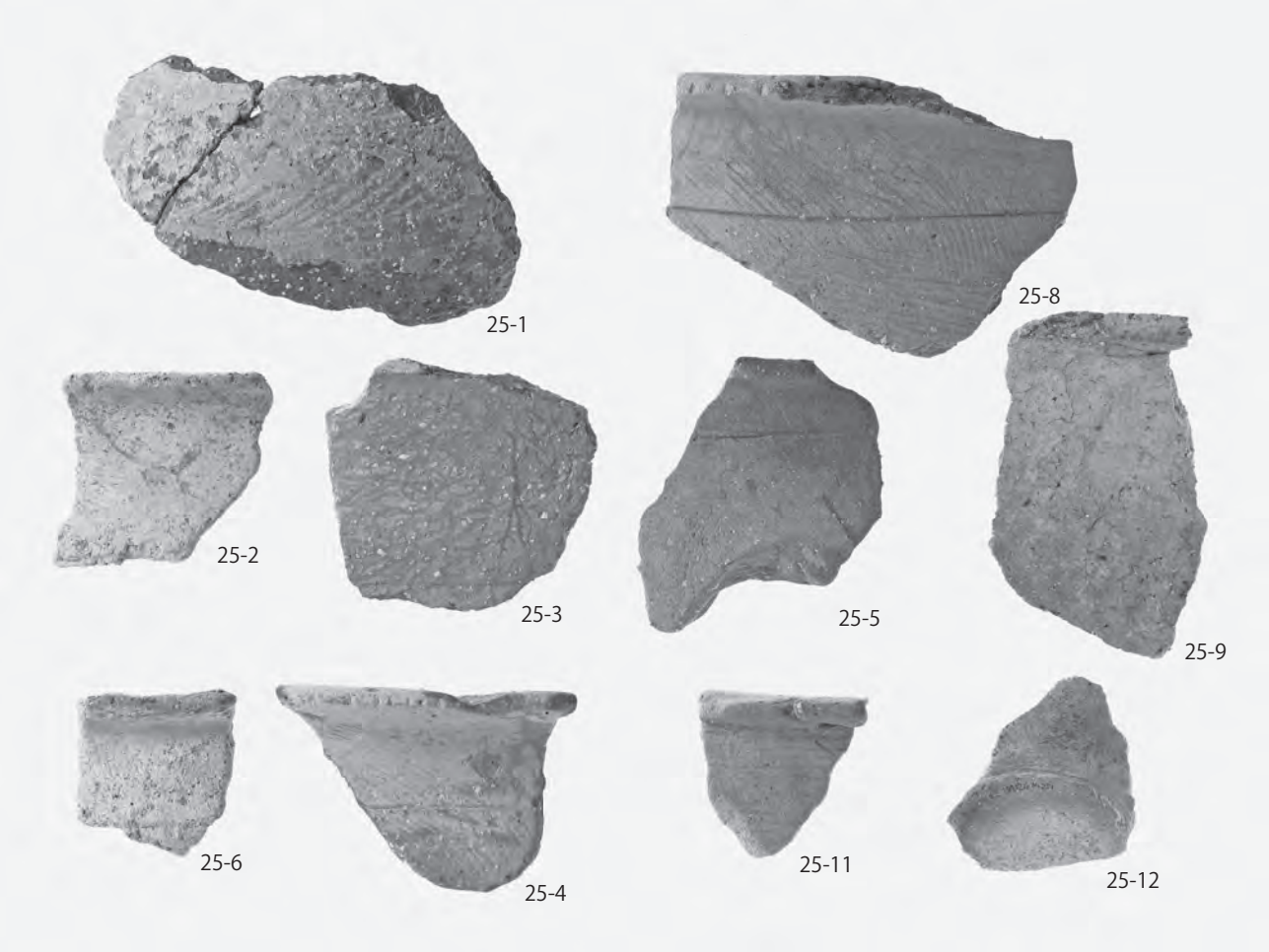
赤外線写真
24-25


24-27

24-28

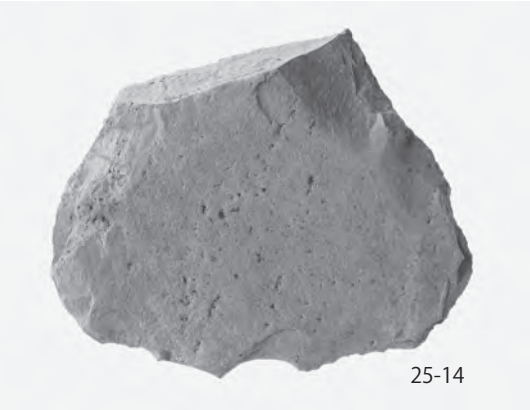
24-29

24-30

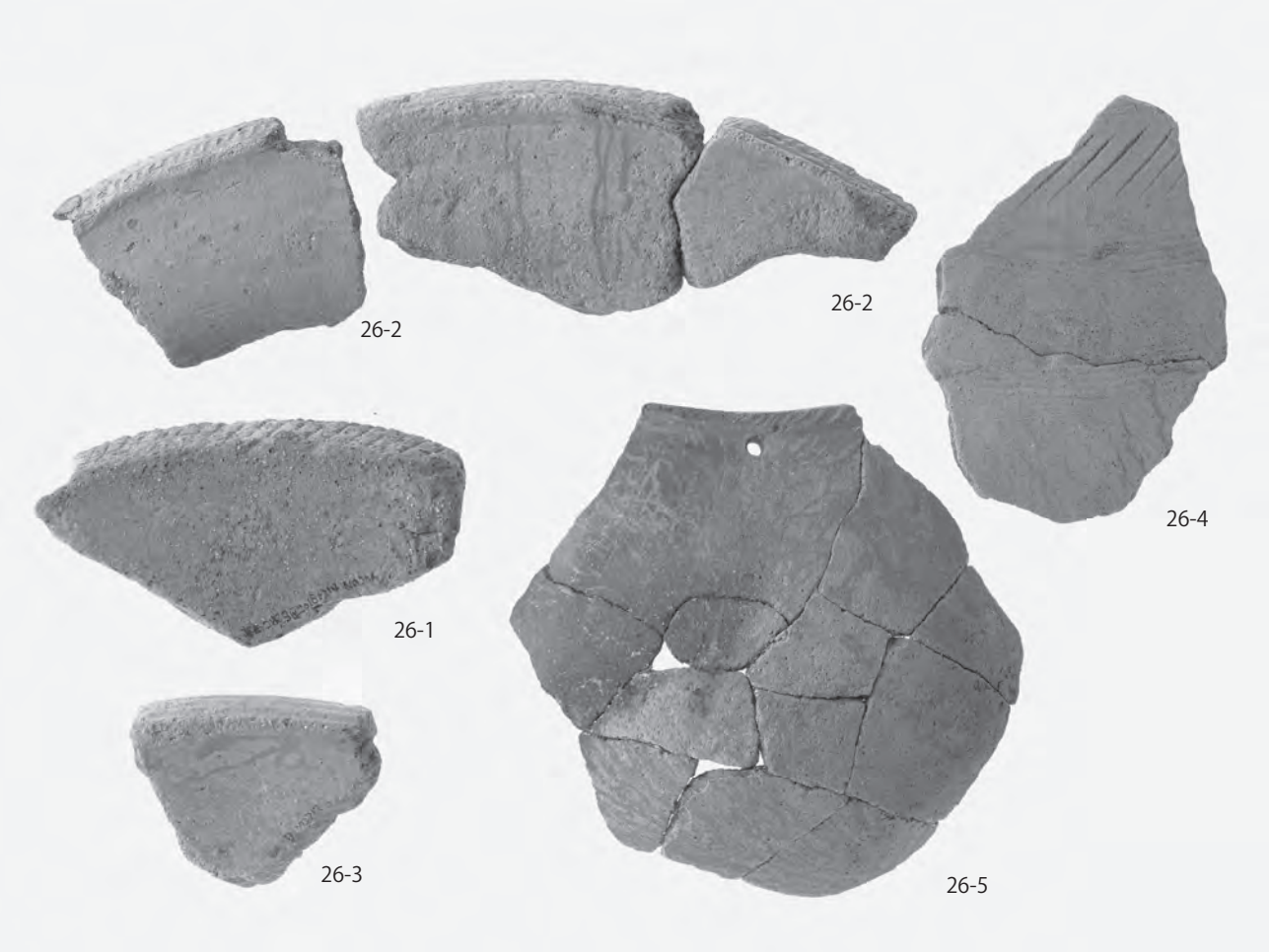

25-1
25-8
25-2
25-3
25-5
25-9
25-6
25-4
25-11
25-12

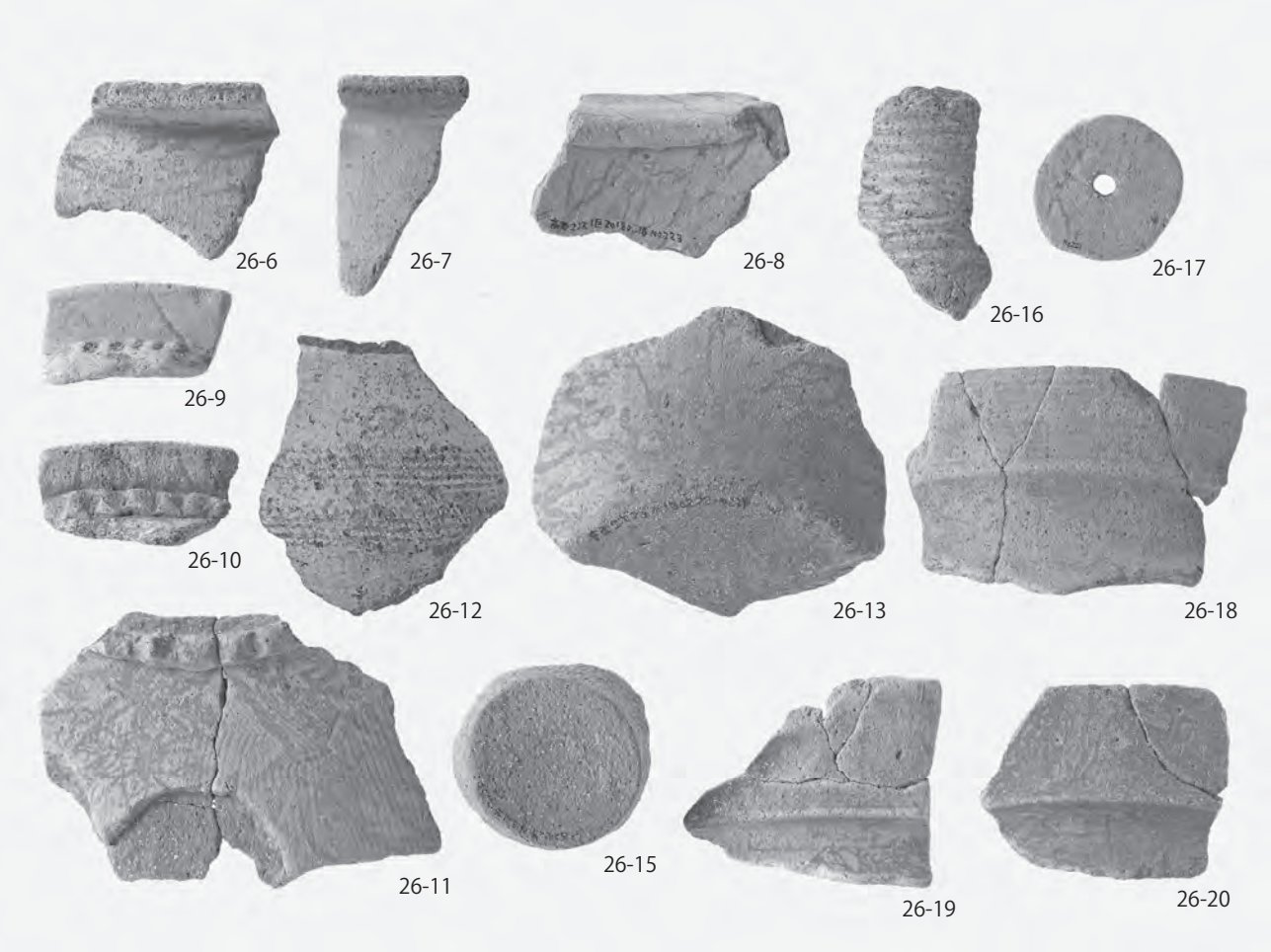
25-10

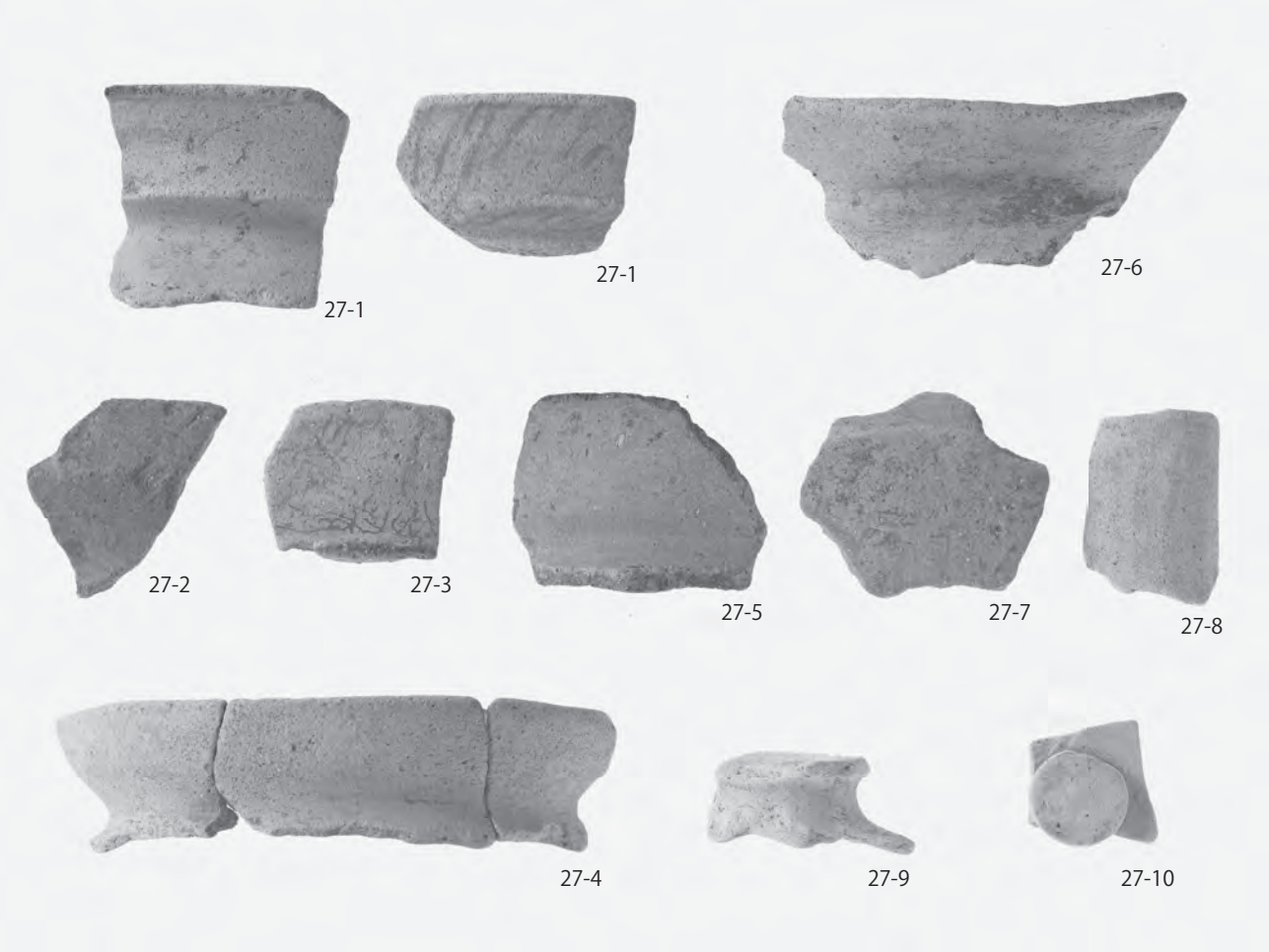
25-13

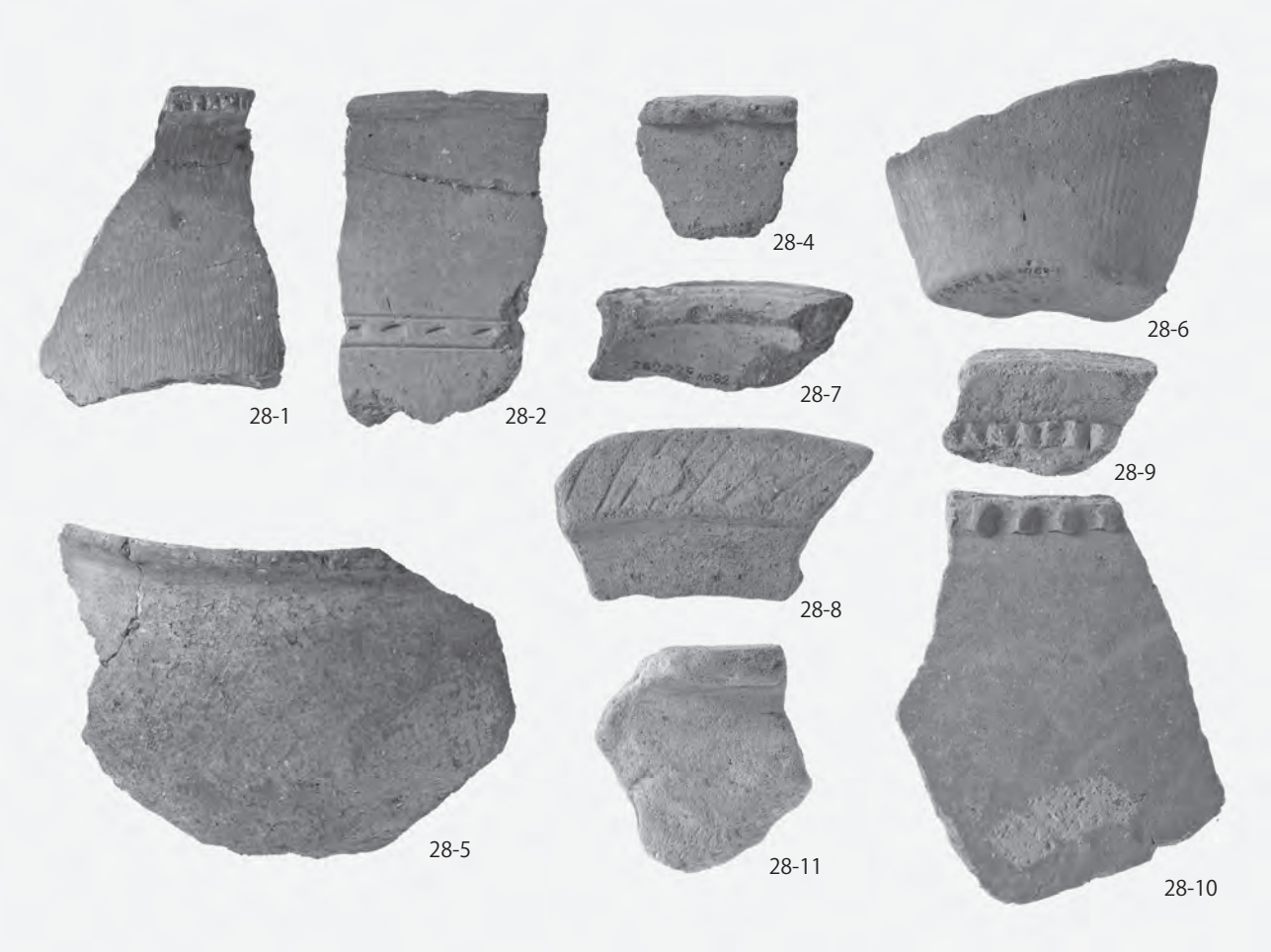

25-14

図版 14　　4 層出土遺物

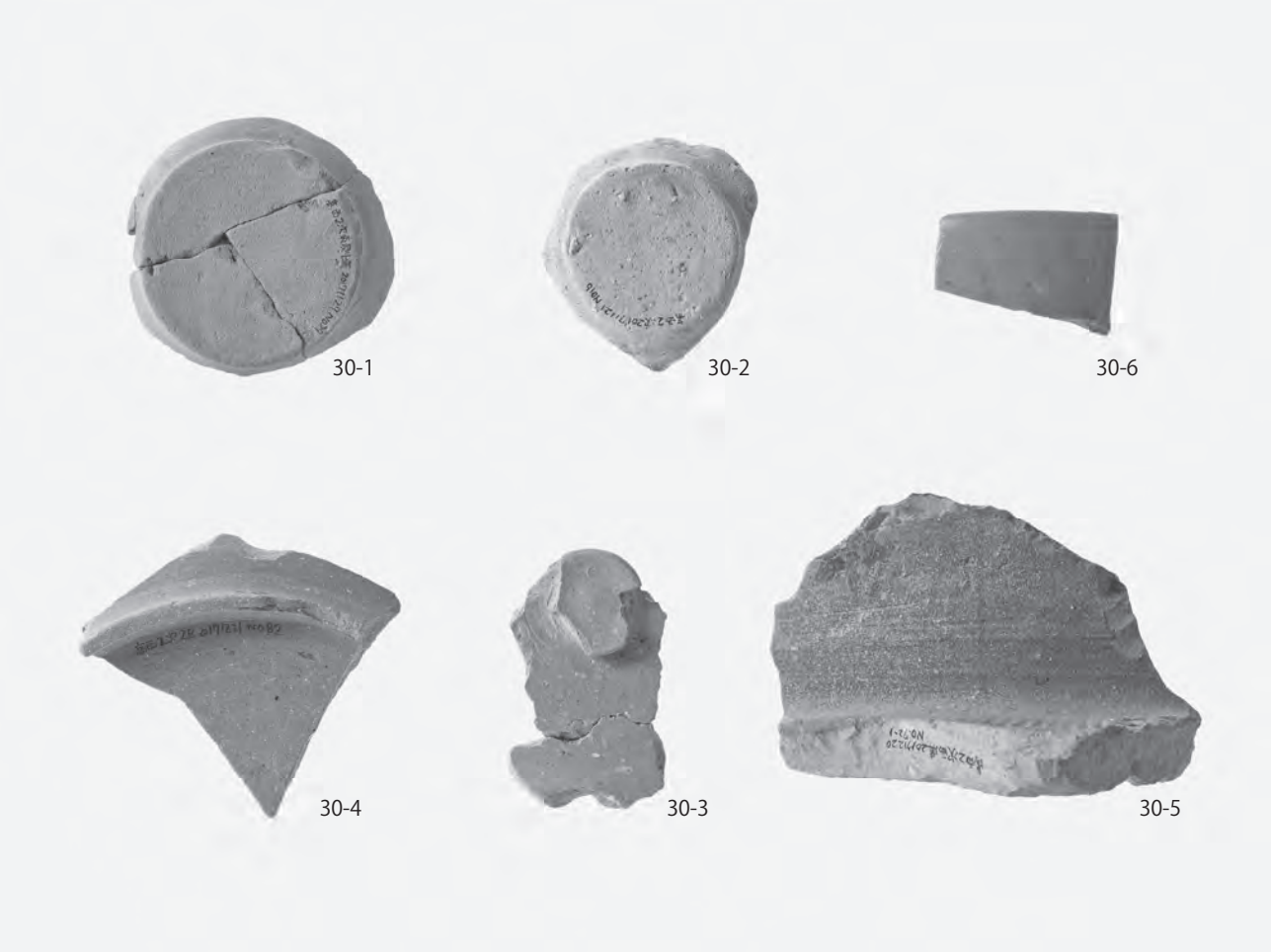

26-2
26-2
26-4
26-1
26-3
26-5


26-6
26-7
26-8
26-16
26-17
26-9
26-10
26-12
26-13
26-18
26-11
26-15
26-19
26-20


27-1
27-1
27-6
27-2
27-3
27-5
27-7
27-8
27-4
27-9
27-10


28-4
28-6
28-1
28-2
28-7
28-9
28-8
28-5
28-11
28-10

図版 16　3・4層出土遺物



報告書抄録

ふりがな	たかにしいせき　2
書　名	高西遺跡Ⅱ
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	40
編著者名	江角　健（編）　　髙橋　周　　渡辺正巳
編集機関	出雲市市民文化部文化財課
所在地	〒693-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL（0853）21-6618
発行年月日	2019（平成 31）年 3 月 28 日

ふりがな		コード		北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積
所収遺跡遺名	所在地	市町村	遺跡番号				
たかにしいせき 高西遺跡	しまねけんいずもし 島根県出雲市 えんやちょう　ぼんち 塩冶町 871 番地 3	32203	W 128 （島根県遺跡地図）	132° 45′ 05″	35° 21′ 19″	20171109 ～ 20180312	610㎡ 発掘要因 道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
高西遺跡	散布地	弥生時代～近世		土坑 溝		弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器 瓦 木製品 古銭	弥生時代の溝と奈良時代の刻書土器，中世の種子札，荷札木簡が出土。

要約

出雲都市計画道路事業［医大前新町線（4 工区）］に伴い，出雲市塩冶町の高西遺跡の第 2 次発掘調査を実施した。

調査において発見した遺構は，土坑 1 所と溝 3 条である。土坑の性格は不明である。溝は，近代の溝 SD201 が 1 区中央を東西方向に，弥生時代終末期から古墳時代後期の溝 SD202・SD203 は重複して調査区中央を南北方向に確認した。

遺物は，弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・瓦・木製品・古銭が出土した。文字資料として刻書土器，木簡が出土している。出土地点の南に奈良時代の神門寺境内廃寺が所在することから，刻書土器は寺院施設との関連が考えられる。木簡は形状や内容から，中世の種子札と考えられる。

出土遺物から，寺院や役所施設などとの関連が想定できる。

出雲市の文化財報告 40

高西遺跡Ⅱ

2019（平成 31）年　3 月

編　　集　出雲市市民文化部文化財課
〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地
TEL（0853）21-6618

発　　行　出雲市教育委員会
〒 693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地
TEL（0853）21-6874

印刷・製本　株式会社　報 光 社